八幡原遺跡（やわたはらいせき）

一般国道153号飯田バイパス（3工区）
用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

1992年

建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所
長野県飯田市教育委員会

八幡原遺跡

一般国道153号飯田バイパス（3工区）
用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

1992年

建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所
長野県飯田市教育委員会

八幡原遺跡全景

方形周溝墓 7

方形周溝墓 11

土 壙 墓 1， 2

序

近年の考古学ブームはといわれるなかで様々な調査・報告がなされていますが、考えてみればそれだけ地域における開発等が進んでいることの裏返しだと思います。

飯田市においても公共事業や民間開発に伴う発掘調査が増大しており、先人たちの生活の様子を示す事実をつぎつぎと確認しております。これらの事実ひとつひとつの積み上げが地域の歴史再構築に大きな役割を果たすといえます。

近年の社会情勢等の変化に伴い郡市民にとって永年の悲願である一般国道153号飯田バイパスは現在2工区の工事が進行中であり今年度中には共用が開始されるところです。

今回発掘調査した八幡原遺跡は、飯田バイパス3工区の建設に伴うもので市立病院建設予定地の東側に当たります。また、この段丘の縁部にある物見塚古墳・妙見山古墳はその存在が古くから知られていましたが、今回の調査で、方形周考墓群を中心にした墓域であることが確認でき、墓制に関する良好な資料が得られました。

内容については、本文中に記したとおりであり、今後の研究に供されることを希望しております。

発掘調査といえども文化遺産の破壊にちがいないのです。できることならば、現在までそうだったように、残っているままの姿で後世に継承していくことが私たちの責務だと感じています。しかし、現在生きている私たちにも生活があり、地域全体における今日的な課題解決の必要もあるわけです。地域社会の発展と文化財保護がうまく調和がとれた地域にすることがこれからの重要な課題だと考えます。

最後になりましたが、調査実施にあたり、その趣旨を深いご理解をいただいた建設省中部地方建設局および飯田国道工事事務所の皆様と、猛暑・酷寒の中での発掘作業を、また細かい整理作業に従事していただいた作業員の皆様に心よりの感謝を申し上げて、刊行の言葉といたします。

平成4年3月

飯田市教育長

小　林　恭之助

例　　言

1．本書は一般国道153号飯田バイパス3工区建設に伴う埋蔵文化財包蔵地八幡原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は建設省中部地方建設局飯田国道工事事務所の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。

3．発掘調査は試掘を含め平成2年6月29日～平成3年1月11日まで実施した。整理作業および報告書の作成作業は平成3年度に実施した。

4．発掘調査及び整理作業では、遺跡名の略号をＹＨＨとした。

5．本書の記載順は、時代順とし、遺構では住居址を優先した。但し、方形周溝墓については番号順に記した。

6．本書の記載は、遺構図を本文に併せて挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。

7．本書は佐合英治、吉川豊、馬場保之、渋谷恵美子の分担執筆し、それぞれの分担を文末に記した。なお、本文については一部小林正春がが加筆・訂正を行なった。

8．本書の編集は、調査員全員で協議により行ない、小林正春が総括した。

8．本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本 文 目 次

巻頭写真

序

例　　言

目　　次

Ⅰ 経　　過 …… 1

1 発掘に至るまでの経過 …… 1

2 試掘調査の経過 …… 1

3 発掘調査の経過 …… 2

4 整理作業の経過 …… 2

5 調査組織 …… 3

Ⅱ 遺跡の環境 …… 4

1 自然環境 …… 4

2 歴史環境と周辺遺跡 …… 4

Ⅲ 調査の結果 …… 9

1 縄文時代 …… 9

1) 住居址 …… 9

3号住居址 …… 9

7号住居址 …… 9

2) 土　　坑 …… 10

土坑 1 …… 10

土坑 2 …… 10

土坑 5 …… 11

土坑 7 …… 11

土坑 8 …… 11

土坑 9 …… 13

土坑 10 …… 13

土坑 12 …… 13

土坑 13 …… 13

土坑 14 …… 15

3) 集石炉 …… 15

集石炉 1 …… 15

集石炉2 …… 15
集石炉3 …… 15
集石炉4 …… 17
2 弥生時代 …… 18
1) 竪穴 …… 18
竪穴1 …… 18
3 古墳時代 …… 19
1) 方形周溝墓 …… 19
方形周溝墓1 …… 19
方形周溝墓2 …… 20
方形周溝墓3 …… 20
方形周溝墓4 …… 22
方形周溝墓5 …… 22
方形周溝墓6 …… 22
方形周溝墓7 …… 25
方形周溝墓8 …… 27
方形周溝墓9 …… 28
方形周溝墓10 …… 30
方形周溝墓11 …… 30
方形周溝墓12 …… 33
方形周溝墓13 …… 33
方形周溝墓14 …… 33
方形周溝墓15 …… 36
方形周溝墓16 …… 37
方形周溝墓17 …… 38
方形周溝墓18 …… 39
2) 土壙墓 …… 41
土壙墓1 …… 41
土壙墓2 …… 42
土壙墓3 …… 44
4 平安時代 …… 45
1) 住居址 …… 45
1号住居址 …… 45
2号住居址 …… 46

4号住居址 …… 46
5・6号住居址 …… 47
2) 土　　坑 …… 49
土 坑 3 …… 49
5 時代不明 …… 49
1) 掘立柱建物址 …… 49
掘立柱建物址 1 …… 49
2) 土　　坑 …… 49
土 坑 4 …… 49
土 坑 6 …… 51
土 坑 11 …… 51
3) 溝 …… 51
溝 1 …… 51
溝 2 …… 53
溝 3 …… 53
溝 4 …… 54
溝 5 …… 54
溝 6 …… 59
溝 7 …… 59
溝 8 …… 59
溝 10 …… 60
4) 溝 状 址 …… 60
溝状址 1 …… 60
溝状址 2 …… 60
溝状址 3 …… 62
溝状址 4 …… 62
5) 集　　石 …… 62
集 石 1 …… 62
6) そ の 他 …… 63
(1) 柱 穴 群 …… 63
(2) 攪　　乱 …… 66
(3) 遺構外出土遺物 …… 69
Ⅳ ま と め …… 74
Ⅴ 引用参考文献 …… 78

挿 図 目 次

挿図1　調査遺跡および周辺遺跡位置図 …… 6
挿図2　調査位置図および周辺地図 …… 7
挿図3　3号住居址 …… 9
挿図4　7号住居址 …… 10
挿図5　土坑1、2、5、7、8 …… 12
挿図6　土坑9、10、12、13、14 …… 14
挿図7　集石炉1、2 …… 16
挿図8　集石炉3、4 …… 17
挿図9　竪　穴　1 …… 18
挿図10　方形周溝墓1 …… 19
挿図11　方形周溝墓2 …… 20
挿図12　方形周溝墓3 …… 21
挿図13　方形周溝墓4 …… 23
挿図14　方形周溝墓5 …… 24
挿図15　方形周溝墓6 …… 25
挿図16　方形周溝墓7 …… 26
挿図17　方形周溝墓8 …… 27
挿図18　方形周溝墓9 …… 28
挿図19　方形周溝墓10 …… 29
挿図20　方形周溝墓11 …… 31
挿図21　方形周溝墓11主体部 …… 32
挿図22　方形周溝墓12 …… 34
挿図23　方形周溝墓13 …… 35
挿図24　方形周溝墓14 …… 36
挿図25　方形周溝墓15 …… 37
挿図26　方形周溝墓16 …… 38
挿図27　方形周溝墓17 …… 39
挿図28　方形周溝墓18 …… 40
挿図29　土壙墓1 …… 41
挿図30　土壙墓2 …… 43
挿図31　土壙墓3 …… 44

挿図32　1号住居址 …… 45
挿図33　2号住居址 …… 46
挿図34　4号住居址 …… 47
挿図35　5・6号住居址 …… 48
挿図36　掘立柱建物址1 …… 49
挿図37　土坑3、4、6、11 …… 50
挿図38　溝　1 …… 52
挿図39　溝2、3、4、5、6、8 …… 55～56
挿図40　溝　7 …… 57～58
挿図41　溝　10 …… 60
挿図42　溝状址1、2、3、4 …… 61
挿図43　集石　1 …… 62
挿図44　土坑1付近柱穴群 …… 63
挿図45　土坑2付近柱穴群 …… 64
挿図46　土坑4付近柱穴群 …… 65
挿図47　4、5、6住居址付近柱穴群 …… 66
挿図48　土坑8付近柱穴群 …… 67
挿図49　土坑7、8付近柱穴群 …… 68
挿図50　土坑13付近柱穴群（その1） …… 69
挿図51　土坑13付近柱穴群（その2） …… 70
挿図52　ⅢＴＬ4付近柱穴群 …… 71
挿図53　ⅢＸＬ4付近柱穴群 …… 72
挿図54　方形周溝墓4付近柱穴群 …… 73

付　図　目　次

付図1　八幡原遺跡遺構分布図（その1）
付図2　八幡原遺跡遺構分布図（その2）

図　版　目　次

第1図　3号住居址出土遺物 …… 81
第2図　3号・7号住居址出土遺物 …… 82
第3図　7号住居址出土遺物 …… 83
第4図　土坑1・2・5・12・13出土遺物 …… 84
第5図　土坑14、集石炉1・2出土遺物 …… 85
第6図　竪穴1、方形周溝墓1・2・3出土遺物 …… 86
第7図　方形周溝墓4・5・6・7出土遺物 …… 87
第8図　方形周溝墓7・8出土遺物 …… 88
第9図　方形周溝墓9・11出土遺物 …… 89
第10図　方形周溝墓12・13・14・15出土遺物 …… 90
第11図　1号住居址出土遺物 …… 91
第12図　2・4号住居址出土遺物 …… 92
第13図　5・6号住居址出土遺物 …… 93
第14図　土坑3・11、溝址2出土遺物 …… 94
第15図　溝址4・5出土遺物 …… 95
第16図　遺構外出土遺物（その1） …… 96
第17図　遺構外出土遺物（その2） …… 97
第18図　遺構外出土遺物（その3） …… 98
第19図　遺構外、方形周溝墓11、土壙墓2出土遺物 …… 99
第20図　土壙墓1出土鉄器（その1） …… 100
第21図　土壙墓1出土鉄器（その2） …… 101
第22図　土壙墓2出土鉄器 …… 102
第23図　土壙墓2、方形周溝墓11出土鉄器 …… 103～104

写真図版目次

図版1　（巻頭）八幡原遺跡全景 …… I
図版2　（巻頭）方形周溝墓7 …… II
図版3　（巻頭）方形周溝墓11 …… III
図版4　（巻頭）土壙墓1、2 …… IV
図版5　3号住居址と溝址3、7号住居址 …… 107
図版6　土坑1、土坑2、土坑5 …… 108
図版7　土坑7、土坑8、土坑9 …… 109
図版8　土坑10、土坑13、土坑14 …… 110
図版9　集石炉1、集石炉2、集石炉3 …… 111
図版10　弥生時代の竪穴1、平安時代の土坑3 …… 112
図版11　1号住居址、2号住居址 …… 113
図版12　4号住居址、5・6号住居址 …… 114
図版13　掘立柱建物址1、土坑4、溝状址3・4 …… 115
図版14　溝址1と攪乱、溝址3・4、溝址7 …… 116
図版15　方形周溝墓1、方形周溝墓2と4 …… 117
図版16　方形周溝墓3、方形周溝墓5 …… 118
図版17　方形周溝墓6、方形周溝墓8 …… 119
図版18　方形周溝墓9、方形周溝墓10 …… 120
図版19　方形周溝墓11、同主体部 …… 121
図版20　方形周溝墓13、方形周溝墓14 …… 122
図版21　方形周溝墓15、方形周溝墓16 …… 123
図版22　方形周溝墓17、方形周溝墓18 …… 124
図版23　土壙墓1、土壙墓2 …… 125
図版24　3号・7号住居址、集石炉1・2出土遺物 …… 126
図版25　土坑1・13・14、竪穴1出土遺物 …… 127
図版26　1号・2号住居址出土遺物 …… 128
図版27　5・6号住居址出土遺物 …… 129
図版28　土坑3・11、溝址2・4・5出土遺物 …… 130
図版29　方形周溝墓3・4・7出土遺物 …… 131
図版30　方形周溝墓11　出土遺物 …… 132
図版31　方形周溝墓12・14・15出土遺物 …… 133

図版32　土壙墓1出土遺物 …… 134
図版33　土壙墓2出土遺物 …… 135
図版34　遺構外出土遺物 …… 136
図版35　作業風景、方形周溝墓7の掘り下げ、集石炉の断面調査 …… 137
図版36　写真撮影、遺構測量、見学会 …… 138

Ⅰ 経　　過

1．発掘に至るまでの経過

一般国道153号飯田バイパスの建設工事に先立って実施してきた埋蔵文化財発掘調査は平成元年度までに２工区である飯田市鼎地籍を完了した。

３工区は松尾地籍に入り、平成４年10月開院の新飯田市立病院の東側、八幡原と松尾久井地区を分ける段丘の縁部（通称妙見山）を通過し、さらに東にのびる計画が示されている。

八幡原遺跡は飯田市八幡町および鼎名古熊に広がる段丘上に位置している。鼎は飯田松川の河岸段丘に発達した地区であり、大きく４段の段丘が認められるが、各所に細かい段丘も形成されている。八幡原もこの小段丘のひとつであり、下段である下山段丘面と名古熊段丘面との中間に位置し、飯田長姫高校が建つ矢高原の南側上段である。東南側では国道151号が通る飯田市松尾久井地籍と高低差約50ｍの崖により区切られている。

建設計画地は埋蔵文化財包蔵地八幡原遺跡として登録されている。また、この段丘の縁部には２基の古墳の存在が知られており、（物見塚古墳・妙見山古墳）それに関連する遺構の存在も考えられるため、建設省飯田国道工事事務所および長野県教育委員会文化課、飯田市教育委員会それぞれの担当職員による現地協議を実施した。その結果、用地内全域の試掘調査を行ない埋蔵文化財包蔵地の具体的な状況を把握し、それに基づき再度協議を行なうこととした。

2．試掘調査の経過

平成２年６月29日、協議に基づき試掘調査に着手した。調査方法は予定地内にほぼ10ｍに３個の割合で２×２ｍのグリッドを人力により掘り下げ、地下の様子を見ることとした。用地内には桑・梅等の立ち木や雑草が茂っており、グリッド設定に時間がかかった。

妙見山には伐採した材木が積まれ、さらに後日伐採予定の檜・松の立木が残されており、継続して試掘を実施する事ができず、後日重機によりトレンチ調査を行なうこととした。

試掘の結果、３工区の起点からセンター杭180までの間は、遺構・遺物が確認できず遺跡範囲外と判断した。また段丘崖の急斜面となるセンター杭190以東も遺跡であるが、調査不可能と判断した。

また、延び延びになっていた妙見山中の試掘は７月中旬まで待っても材木等の片付けが行なわれないため、21日に重機を入れて実施したが、調査地の選定に制約があり、また、部分的な調査しかなし得ず溝址等なんらかの遺構の存在を確認したが具体的な状況はつかめなかった。

3．発掘調査の経過

試掘調査の結果、本発掘を実施することとした範囲は、新市立病院の東方一帯の同一段丘面上の妙見山及びそれに続く段丘面上とした。なお、試掘調査に支障をきたした調査予定地内における立ち木等の片付けを開始したのは7月18日からである。

調査区は、センター杭180を起点にセンター杭190までを50mごとに分けⅠ～Ⅳ区とした。調査は桑・梅及び立木伐採後の株を撤去しながら重機による表土剥ぎ作業を次のように実施した。調査Ⅰ区の内センター杭180からセンター杭182までの南側半分と調査Ⅱ区・Ⅲ区のセンター杭184からセンター杭186の東側から実施し、終了は8月3日であった。

作業員による遺構を検出作業は、少し日をおいた8月29日からである。調査Ⅰ区から実施し、住居址2軒・土坑4基および土取り場と見られる落ち込みを確認した。引き続きⅡ区の検出、掘下げを実施した。その間にⅣ区およびⅢ区の表土剥ぎを行ない、Ⅱ区の調査終了後に遺構の検出、掘下げも実施した。

実施にあたり、道路がセンター杭183付近から北にカーブするため、調査Ⅰ区の測量用の起軸はN83°Eであり、ほぼ直線になるⅡ・Ⅲ・Ⅳ区ではN66°Eとしたため、一部重複する箇所等もでてしまった。

10月後半になり、段丘に面した傾斜地部分より方形周溝墓群の存在が確認されたため、立ち木の伐採、抜根等を実施し調査範囲を拡張した。結局、方形周溝墓は18基を確認し、調査を行なった。その他にも土壙墓3基が確認でき、墓制の変遷を知るための良好な資料が得ることができた。

発掘作業は平成2年内に終了したが、実測作業が残り現場での作業は年を越した。結局すべての作業が終了したのは1月11日である。

4．整理作業の経過

平成3年度になり、報告書の刊行作業を飯田市考古資料館において実施した。

出土遺物については、まず洗浄・注記・復元を実施した。水洗いの最中に墓壙から持ち帰った土から臼玉を発見した。つづいて、復元できた遺物の実測・写真撮影を行なった。

また、遺構図については、遺構ごとのトレースを行ない、全体図の作成も併せて実施した。実測できた土器および石器はトレースし、写真整理も併せて実施し、報告書掲載用の図版組みを行なった。原稿は、各調査員が分担し執筆した。これらの作業はほぼ1年かかりようやく報告書の刊行となった。（吉川）

5. 調査組織

(1) 調査団

調査担当者	小林　正春				
調査員	吉川　豊	佐々木嘉和	佐合　英治	馬場　保之	渋谷恵美子
	市瀬　長年	今村　春一	大島　利男	木下　傳	木下　当一
	北村　重実	窪田多久三	坂下やすゑ	清水　三郎	高木　義治
	高橋収二郎	滝上　正一	豊橋　宇一	中平　隆雄	福沢トシ子
	細田　七郎	正木実重子	松下　成司	松下　真幸	松下　直市
	松島　卓夫	森　　章	矢沢　博志	吉川　正実	
	井原　恵子	池田　幸子	大蔵　祥子	金井　照子	金子　裕子
	唐沢古千代	唐沢さかえ	川上みはる	木下　早苗	木下　玲子
	櫛原　勝子	小池千恵子	小平不二子	小林　千枝	渋谷千恵子
	田中　恵子	筒井千恵子	丹羽　由美	萩原　弘枝	原沢あゆみ
	林　勢紀子	樋本　宣子	平栗　陽子	福沢　育子	福沢　幸子
	牧内喜久子	牧内とし子	牧内　八代	松本　恭子	三浦　厚子
	南井　規子	宮内真理子	森　　信子	森藤美智子	吉川　悦子
	吉川紀美子	吉沢まつ美	若林志満子		

(2) 事務局

飯田市教育委員会

竹村　隆彦	飯田市教育委員会社会教育課長	（平成２年度）
安野　　節	〃	（平成３年度）
中井　洋一	飯田市教育委員会社会教育課文化係長	
小林　正春	飯田市教育委員会社会教育課文化係	
吉川　　豊	〃	
馬場　保之	〃	
渋谷恵美子	〃	（平成３年度）
篠田　　恵	〃	

Ⅱ　遺跡の環境

1．自然環境

伊那谷の基本的な地形は、天龍川の流れに沿ったほぼ南北方向への段丘地形を特徴としている。

松尾地区と鼎地区が境を接している箇所は、松尾地区の南側を北から南に流れる天龍川により形成された河岸段丘を飯田松川が解析した形になっており、複雑な地形を呈している。

鼎地区が位置する河岸段丘はこの飯田松川が形成したものであり、すべての段丘面は西から東に傾斜しながらその幅を徐々に広げている。また、小さな段丘は各所に見られ、東の上部に位置する矢高原面や八幡原面もこれらの小段丘にあたる。

天龍川により形成された段丘崖は北から南に伸びている。そして祝詞ヶ洞、祝井沢川等の小河川によりいくつかにわかれ、それぞれに名前が付いている。北から上の城・茶柄山、妙見山、八幡山、代田山と南へつながっている。

八幡原の段丘崖が妙見山と呼ばれるのは、松尾北の原（常盤台）から旧秋葉街道へおりる道の西側の山中に北晨神社（妙見神社）があるためである。

八幡原段丘は東西に長さ約600m、南北に幅約200mの三角形であり、まわりの段丘との高低差は、北側で一段低くなる矢高原（北の原）とは15m、東側の一段下である久井地区とは約50mの差があり、南側は一段上になる八幡山との高低差は10mである。

前記のとおり段丘突端部に位置するため、自然水利はほとんどなく、わずかに湧水が見られるのは妙見山と八幡山の段丘崖を流れる祝詞ヶ洞のみである。また、南側に段丘崖があるものの日照を妨げるほどの高さではないが、北風や西風をさえぎるものがないため、冬はかなり寒くなる。以上の条件から判断して、生活の場としては不向きであろう。

なお、現在この段丘面では飯田市立病院の建設が進行中である。　（吉川）

2．歴史環境と周辺遺跡（挿図1）

八幡原およびその周辺においても、先人たちの生活した痕跡がいくつか確認されている。時代順に概観してみる。

旧石器時代の遺物が採取された遺跡としては、八幡原遺跡よりマイクロブレイドが、また、その一段下で飯田長姫高校の敷地となっている猿小場遺跡よりナイフ形石器の出土が知られている。断片的な資料ではあるが八幡原および矢高原一帯にその頃から人々の生活があったと見られる。

縄文時代早期の遺跡は各所より若干量の遺物出土例があるが、不明な点が多い。

前期としては八幡原遺跡及び田井座遺跡において竪穴住居址・集石炉が確認されている。

中期になると日向田遺跡、柳添遺跡、猿小場遺跡において良好な資料が確認できている。

後期・晩期の資料は、遺構に伴う土器の出土がなく、断片的でしかない。遺跡としては六反畑遺跡等がある。

弥生時代は多くの発掘例がある。清水遺跡・田井座遺跡・一色遺跡等で住居址および方形周溝墓を確認している。この時代の生活中心域は、当八幡原段丘面東方及び北方に位置する低位の段丘上にあるといえる。

現存する古墳の数から見れば松尾地区は、座光寺地区・竜丘地区と並んで多い地区である。八幡原には、飯田市立病院建設に先立ち発掘調査した物見塚古墳と今回の調査地点に接する妙見山古墳の2基の存在が知られている。また、八幡山中には帆立貝型古墳と見られる八幡山古墳が現存している。これらの古墳は崖の縁部に構築されている。また、八幡原の一段下になる北の原には、前方後円墳である御射山獅子塚とその周辺に茶柄山古墳群がある。さらに下段にあたる久井・八幡町には八幡町公民館の用地内には町古墳があり、発掘調査を実施した。さらに上溝地区には前方後円墳である天神塚・姫塚・おかん塚古墳等をもつ古墳群が広がっている。

これまでに調査した遺跡から判断すれば、これらの古墳を構築した人々は、北側に広がる鼎地区の人々よりはむしろ、東側の下段に広がる松尾地区に居住していた人々と考えられる。それを示す集落遺跡としては、城遺跡・寺所遺跡・清水遺跡などがある。その中でも清水遺跡や城遺跡では、古墳時代前期の集落址が確認できた。鼎地区にも古墳時代の集落址はあるが、六反畑遺跡、柳添遺跡、黒河内遺跡であり、これらの古墳からはかなり離れている。

平安時代の集落址として確認できたのは猿小場遺跡がある。この遺跡では25軒の住居址を調査し大規模な集落址であることがわかった。また、日向田遺跡においては、住居址が確認されている。

中世に入ると、田井座遺跡において竪穴遺構から常滑焼きの大甕が出土しているが、性格等は不明である。また、猿小場遺跡で確認した建物址は一般の住居というよりも倉庫の可能性が高い。

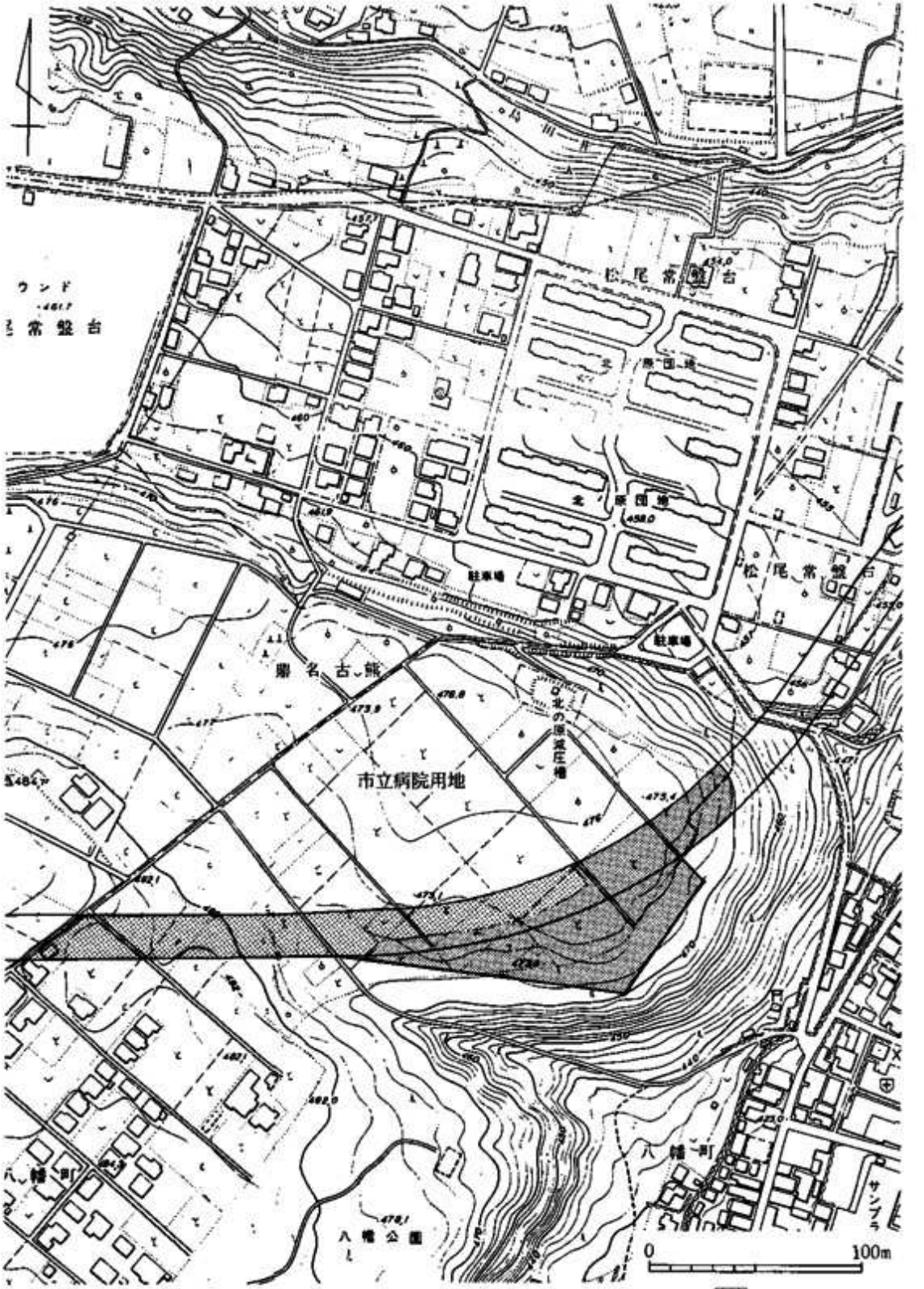
今回の調査地点の南東側段丘崖には、うっそうとした社叢に囲まれた鳩ヶ嶺八幡宮があり、鎌倉時代の文献によりすでにその存在が明らかである。本尊として奉られている誉田別尊坐像は重要文化財に指定されている。

近世にはいり、城跡として県の史跡に指定されている、信濃守護職である小笠原氏に係わる松尾城跡・鈴岡城跡が南にある。さらに北の原の東端に「上の城」という地名が残り城跡あるいは居館跡があったとも言われている。

八幡には旧街道が2本通っていた。そのうち1本が秋葉街道、現在の国道152号である。この街道は武田信玄の信州侵略により整備されたものである。もう1本は遠州街道、現在の国道151号であり、中馬道として江戸時代に発達した。この2本の街道の分岐点が鳩ヶ嶺八幡宮の前になり、現在でも道標が立っており、交通の要所であることを示している。　（吉川）

1．八幡原遺跡 2．北の原遺跡 3．猿小場遺跡 4．矢高原遺跡 5．村沢遺跡 6．上の城遺跡
7．久井遺跡 8．代田遺跡 9．城遺跡 10．南の原遺跡 11．鼎東平遺跡 12．地蔵面遺跡
13．名古熊下遺跡
A．妙見山古墳 B．物見塚古墳 C．鼎大塚古墳(遠騨台) D．鞍骨古墳 E．御射山獅子塚
F．茶柄山古墳 G．おかん塚古墳 H．天神塚古墳 I．姫塚古墳 J．水佐代獅子塚
K．八幡山古墳 L．代田山2号古墳 M．代田山獅子塚古墳

挿図1　調査遺跡および周辺遺跡位置図



挿図2　調査位置図および周辺地図

Ⅲ 調 査 の 結 果

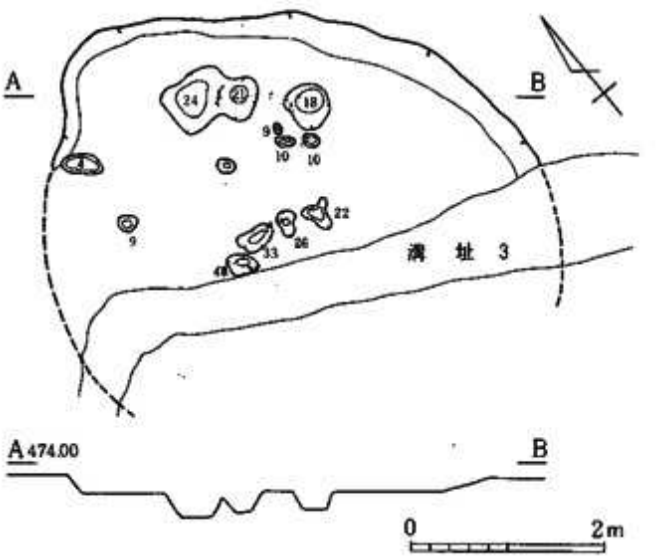
1. 縄 文 時 代

1) 住 居 址

◇3号住居址（挿図3、第1・2図）

調査範囲のほぼ中央でやや西によって検出した。試掘の時にすでになんらかの遺構の存在は確認していたが、グリッド調査のため全容が掴めなかった。表土を剥いだことにより褐色の覆土をもつ竪穴住居址であることがわかった。

規模は直径5mの円形と考えられるが南半分が畑の造成により削平され、さらに中央部分を溝3により切られているため、調査できた部分は全体のほぼ半分であった。



挿図3　3号住居址

壁が残っているのは東側半分であるが、掘り込みは25cmであるが比較的緩やかな立ち上がりである。床は柔らかくはっきりしないが、床面にはいくつかの穴が見られる。しかし、主柱穴を特定することはできなかった。また、炉の所在も不明だった。

遺物としては、石器が中心で、覆土中から黒曜石の破片が多く出土している。（1図2～8）また、石匙もある（1図1）。硬砂岩の敲打器は二分し別々の穴から出土した。（2図1）　石器に比べ土器は少なく小破片のみであり、器形は不明である。しかし、いずれの破片にも細い沈線文が施されている。（2図3～5）

出土土器からの判断であるが、縄文時代前期の遺構である。　（吉川）

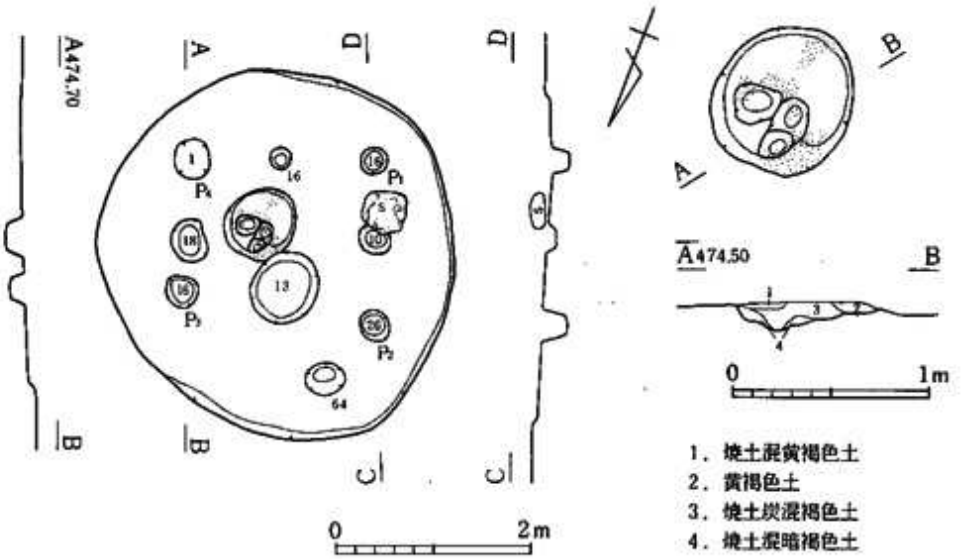
◇7号住居址（挿図4、第2・3図）

調査範囲の中央やや東より方形周溝墓群の中で検出した。直径3.8mの円形である。壁は東側半分はほとんど残っていない。西側半分は残っているものの5cm前後とごく浅い。床は柔らかく明瞭でない。床には直径30cm前後の穴が7個円形に並んでいる。北西端に位置するものが深さ64cmであった以外は深さ15cm前後であるがいずれも主柱穴と見られる。

また、中央にあった直径60cmの焼土部分は、地床炉と判断した。その北西に直径70cm、深さ13cmの穴があるが、性格は不明である。

覆土中からの出土遺物としては、細い沈線文を施した深鉢の破片があり波状口縁をなす。（2図10）黒曜石の石鏃が3個（2図6～8）とチップが多数出土した。また、硬砂岩製の横刃形石器及び打製石斧の出土もあった（3図)。その他にも数点の用途不明の石があった。

出土土器から縄文時代前期に比定される。（渋谷）



挿図4　7号住居址

2）土　　坑

◇土坑1（挿図5、第4図）

調査区の西端に近く、センターよりで検出した。表土剥ぎでは確認できずトレンチをあけて遺構の有無を調べたところその所在が確認できた。

直径約1.2mの円形、深さ39cmを計る。底部はほぼ平坦であるが、北方向へやや傾斜している。壁は比較的急角度に立上がり、断面で逆台形になる。

暗褐色の覆土中からは、土器としては、破片であるが縄文を施したものと半裁竹管文を施した口縁部片が（4図1）、石器としては、硬砂岩製の打製石斧が出土している（4図2)。

出土遺物から縄文時代の遺構であるが、詳細時期は不明である。（吉川）

◇土坑2（挿図5、第4図）

土坑1から東側約10mのところで検出し、完掘した。1.8×1.5mの不整楕円形である。深さは161cmと深く、底はやや中央が高くなっているが、おおむね平らである。ほぼ中央

には直径12cmほどの穴がある。この穴は斜めに掘られており、深さは36cm程ある。壁は急角度に立ち上がっているが、東側には中段がある。

遺物は縄文を施した小破片と打製石斧が出土したのみである。形態から判断すれば落し穴と考えられ、縄文時代の遺構と見られるが、詳細時期は不明である。（吉川）

◇土坑5（挿図5、第4図）

3号住居址の東側は、やはり表土剥ぎだけでは遺構の確認ができず、さらに深さ10cm程度ローム漸移層を掘り下げた。この作業により検出した土坑である。

1.6×1.4mの円形に近い楕円形である。深さは90cmと深く底はほぼ平坦である。また、中央には深さ10cm前後の穴が2個ある他、壁際にも直径10cm程度、深さ7cm程度の穴が4個あった。南側の壁には中段がある。また、途中には稜がある。壁の立上がりもこの稜で変わる。下半分は垂直に立ち上がっているが、上半分はその角度がやや緩くなる。

遺物としては、土器の小破片（4図5）と硬砂岩のチップが出土したが図化できなかった。

形態からみれば、落とし穴と考えられる。縄文時代の遺構と判断できるが詳細時期は不明である。（吉川）

◇土坑7（挿図5）

土坑5の北西で同様の作業を実施中に検出した。

1.8×1.6mの楕円形のものである。深さは132cmと非常に深い。底部は中央がやや窪んでおり、低い部分に直径30cm深さ39cmの穴がある。壁はほぼ垂直に掘られているが、途中に稜をもっている。

遺物の出土はなかった。

形態が土坑2と酷似しているところから、落とし穴と考えられる。縄文時代と見られるが、詳細時期は不明である。（吉川）

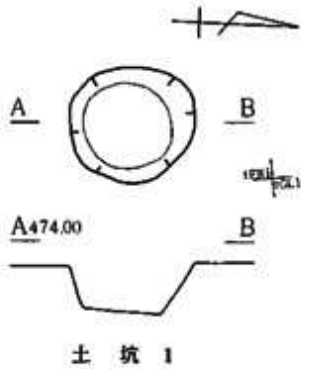
◇土坑8（挿図5）

土坑7の北西、道路用地のセンターに近い場所で検出した。

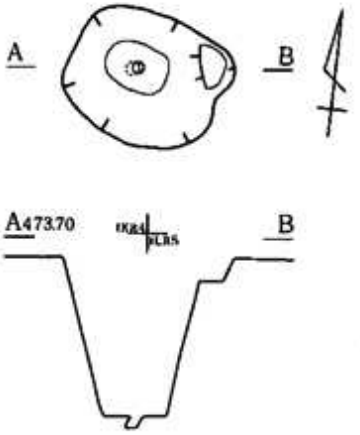
上部西側で他の穴に切られているため、全体には2×1.4mの楕円形に見えるが、この土坑の本来の大きさは1.4×1.4mの隅丸方形である。深さは110cmあり、かなり深い。底はほぼ平坦であるが、中央に向かってごくわずか窪んでいる。中央には直径20cm深さ35cmの穴が南に向かって斜めに開いている。壁には途中に稜があり、立上がりの角度もその稜より下はほぼ垂直であるが、上方はやや緩い。

遺物の出土はなかった。

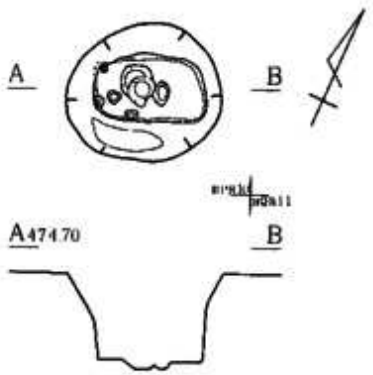
形態が土坑2および7と酷似しているところから、落とし穴と考えられる。縄文時代と見られるが、詳細時期は不明である。（吉川）



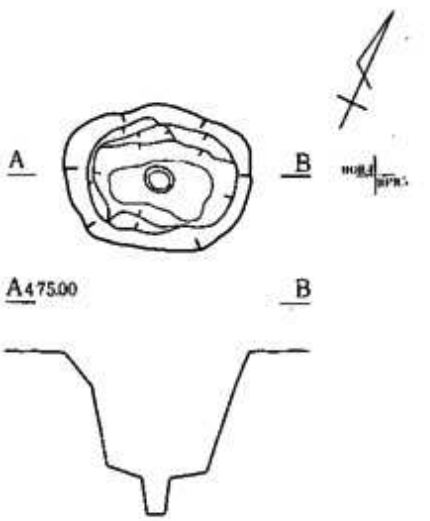
土 坑 1



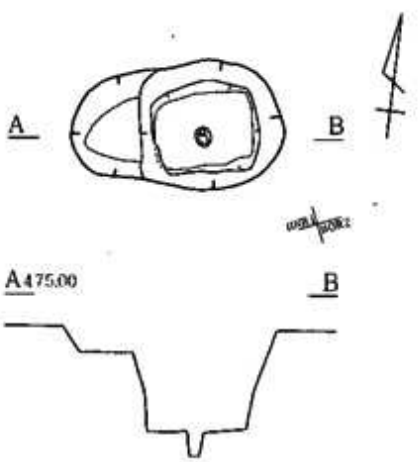
土 坑 2



土 坑 5



土 坑 7



土 坑 8

挿図5　土坑1、2、5、7、8

◇土坑９（挿図６）

土坑５の南側で検出した。

1.4×１ｍの隅丸の長方形に近い楕円形である。深さは105㎝で深い。底はほぼ平坦であるが、中央に向かってごくわずか窪んでいる。中央には直径20㎝の穴がある。この穴は底は南北に２段になっており、深さはそれぞれ43、23㎝と比較的深い。壁には途中に稜があり、立上がりの角度もその稜より下は垂直であるが、上はいくぶん緩い。

遺物の出土はなかった。

形態が土坑２、７および８と酷似しているところから、落とし穴と考えられる。縄文時代と見られるが、詳細時期は不明である。

土坑５・７・８・９はほぼ一直線に並ぶ位置にある。（吉川）

◇土坑10（挿図６）

７号住居址の北で検出した、直径２ｍの円形の土坑である。深さ75㎝を測る底部はほぼ平坦である。底の西側には直径20㎝深さ13㎝の比較的浅い穴がある。壁の中ほどに段がある。検出面からの深さは60㎝あり、テラス状になる。テラス南側はやや低く穴状に落ち込む。壁の立上がりはこの中段まではほぼ垂直に立ち上がっているが、中段の上はその角度がやや緩くなる。

遺物の出土はなかった。

形態からみて落とし穴と見られ、縄文時代の遺構と考えられるが、詳細時期は不明である。（佐合）

◇土坑12（挿図６、第４図）

方形周溝墓８の南側の斜面で検出した、1.3×0.9ｍの不整方形の土坑である。底部は平坦であるが、南へ傾斜している。深さは25㎝前後と比較的深く、壁は東側が垂直であるのに対し、西側は緩やかである。

出土した遺物としては、西側の壁際から細い沈線文が施された深鉢とみられる破片がある。（４図６）

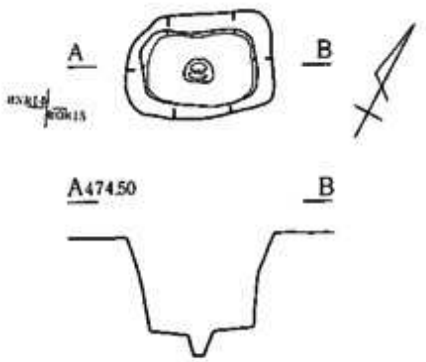
遺物から判断するに、縄文時代前期の土坑とみられるが、性格は不明であった。

（吉川）

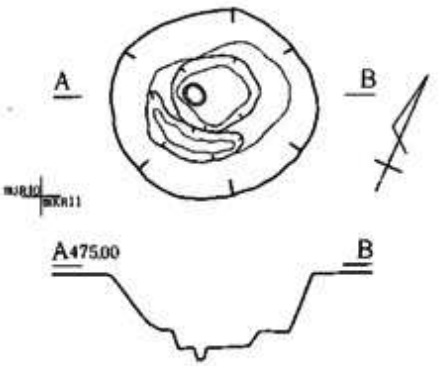
◇土坑13（挿図６、第４図）

土坑10の北西で検出した。直径1.6ｍの円形である。深さは71㎝で底部はやや東側が高いがほぼ平坦である。壁は途中に陵があり立上がりもこの稜を境に下はほぼ垂直に、上はそれよりやや緩やかではあるが、急角度に立ち上がる。

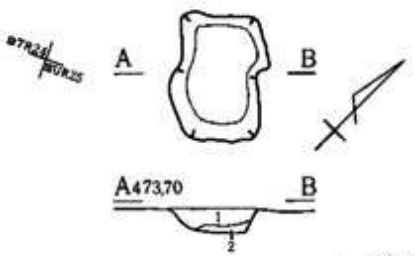
遺物としては、深鉢の破片がある。口縁付近に斜め方向の条線文が施され、胴部に縄文が施されたものである（４図７）。模様から判断すれば、縄文時代前期の遺構であろう。しかし、性格の特定はできなかった。（渋谷）



土 坑 9

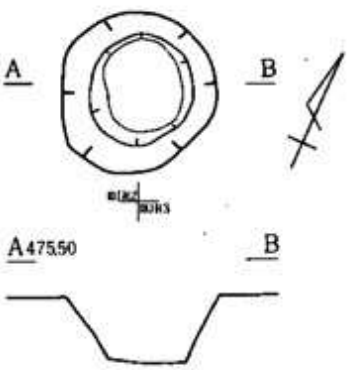


土 坑 10

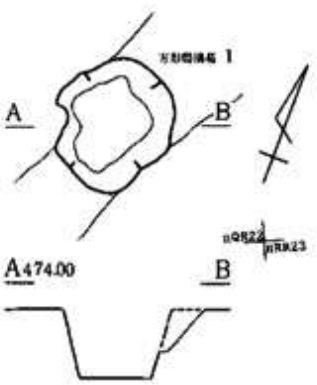


土 坑 12

1. 暗褐色土
2. 褐色土



土 坑 13



土 坑 14

插図6　土坑9、10、12、13、14

◇土坑14（挿図6、第5図）

方形周溝墓1の東側の周溝に切られていた。所在は試掘時に確認していた。グリッド掘下げ時褐色の落込みとして掘った経過があり、その時深鉢とみられる土器の破片が出土した。

規模は1.4×1.2mの楕円形で深さは70cmを測る。壁は方形周溝墓の周溝に完全に切られているため、土坑の壁はほとんど残っていないといっていいが、土坑のほうが深いため、下側の約半分はかろうじて判断できる。その壁は比較的急角度で立ち上がっている。底部はほぼ平坦である。

試掘の時出土した土器以外には遺物はない。この土器は細い沈線文を施した深鉢である（5図1）。

遺物から判断すれば縄文時代前期の遺構と見られるが、性格は不明である。　（吉川）

3）集石炉

◇集石炉1（挿図7、第5図）

方形周溝墓1と方形周溝墓2の中間で溝4の南側で多数の焼けた石を確認した。検出の結果、直径1.3mの不整円形の集石炉であることがわかった。掘り上がりでは直径1.3mの円形で深さは37cmと比較的深かった。壁はその中段の全周に稜がある。稜の上方は垂直に立ち上がっているが、下方はやや緩やかであり、断面形で鍋形になっている。断面観察の結果、石が詰まっているのは上半分程度であり、下半分は炭が堆積し層をなしていた。石は大部分が花崗岩であり、大きさは20～5cm程度である。いずれもよく焼けている。

遺物としては、押型文土器片が1片出土した（5図2）。また、詰まった石の中に擦痕の認められる礫がいくつかあった（5図3～5）。

土器片からみて、縄文時代早期もしくは前期の遺構であろう。　（佐合）

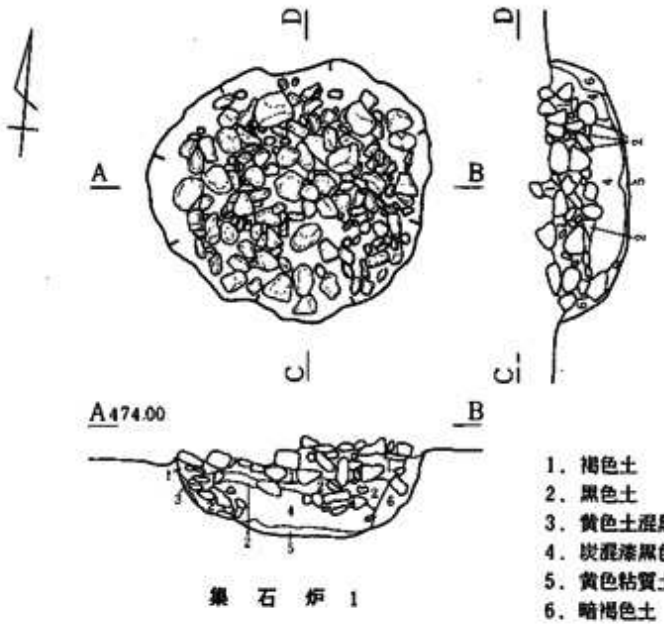
◇集石炉2（挿図7、第5図）

方形周溝墓2の周溝と方形周溝墓4の周溝との間で検出した。おおむね完掘できた。検出時は直径1.3mの不整円形で南側が一部欠けていた。上面には20～5cm程度の花崗岩がぎっしり詰まっていた。掘り上がりでは、1.1mの円形であるが、東側は攪乱により切られている。深さは39cmと比較的深かった。壁は西側と北側に中段を持つが、比較的緩やかに立ち上がっており、断面形では鍋底形になる。断面観察の結果、石は上面のみであり、半分以上は炭の層である。

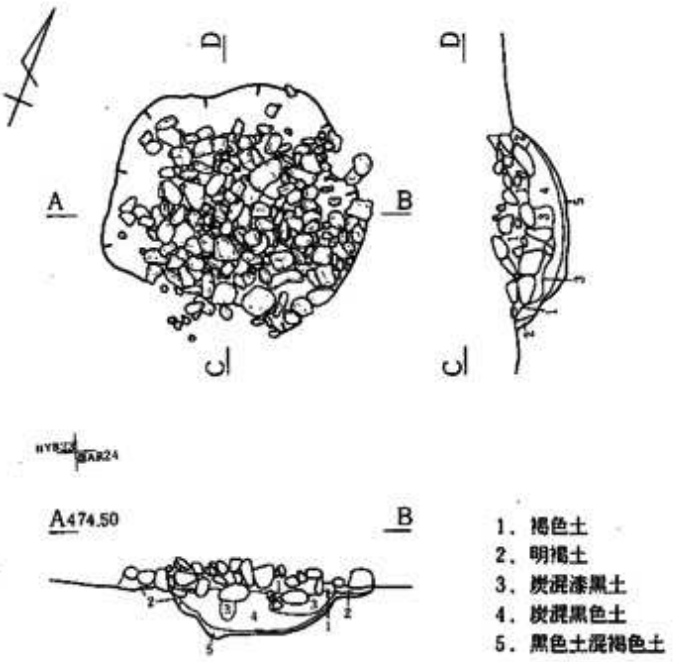
遺物の出土はないが、擦痕の認められる礫が含まれていた（5図6、7）。縄文時代前期の遺構と判断できる。　（佐合）

◇集石炉3（挿図8）

方形周溝墓7と方形周溝墓8との間で検出した。石の範囲は直径1mと集石炉1・2に



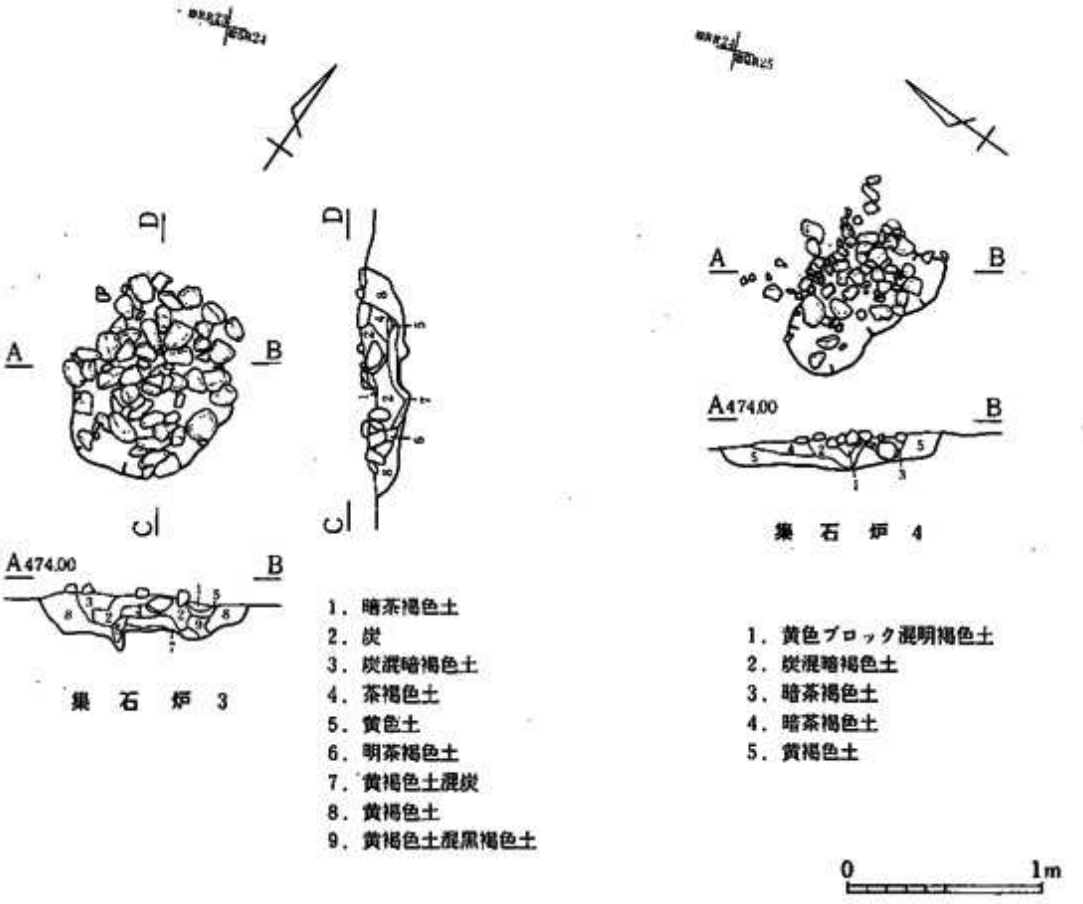
集 石 炉 1



集 石 炉 2

0 1m

挿図7 集石炉1、2



挿図8　集石炉3、4

比べてやや小さいものである。掘り上がりは、直径1.1mの不整円形であり、深さは15cmと浅い。底部にはいくつかの小さな穴や落ち込みが見られる。石があったのは上部のみで、ほとんどが20～5cm程度の花崗岩であった。断面観察では、覆土のほとんどが炭であった。

縄文時代前期の遺構と判断できる。（渋谷）

◇ **集石炉4（挿図8）**

方形周溝墓7は周溝に石を持つ方形台状墓であるが、その周溝の東角で台状墓内で花崗岩が数個集まっているのを確認し、集石炉としたが、石は焼けていなかった。

周溝により東側半分は破壊されているが、西側は原形をとどめていた。石の範囲は0.9×0.5mの楕円形であった。掘り上がりは1.2×0.9mの楕円形で、底部は3段になっているが、深さは14cmと浅い。断面観察の結果も、焼土や炭の堆積はない。

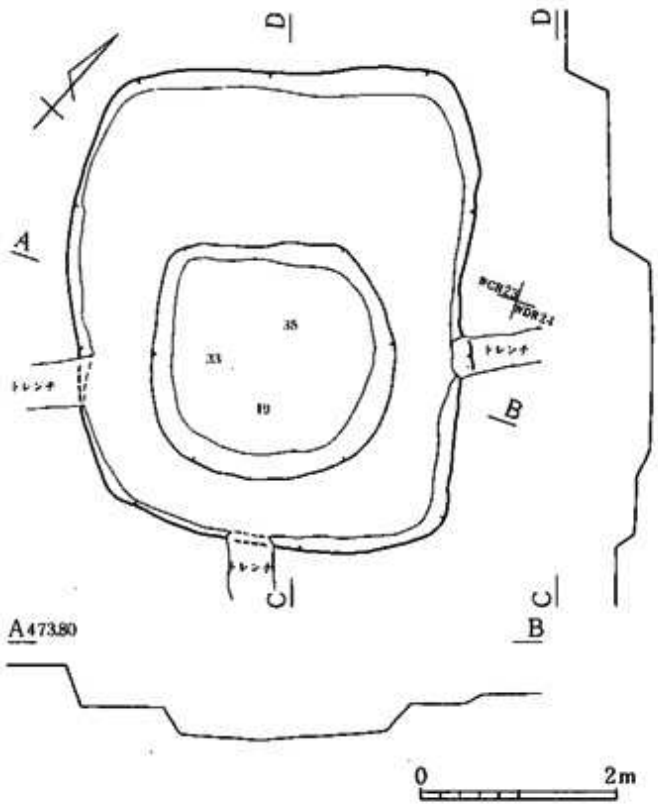
遺物の出土もなく時期は不明であり、単なる集石の可能性もある。（渋谷）

2．弥生時代

1）竪　　穴

◇竪穴1（挿図9、第6図）

方形周溝墓11の盛土下より検出した。この周溝墓の盛土状態を調査するためトレンチを開けたところ、墳丘の西側で落ち込みがあることを確認したため、その部分のトレンチを拡張して調査した。



挿図9　竪穴1

4.8×4mの隅丸方形であるが、東側の壁ははっきりしなかった。検出面からの深さは20cm前後であり、底部は西から東へ傾斜している。検出面も同方向へ傾斜しているので深さは変わらない。底部の中央付近には直径2.4mの円形の落ち込みがある。深さは45cmであり、底部は中央にやや窪む。この落ち込みの壁は東側が緩やかな立ち上がりをしている以外はほぼ垂直である。さらにこの竪穴の壁の立上がりは北側が緩やかである以外は急角度である。

遺物は中央の落ち込みからの出土である。土器としては、波状文が施された壺の口縁と甕の底部がある。石器としては、硬砂岩製の打製石斧の刃部がある。

土器は弥生時代のものであることから、この竪穴は弥生時代に属する可能性が強くこの一帯に方形周溝墓群が構築され、墓域となる以前のものであり、また、今次の調査において、さらに周辺部分において当該期の遺構等が確認されておらず、古墳時代においてこの地を墓域と選定した集団にむける先行した土地選定の姿があったことをうかがわせる遺構である。（佐合）

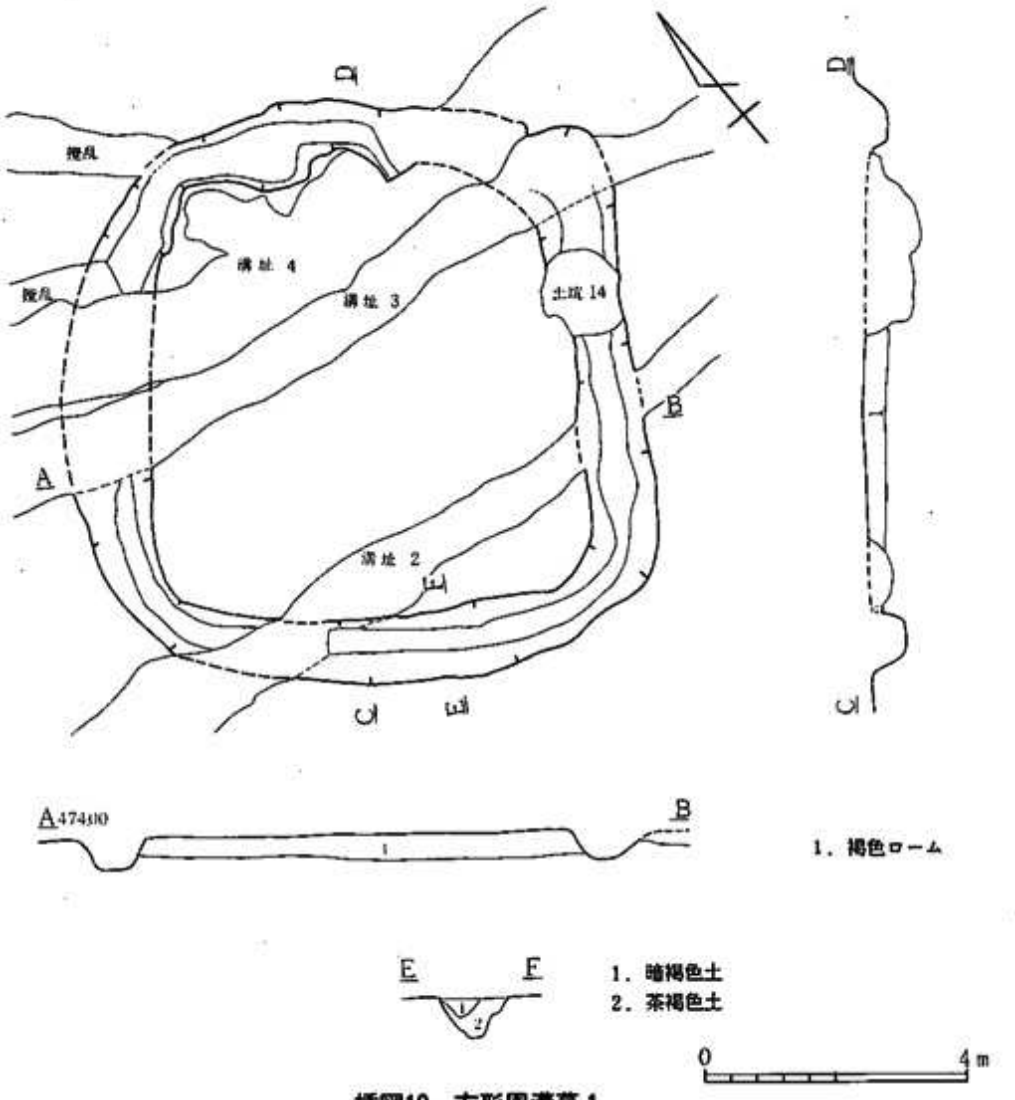
3．古墳時代

1） 方形周溝墓

調査範囲の東側、段丘崖縁部は以前から妙見山と呼ばれ、松・檜の林が広がっていた。この林の中で方形周溝墓群が確認された。

◇方形周溝墓１（挿図10、第６図）

調査範囲のほぼ中央のやや東側で検出した。溝２・３・４により切られ、土坑14を切っている。９×８ｍの正方形に近い隅丸の長方形である。溝３・４により北側の周溝はほとんど残っていない。さらに北東角では土坑14を切るがこの土坑と周溝の幅はほとんど同じであるが、多少土坑のほうが深いため周溝の底部を切っている格好になる。周溝は幅１ｍ



挿図10　方形周溝墓１

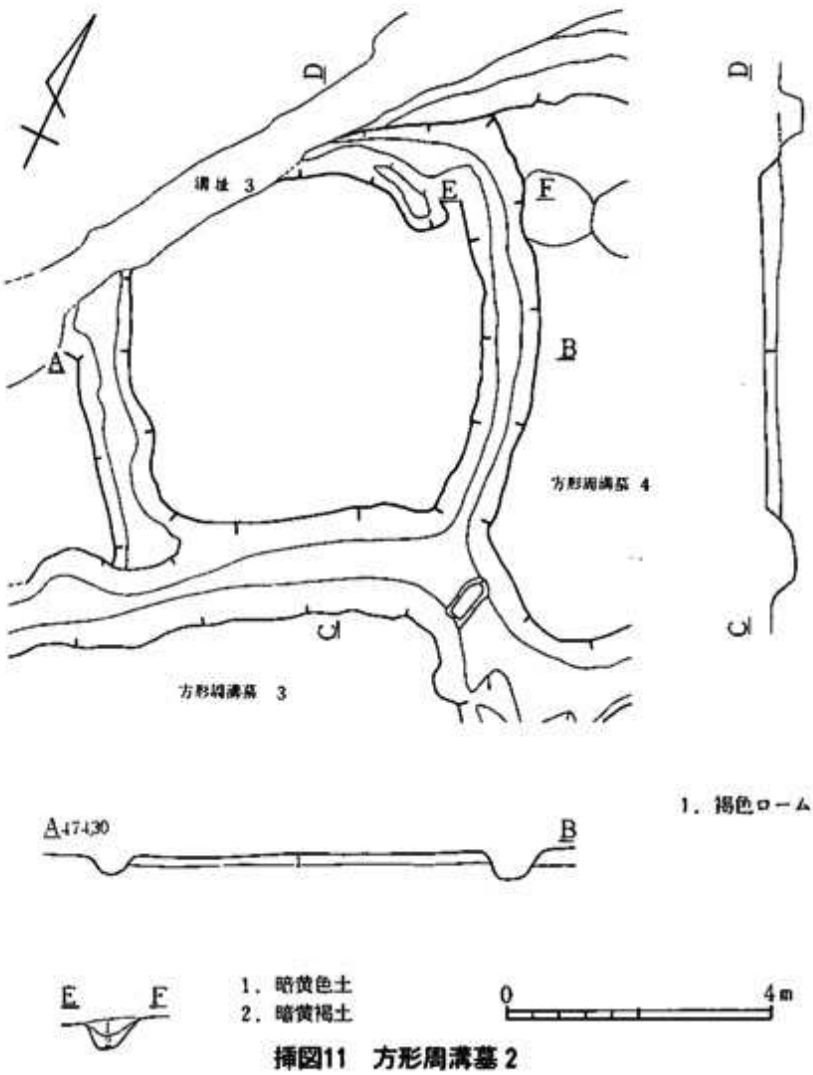
で深さが48cmある。壁は比較的急角度に立ち上がっている。底部は平坦であり、断面形は逆台形になっている。

周溝に囲まれた部分の検出では主体部が確認できなかったため、その部分に十文字に確認トレンチを入れたがやはりその所在はつかめなかった。

遺物としては、周溝から出土した硬砂岩製の打製石斧の破片が2片出土しているが、混入品と見られる。（吉川）

◇方形周溝墓2（挿図11、第6図）

方形周溝墓1の東側約10mの位置で検出した。北西側が溝3・4に切られており、その部分の周溝は残っていない。規模は7×7mの隅丸正方形であると見られる。北東側、南西側の周溝は、幅0.8m、深さ30cm前後であるが、東南側の周溝は方形周溝墓3と共有しており、幅1.5m深さ56cmとしっかり掘られている。主体部の所在は確認できなかった。　遺物は周溝から出土した横刃形石器と見られる硬砂岩のみである。（吉川）



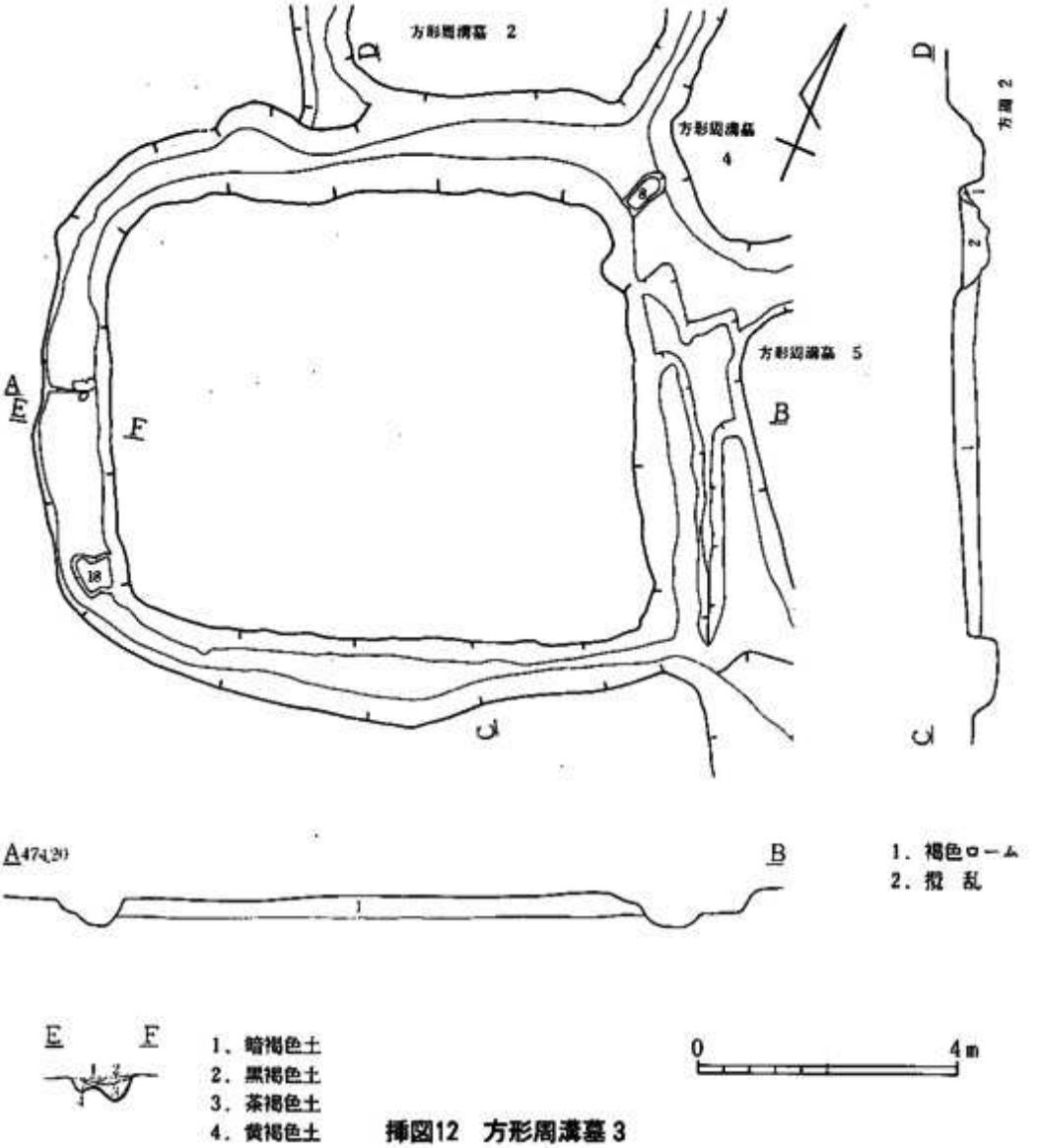
挿図11　方形周溝墓2

◇方形周溝墓3（挿図12、第6図）

方形周溝墓2の南側に接して検出した。当初、表土を剥いだ部分より斜面に向かって暗褐色の溝がのびていたため、立ち木等を片付けた後再び表土を剥いでそのプランを確認した。

北西側の周溝は方形周溝墓２と共有しているが、深さが49cmとしっかり掘られているところから調査したものはこの周溝墓のものと判断できる。さらに北東側では方形周溝墓５と共有するが、この部分では、幅２ｍの周溝であるが、底部には段があり２本に分かれている状況が認められた。規模は約11×10ｍの正方形に近い隅丸長方形と推定できる。南西の周溝は幅1.2ｍであり、中央に段があり東側がやや深くなる。南東は幅が狭くなるが、深さは50cm程度としっかりと掘り込まれ、断面形はＶ字に近くなっている。

遺物が出土したのはすべて周溝内である。６図７は縄文式土器の小片であるが、混入品と見られる。10は、手づくねと見られるが、器形は甕を模倣したものと思われる。８、９は土師器で方形周溝墓２と共有している周溝からしたものである。８は小型の甕であり、



挿図12　方形周溝墓３

胴部から底部にかけては、篦みがきが見られる。また、底部に径1.5cm程度の孔が開けられていた。9は小型の坩であるが表面がかなり荒れており、やはりこの坩の底にも孔が開けられていた。この2点は周溝墓に関連した祭祀に使用されたものと見られる。（吉川）

◇方形周溝墓4（挿図13、第7図）

方形周溝墓2の東側に幅2mの溝が検出された。この溝は北側では溝3・4に切られており、南側は方形周溝墓5の周溝により切られている。溝の形態が他の周溝墓のものと似ていたため方形周溝墓としたが、この周溝以外には確認できなかったため、規模は不明である。調査できた周溝のうちは東側のものは9mで深さは80cmを越えている。壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。さらに北側で5mが確認できたが、壁はほとんど残っていない。

遺物としては周溝から出土した土師器が2点ある。7図2は甕である。表面と口縁の内側には篦磨きが見られる。底部からみて、比較的細長いものと見られる。2も甕である。前者に比べて胴部は丸みをおびている。やはり、表面と口縁には篦磨きが見られる。技法から判断する限り比較的古い時期のものである。（吉川）

◇方形周溝墓5（挿図14、第7図）

方形周溝墓3の東側で検出、東側の周溝は方形周溝墓6と共有している。西側では方形周溝墓3と、また南側では方形周溝墓13の周溝と重なる。しかし、13の周溝の方が深く、切られている格好である。大きさは周溝が共有されているため本来の周溝の幅がつかめず推定であるが、12×10mの隅丸長方形と見られる。確認した周溝のうちこの周溝墓単独のものは北の角部分のみである。その箇所で見る限り周溝の幅は1.5mで深さ69cmある。壁は比較的急な角度に立ち上がっており、断面形は逆台形である。その他の周溝も幅は切り合うためはっきりしないが、深さはいずれも、同程度の深さを測る。主体部を確認するためのトレンチを周溝で囲まれた部分に開けたにもかかわらずその所在はつかめなかった。

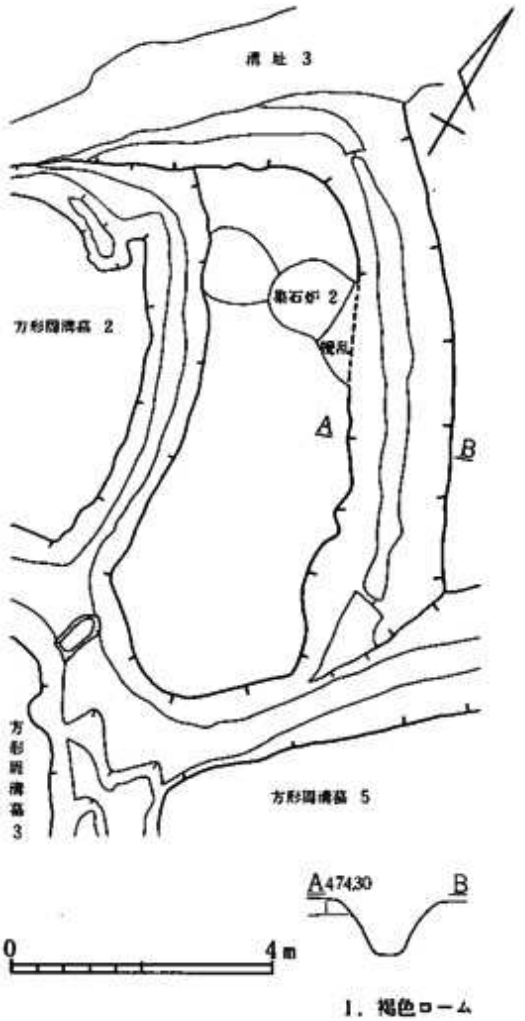
周溝内からは混入品と見られる石器が3点出土したのみである。7図3、4は打製石斧であり、5は横刃形石器であり、石材はいずれも、硬砂岩である。（馬場）

◇方形周溝墓6（挿図15、第7図）

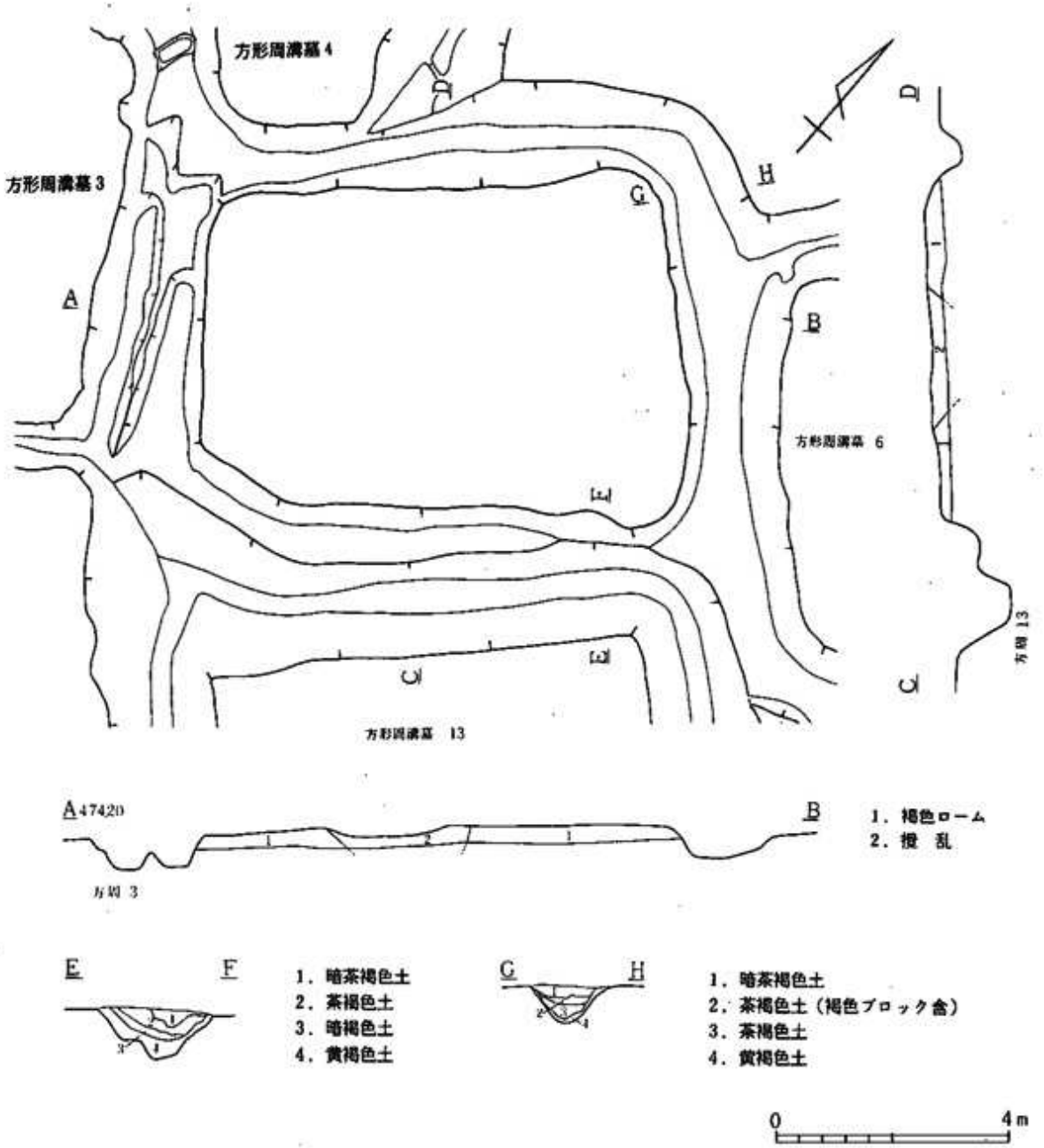
方形周溝墓5の東側で周溝を共有して検出した。南側の周溝は方形周溝墓16と共有している。11×9.5mの隅丸長方形である。北西側の周溝は幅1.8mで深さは50cmを測る。しかし、底部の幅が0.2mと狭く断面形はV字形である。その他の周溝の幅も1.8m程度だが、深さは40cmと若干浅くなっている。しかし、地形が南東に傾斜しているにもかかわらず周溝の掘り込みの深さには変化がない。

主体部を確認するためのトレンチを周溝に囲まれた部分に開けたが主体部の所在はつかめなかった。

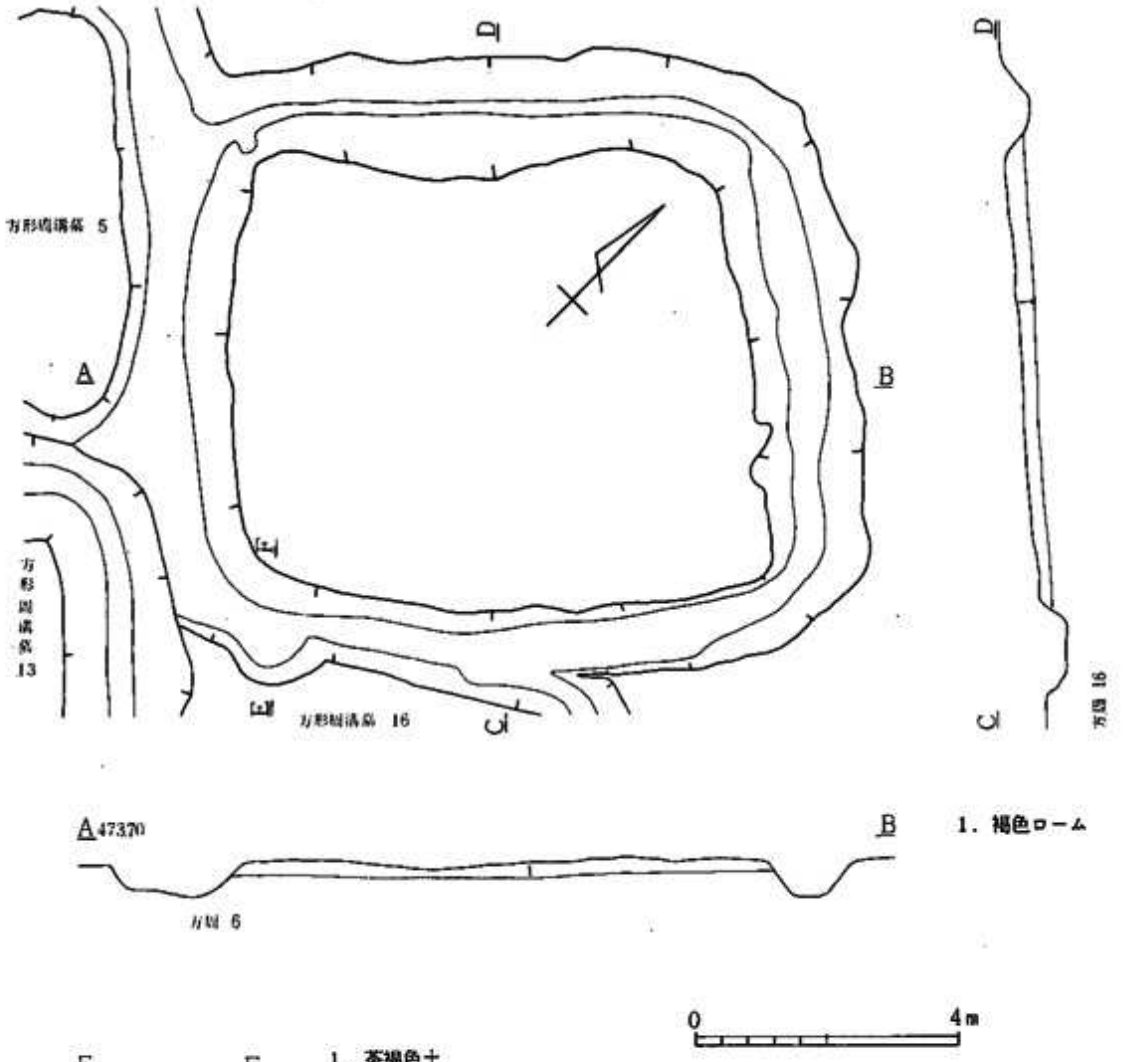
遺物としては、周溝から硬砂岩が出土したので石器としたが、器形は不明である。（馬場）



挿図13　方形周溝墓 4


方形周溝墓4
方形周溝墓3
方形周溝墓6
方形周溝墓13
A
B
C
D
E
F
G
H
A 47420
B
方切 3
方切 13
1．褐色ローム
2．撹　乱
E
F
1．暗茶褐色土
2．茶褐色土
3．暗褐色土
4．黄褐色土
G
H
1．暗茶褐色土
2．茶褐色土（褐色ブロック含）
3．茶褐色土
4．黄褐色土
0
4m

挿図14　方形周溝墓5



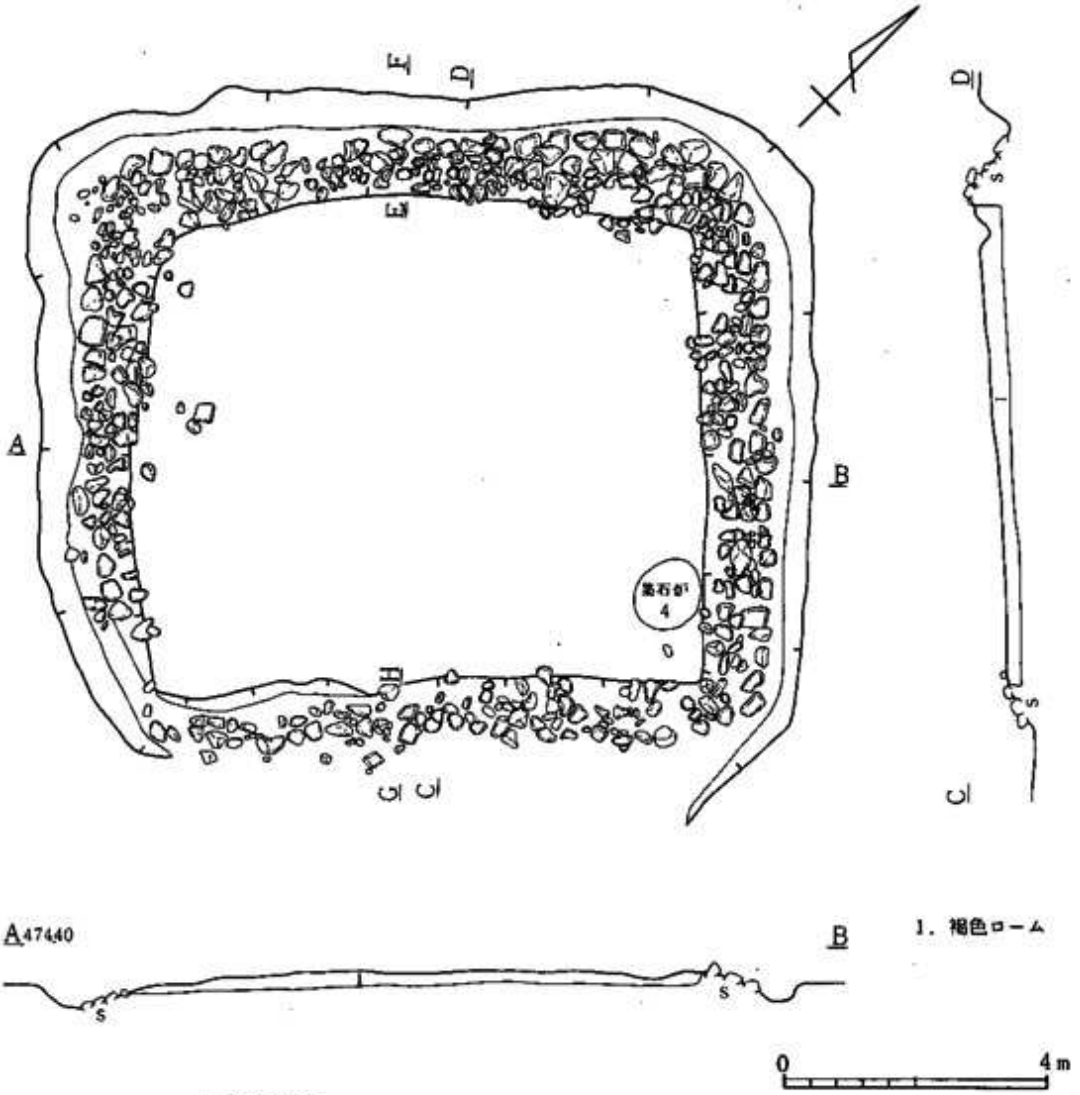
挿図15　方形周溝墓６

◇方形周溝墓７（挿図16、第７・８図）

方形周溝墓６の東、約４ｍ隔てた場所で検出した。表土剥ぎのときこの部分だけから石が散在しており、なんらかの遺構の所在をうかがわせていた。検出を進めるうちに多数の石が暗褐色土の溝の中に入っていることがわかった。溝の覆土を掘った結果、方形に囲まれた溝の内側法面に石を貼った低墳丘墓であった。周溝は南側が斜面下方となるためはっきりしないがそれ以外の部分は幅は約1.5ｍ、西側最深部での深さは69㎝を測る。貼石の残存状態は西及び北側が良好であり、大きさはまちまちであるが最大のもので50㎝を越える。いずれも花崗岩河原石であるところから段丘下を流れる飯田松川の石を運び上げたものと考えられる。規模は12×12ｍの隅丸正方形と見られる。段丘端部に構築されているため、段丘崖への土の流出があり、また、表土剥ぎの際、盛土の部分を削り過ぎたこともあり、

墳丘本来の高さを把握できず、さらには主体部の所在もつかめなかった。しかし、西及び北側部分の貼石が良好に残存する付近の周溝内側部分において、わずかではあるが、盛土のなされた形跡が認められ、また、周溝内に転落した石もあり一定の高さまでは土が盛られていたと判断される。

遺物としては、土師器があり、周溝の中に落ち込んだ石の間から破片で出土したが、復元の結果ほぼ完形に近いものとなったものに8図4の甕がある。5、6は坩であり、5は完形で6は胴部のみである。7は坏である。7図7、8および8図1、2、3は高坏である。

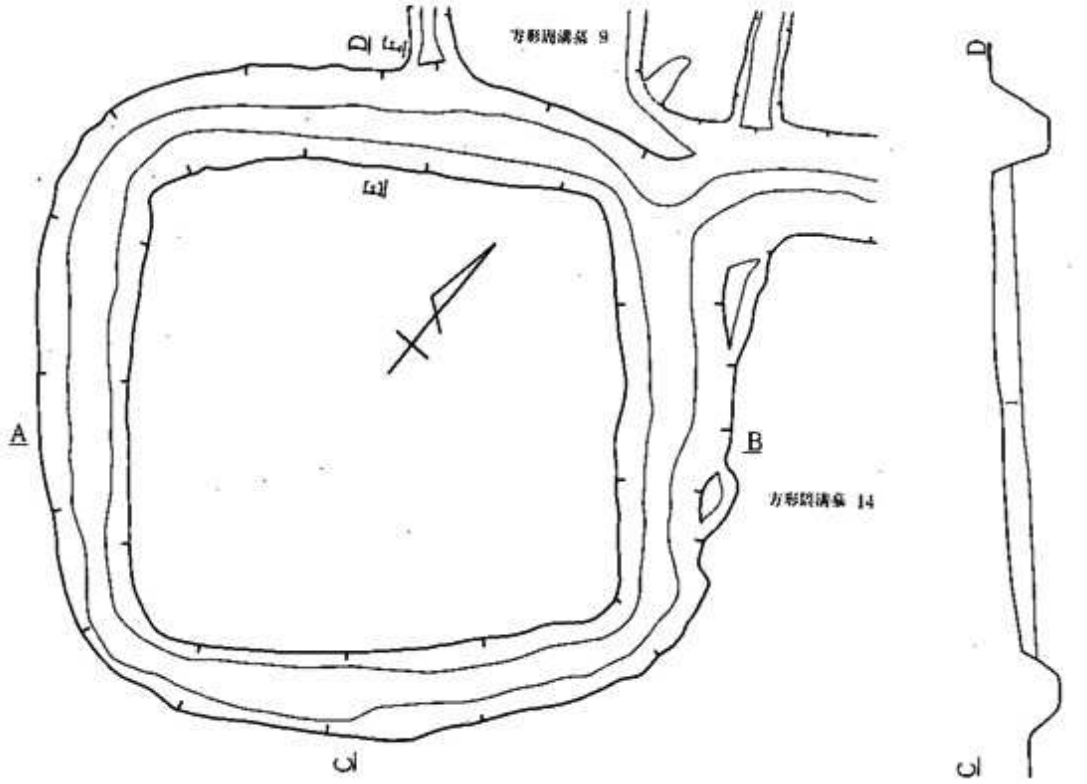


挿図16　方形周溝墓7

本遺構は今回の調査により確認された方形周溝墓群の中で、ほぼ中央部にあり、また、唯一貼石を有する点等、特殊な形態を有し、盟主的な位置付けのなされる墳墓と考えられる。（吉川）

◇方形周溝墓８（挿図17、第８図）

方形周溝墓７の北側に２ｍの間隔をもってほぼ崖方向に並んで検出した。10×10ｍの隅丸正方形である。北側の周溝は方形周溝墓14と共有している。周溝の幅はどの箇所も1.5ｍ前後とほぼ一定である。深さも60㎝前後であり、壁は比較的急角度に掘り込まれている。



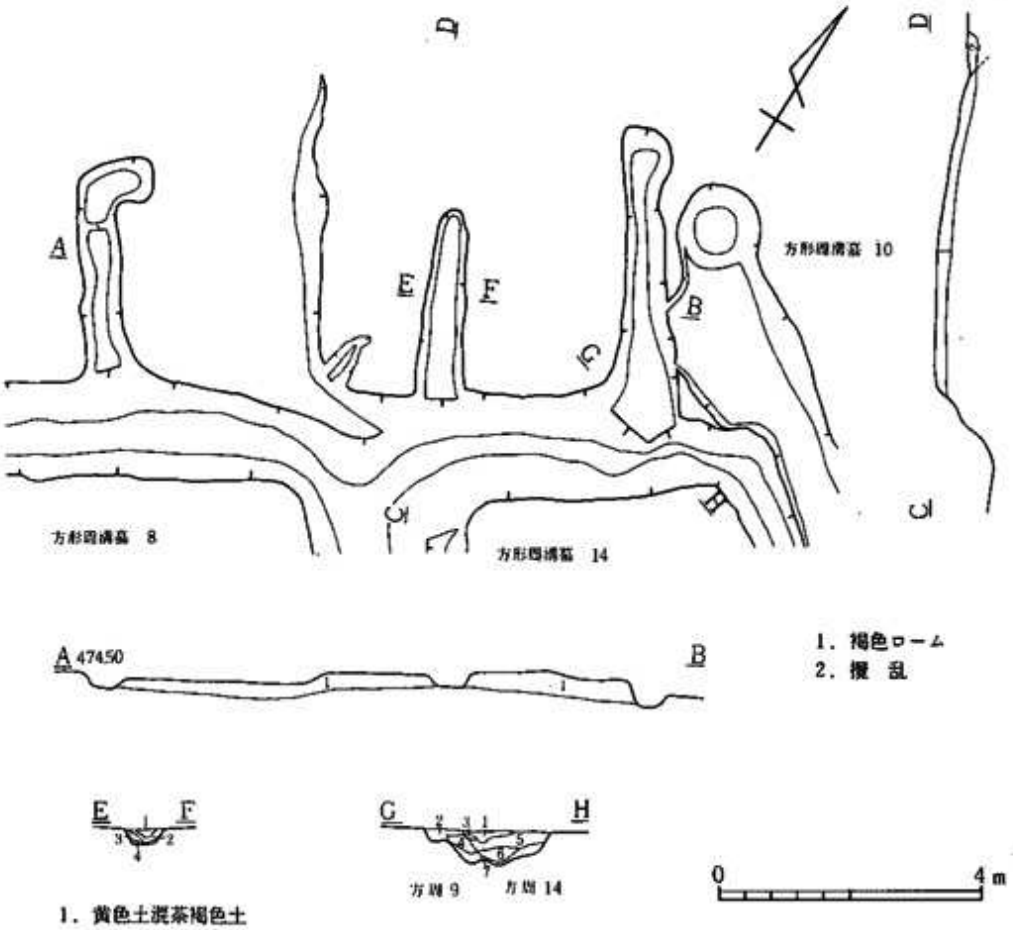
挿図17　方形周溝墓８

主体部は確認できなかった。

周溝からは縄文時代の土器片と硬砂岩製の打製石斧と横刃形石器が出土している。しかし、混入品と見られる。（馬場）

◇方形周溝墓９（挿図18、第９図）

方形周溝墓８の北西側の周溝の中央付近に北西に延びる長さ約５ｍ、幅0.8ｍの溝を検出した。この溝の深さは34cmと浅いものである。先端はやや北東に曲がるようにも見える。また、同じような形態の溝が、北東方向に4.5ｍ離れた場所で平行して確認できた。長さ

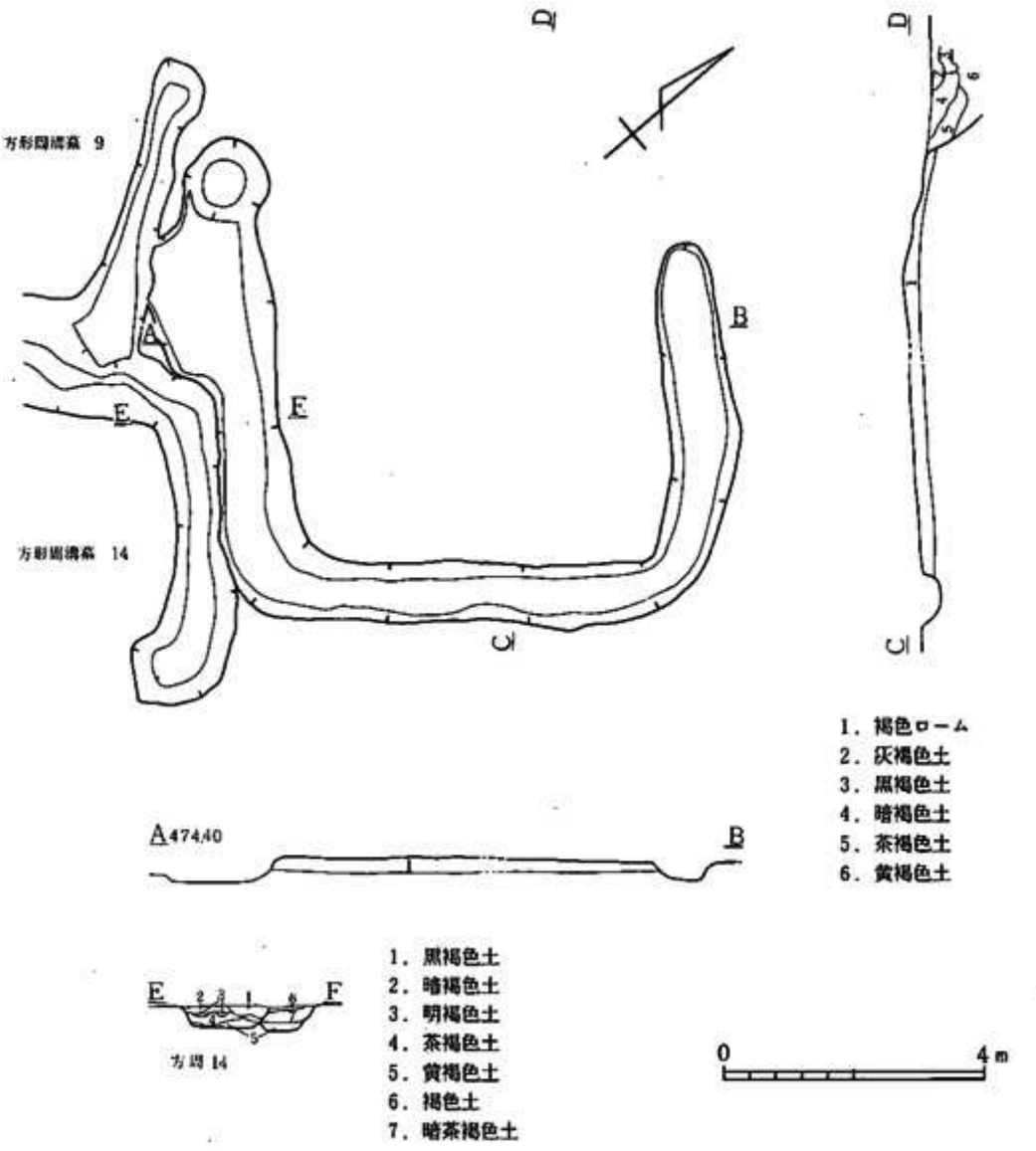


挿図18　方形周溝墓９

3ｍ幅0.5ｍ深さ21㎝であり、方形周溝墓14の周溝で切られている。さらに、北東に3.5ｍ離れた場所では、長さ4.5ｍ幅0.5ｍ深さ55～25㎝の溝があった。やはりこの溝も方形周溝墓14の周溝で切られている。さらには土坑11が周溝上部で確認できた。これも前述の２本の溝に平行の位置関係にある。３本めの溝は北西方向に広がる近世の攪乱により切られているものと見られる。溝の形態等から周溝墓の周溝と判断した。挿図は周溝墓と考えられる範囲を載せたが、主体部、入り口部分など施設はわからなかった。

周溝から甕の底部が出土しているが、底部のみのため土器の時代ははっきりしない。

（吉川）



挿図19　方形周溝墓10

◇方形周溝墓10（挿図19、第９図）

方形周溝墓８の北へ６ｍ離れた場所で周溝を確認した。西側の周溝は攪乱により切られているため不明であるが、規模は８×（８）ｍ程度の隅丸方形と推定できる。南西側の周溝は周溝墓14の周溝に切られていることが断面観察で確認できた。さらに周溝墓９の周溝と接する西側では土坑11が周溝の壁を切っていた。したがって周溝の幅がわかるのは北東と南東の部分で、ほぼ１ｍと一定である。深さは30cm前後と比較的浅く、断面形はＵ字形に近い。

遺物の出土はなかった。（馬場）

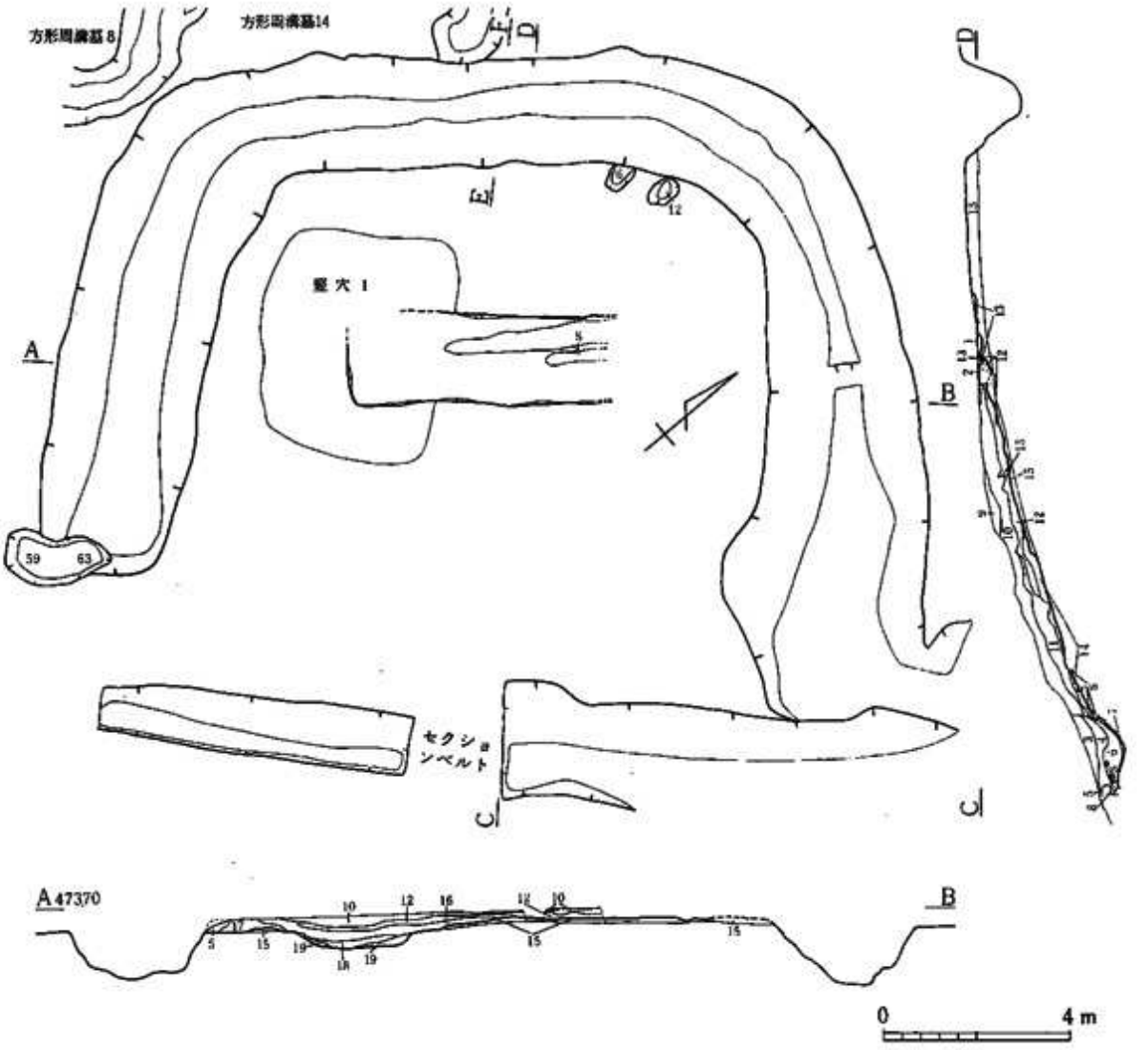
◇方形周溝墓11（挿図20・21、第９・19・23図）

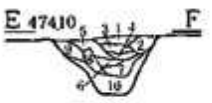
方形周溝墓８の東で、さらに段丘崖の縁部に寄った場所で漆黒土を検出したため、溝と判断して掘り下げた。段丘縁部に近付くにつれて漆黒土の上に褐色土が被っていることに気付いたため、掘り下げを中止して範囲を広げて検出を実施した。その結果暗褐色の周溝が検出できた。周溝がはっきりしたのは北・西・南の３方向で急傾斜になる東側ではよくわからないため、トレンチをあけた。断面観察によってはじめて漆黒土はこの周溝墓が造られた当時の地表面であり、その上にある褐色土は周溝墓の盛土であることがわかった。そのセクションベルトは東南の斜面に残したままにした。

規模は17.5×（16.5）ｍと推定される。

南角は斜面となるものの、周溝が途切れており入口部の可能性がある。

調査した周溝は3.5～1.5ｍの幅があり、深さは西側が最も深く1.25ｍを測る。崖の縁部に向かうにつれて幅は広くなるが徐々に浅くなる。このことは自然地形を利用し、段丘下より見上げたときより大きく見せようとしたことがうかがえる。周溝に囲まれた部分を精査したところ、直刀が出土したため、さらに丁寧に検出を行った結果、主体部と見られる落ち込みの範囲を確認した。前述の通り一部掘り過ぎた部分があるため、全体を確実にはつかめなかった。また、西側で、竪穴１を確認し、先行して調査したため、一部西角を切っている。調査できたのは長さ5.4ｍ幅4.5ｍの長方形の部分である。この箇所は褐色の周溝墓の盛土を掘り込んだと判断でき、主体部外側部を示す土壙といえる。しかし、崖の縁部に構築されていることから、斜面方向に盛土が崩れたと見られ、残存部の掘り込みは５cm前後とごくわずかしか確認できなかった。土壙の北よりに幅0.5ｍ長さ3.4ｍの黄色土がブロック状に混じった褐色土部分がほぼ南北に延び、南に向かって徐々に細くなっていく。この落ち込みを遺骸埋葬主体と判断したが、やはり掘り過ぎの部分で切っているため、調査部分は全体ではない。埋葬主体の底部は中央にやや窪み、ちょうど船の底のようになっているが、深さは10cm程度とごく浅い。細長い全体形及び底部の形状から割竹形木棺を埋葬したものと判断される。この南端部より直刀が出土した。さらに埋葬主体部の東側には幅0.6ｍ長さ2.2ｍの落ち込みを確認した。これもまた、掘り過ぎた部分で切ってしまったため、全容はつかめなかった。





1．黒褐色土
2．暗褐色土混明褐色土
3．明褐色土
4．暗褐色土
5．暗黄色土
6．漆黒土
7．褐色土
8．黒土混暗黄色土
9．暗黄褐色土
10．黄褐色土

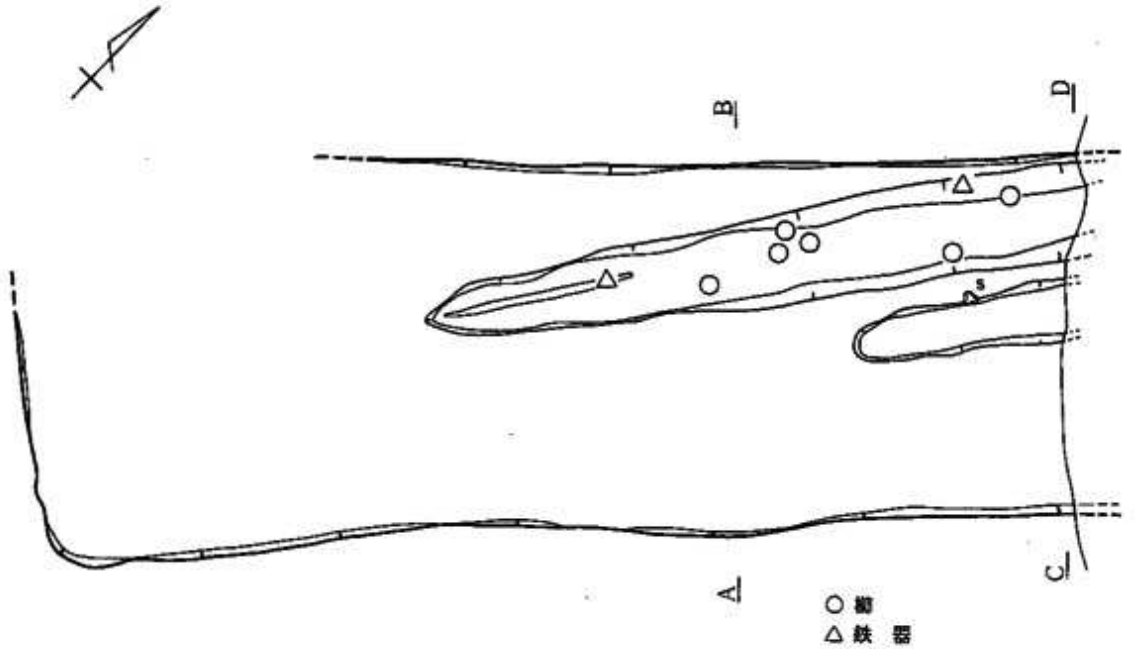
1．茶褐色土（黄褐色粘土ブロック含む）
2．黄褐色土
3．黄褐色砂土
4．黄褐色砂土混り黒色砂質土
5．褐色土
6．褐色砂土
7．褐色砂土，礫混り黄色砂土
8．石混り褐色砂土
9．褐色土混り黄色土
10．黄色土（粘質土ブロック含む）

11．黒褐色土
12．黒色土　※方形周溝墓築造前地表
13．黄色土
14．暗褐色砂質土
15．暗褐色土
16．黒色土混り暗褐色土
17．暗褐色土混り黄色土
18．漆黒色土（焼土を部分的に含む）
19．褐色粘質土

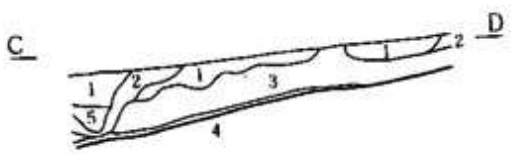
挿図20　方形周溝墓11

本周溝墓においては、土層状況から盛土の存在が明瞭に確認され、また主体部である土壙（割竹形木棺痕跡）も確認されたことから、最低でもこの木棺を覆うだけの土量が構築時に存在したといえ、通常内部主体の確認できない同様の遺構を検討するに大きな意味を持つといえる。

この周溝墓からの遺物としては、周溝から出土した石器に、硬砂岩製の横刃形石器と緑色岩製の打製石斧がある。これらは混入品と考えられる。同じく周溝から出土している土器には、9図4の土師器の甕がある。5も甕であるが、表面に波状文が施されており、弥生時代と見られる。これは、周溝に囲まれた部分にある竪穴1から出土しているものと同



1．茶褐色土（黄褐色粘土ブロック含む）
2．黄褐色土



1．明褐色土
2．明茶褐色土
3．暗褐色土
4．黄褐色土
5．暗茶褐色土

0 2m

挿図21　方形周溝墓11主体部

時期であり、本址より先行するものである。6は底の丸い坏である。7・8は高坏であり、同一固体であろう。時代的には5を除けば古墳時代中期の土器である。主体部からは鉄器が出土している。23図5は刀子である。切先は破損している。6は直刀であり、ほぼ完形で出土した。茎、関の形態から5世紀代と見るのが妥当であろう。その他、主体部から、竪櫛の破片も出土した。（佐合）

◇方形周溝墓12（挿図22、第10図）

方形周溝墓3の南側、約4m隔てた場所で暗褐色土の溝を検出したため、さらに山の斜面を下の方へ検出を続行したところテラス状に勾配が緩くなっている箇所でも同じ色の溝を確認し、周溝墓とした。12×12mの隅丸の正方形である。東側と南側の周溝にはまだ立ち木の残っていたため、完全には掘れなかったが、ほぼ全体を調査し、西側に入り口部分も確認された。また、西側は方形周溝墓18と周溝を共有している。調査した周溝のうち斜面上部に当たる北西側では、幅1.5mであるのに対し、斜面の下部である南西側は、幅2mと広くなる。深さは北西側が90cmであるのに対し、南西側130cmと深く、しっかりとした掘り込まれていた。主体部は、確認トレンチを入れたがわからなかった。

遺物としては、周溝から硬砂岩製の横刃形石器と高坏の破片が出土している。しかし、時代の特定の資料にはならず、時期は不明である。（馬場）

◇方形周溝墓13（挿図23、第10図）

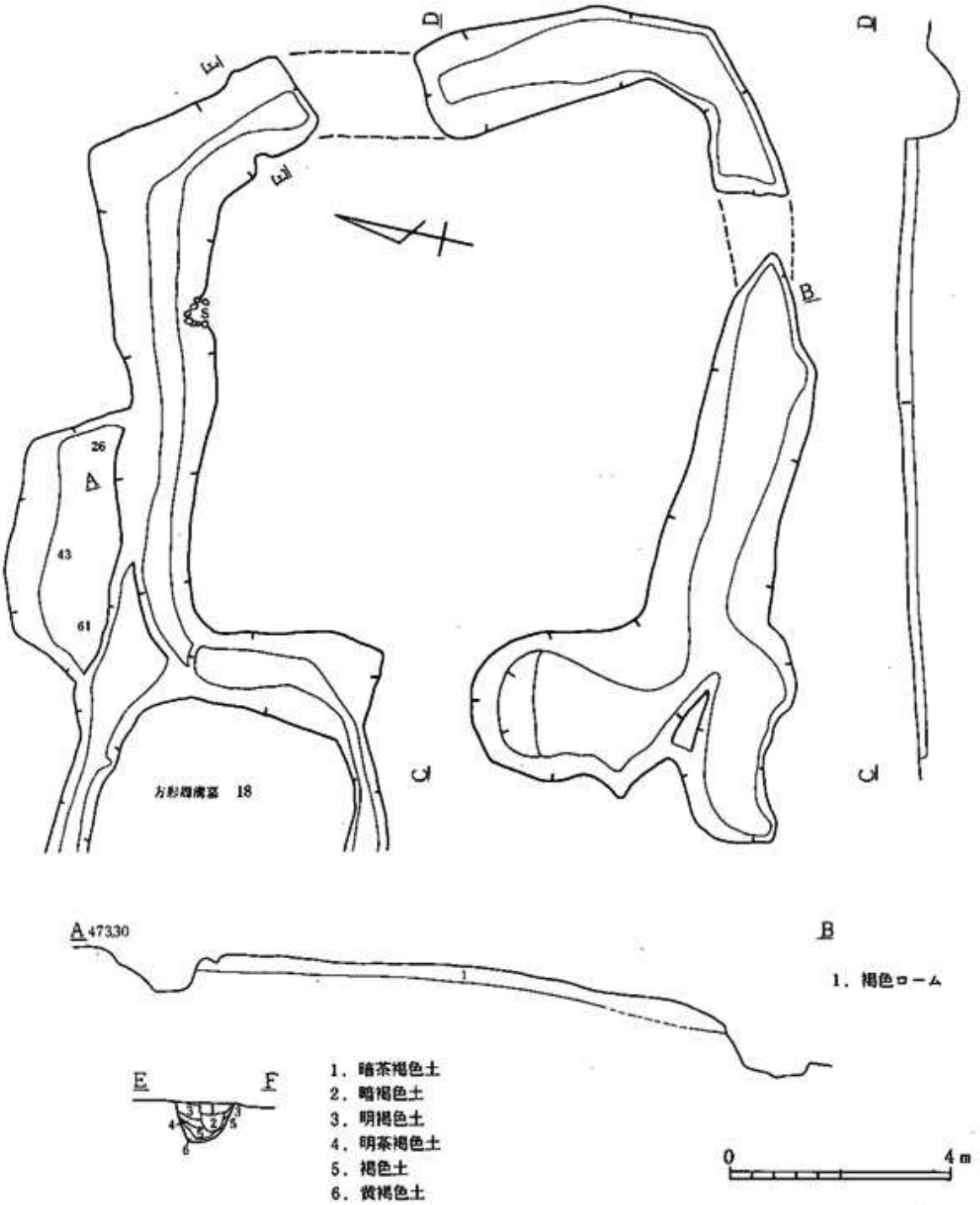
方形周溝墓5の南側、東南向きの斜面で周溝を接して検出できた。北側の周溝は周溝墓5の周溝を切っている。東側では周溝墓16の周溝を切っている。南東側には松の木があり調査できなかったが、周溝は続いているものと判断できる。南側コーナーが周溝墓17の角と接しているため、溝が2本別れているように見える。南西側の周溝の切れたところが入り口部分と見られる。規模は11×11mの隅丸正方形である。周溝の幅はどの部分でもほぼ一定で2mほどある。深さは北側で1.3m東側で1mと深く、壁も垂直に近い立ち上がりをしている。

主体部はトレンチを入れて確かめたが、確認できなかった。

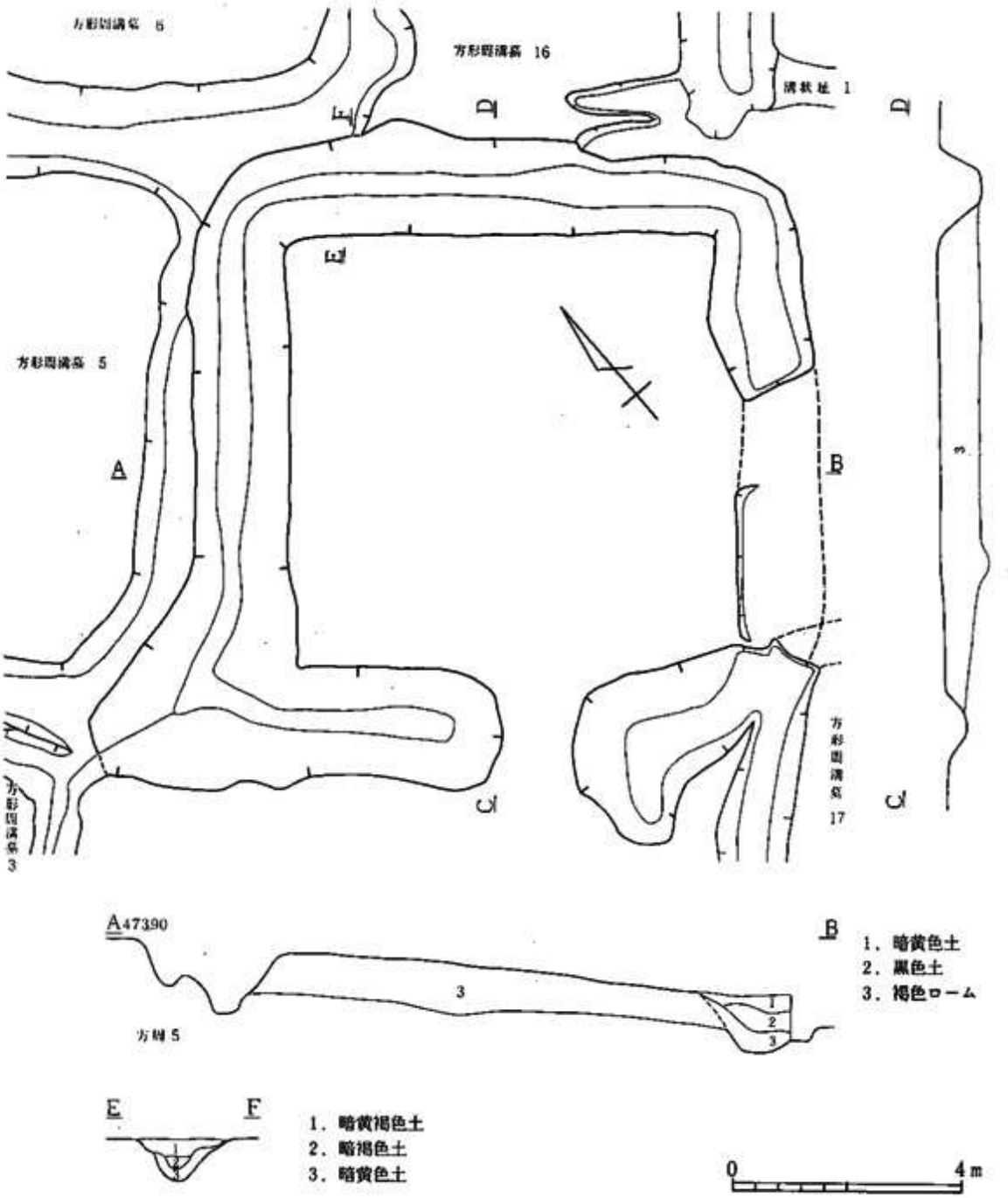
遺物としては、周溝から横刃形石器と思われる硬砂岩が出土しているのみである。構築時期は周溝の切り合い関係から周溝墓5及び16よりは新しいことがわかるのみである。（馬場）

◇方形周溝墓14（挿図24、第10図）

方形周溝墓8、方形周溝墓9、方形周溝墓10、及び方形周溝墓11の周溝に囲まれた部分で確認した、7.5×6mの隅丸長方形の周溝墓である。南側の周溝は方形周溝墓8と、西側は方形周溝墓9と共有しているが、周溝の深さはかなりちがっている。北側では方形周溝墓10の周溝を切っている。残る東側は方形周溝墓11に接している。れる。南側のコーナーで、方形周溝墓8と方形周溝墓11との間がわずかあいている、この部分が入り口部分であると判断できる。この周溝墓本来の周溝が残っている部分は周溝墓10と11の間のみで、幅



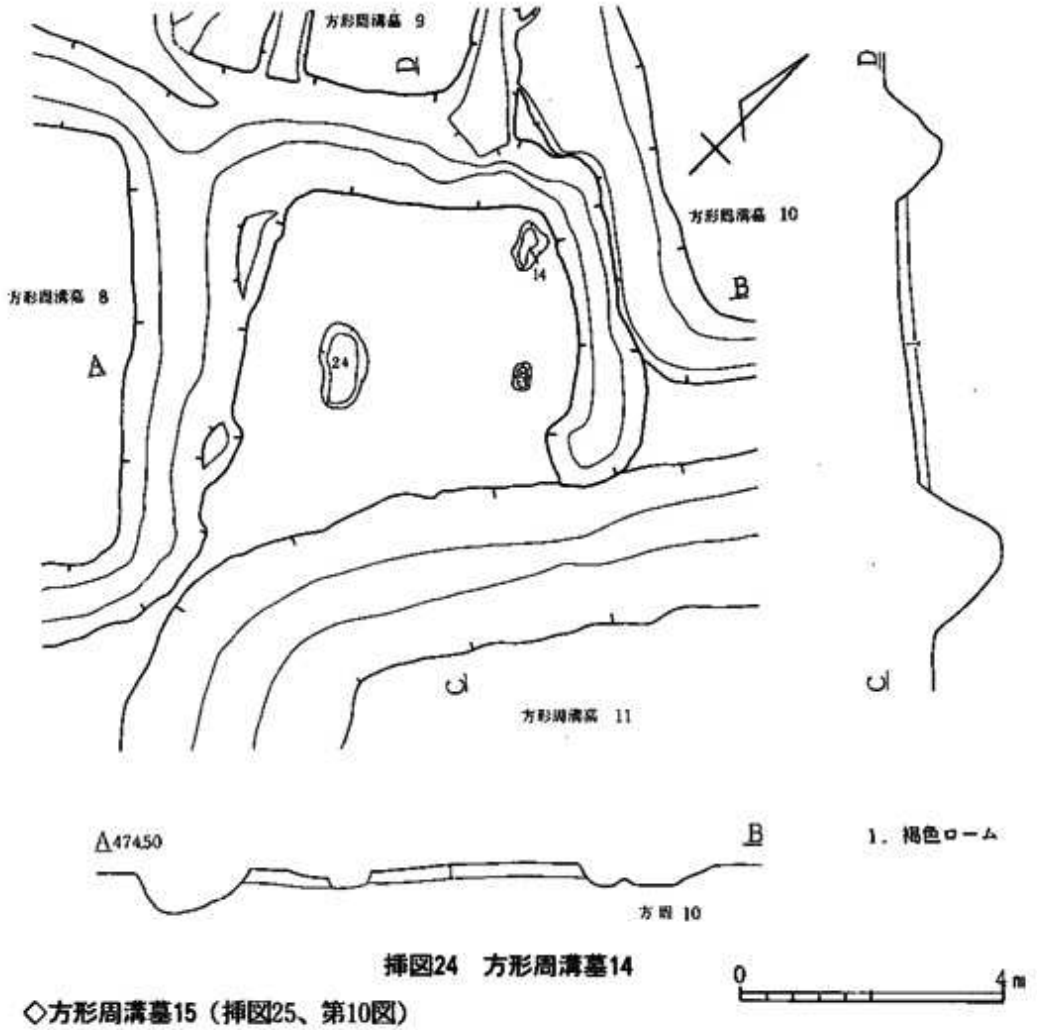
挿図22　方形周溝墓12



挿図23　方形周溝墓13

は1.2mである。それ以外もやはりその程度の幅はあったものと考えられるが、前述の通り他の周溝と重複するため推測でしかない。深さはこの部分が一番浅く、深さは37cmであるが、その他のところでは60cmを越えている。また、周溝墓８の底部と同じ高さで続いている。主体部は確認トレンチでもその所在はつかめなかった。

遺物としては、硬砂岩製の打製石斧が出土しているのみであり、時期の決定資料にはならなかった。しかし、切り合い関係から見て、周溝墓10より新しいことが分かるが、詳細時期の判断はできなかった。（馬場）



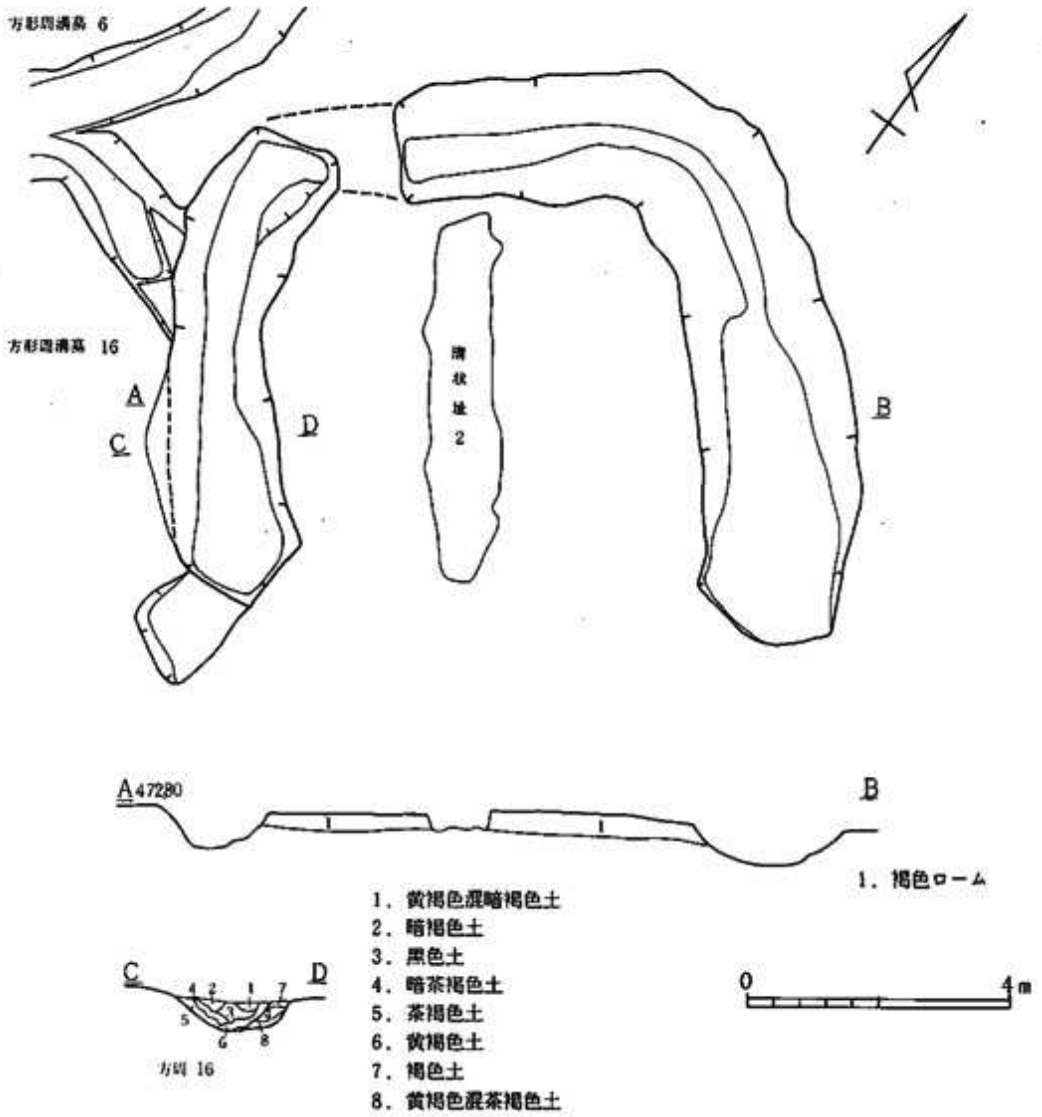
挿図24　方形周溝墓14

◇方形周溝墓15（挿図25、第10図）

方形周溝墓７の南側の林は斜面になっている。周溝墓７の石が入った周溝と接する格好で検出した。傾斜のきつくなる東南側では周溝の確認はできなかった。これも地形を利用し、３方向のみに周溝を巡らせたと考えられる。したがって、規模は推定であるが、10×（９）mの隅丸長方形と見られる。南西側の周溝は周溝墓16の周溝に切られている。周溝の西角に松の株が残っていて完全には掘れなかったが、この部分も周溝が続いていると判

断できる。周溝は斜面の上部では幅1.7m、深さ1.2mとしっかり掘りこまれている。しかし、斜面が下方に向かうに連れて幅が徐々に広く、深さは徐々に浅くなっていく。主体部の所在を確認するため、周溝墓の中央部分にトレンチを十文字にあけた。主体部の確認はできなかったが、北西から南東方向、すなわち斜面の傾斜と同方向の溝状遺構を確認した。

遺物としては、10図6は土師器の坩である。丸底であるが、箆削りの調整が残っている。5は土師器の甕である。口縁部のみの出土であり、胴部にはカキメが残っている。(馬場)



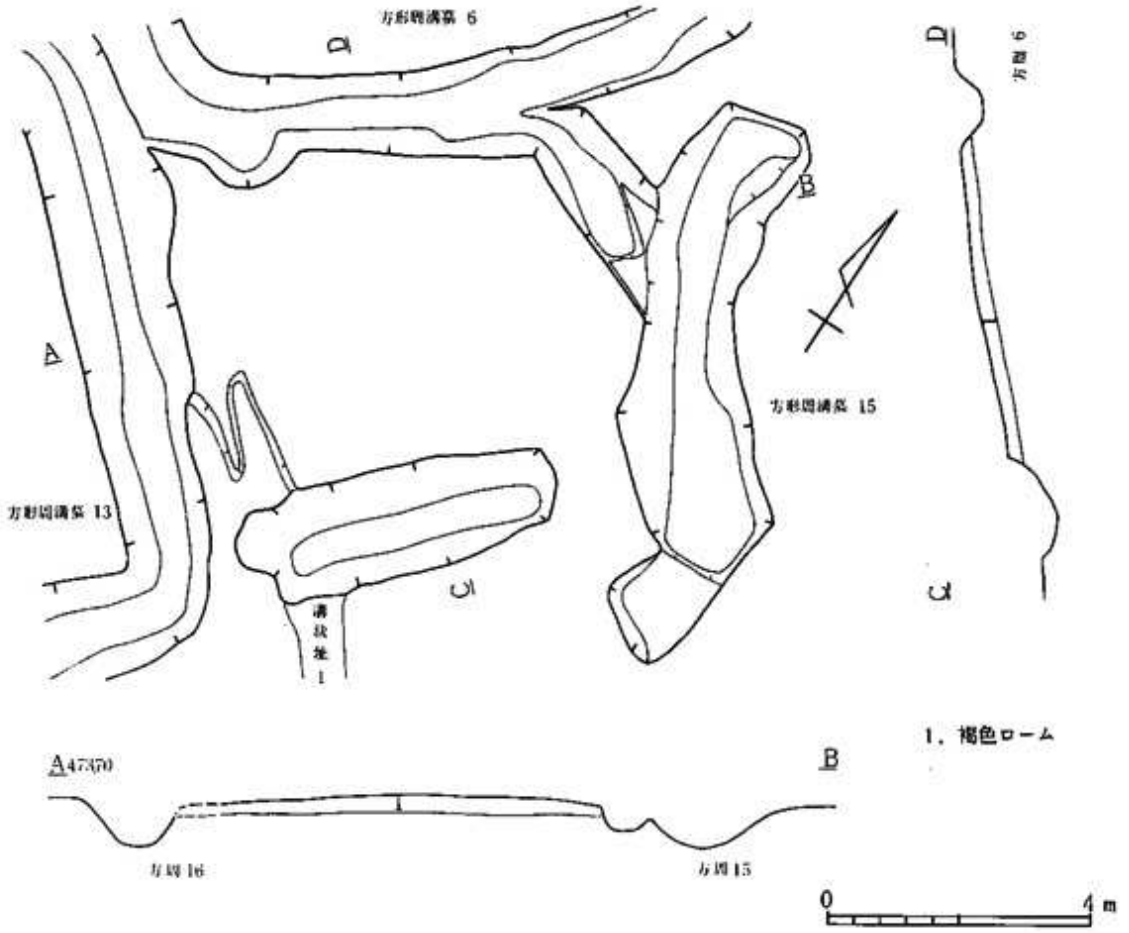
挿図25　方形周溝墓15

◇方形周溝墓16（挿図26）

方形周溝墓6の南側で傾斜がきつくなる箇所で、方形周溝墓13、方形周溝墓15との間で確認した。10×8mの隅丸長方形と見られるが、北側の周溝は方形周溝墓6のそれと共有

し、西側では方形周溝墓13のものと共有している。東側では方形周溝墓15の周溝を切っている。したがって、この周溝墓自体の周溝は南東側に約５ｍと北のコーナーに少し残るだけである。南東側の周溝の幅は1.6ｍ深さ70㎝前後である。北コーナーでは、幅1.3ｍ深さ20㎝前後と比較的浅い。入り口部分は南東側の周溝の両側で周溝が切れるため、２か所あるものと見られる。主体部はわからなかった。

遺物の出土はなく、時代もわからないが周溝墓15よりは新しい。　（佐合）



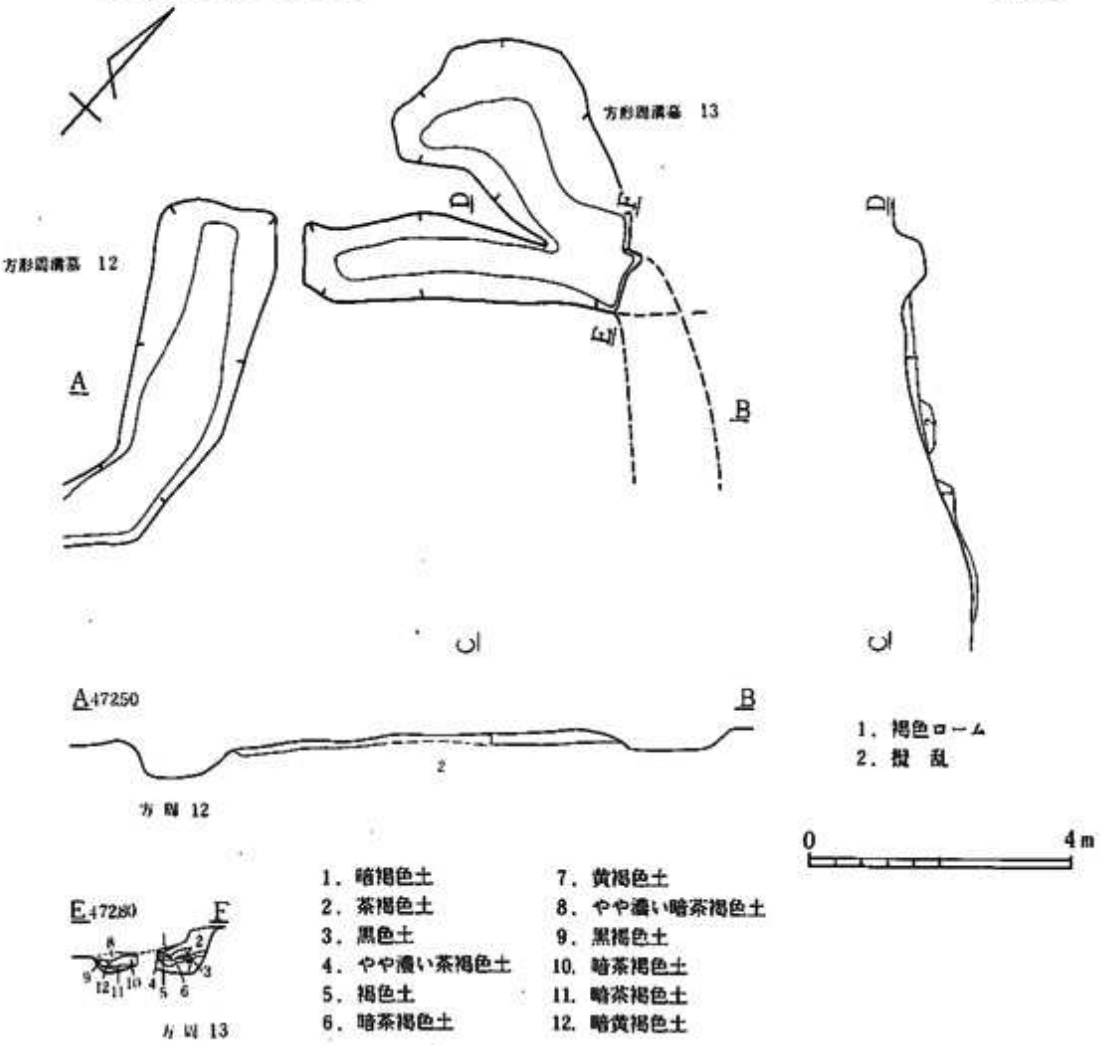
挿図26　方形周溝墓16

◇方形周溝墓17（挿図27）

方形周溝墓12の東に接した箇所で溝を確認した。さらには、周溝墓13の南コーナーで２本の溝が１本になっている。その箇所は松の木があり、調査できなかったが、やや低い落ち込みが傾斜に沿って延びているようにも見えた。西側の周溝墓12の周溝を共有しており、南側では周溝が確認できなかったため、範囲を斜面に張り出したテラス状の場所までとした。したがって、規模は（９）×（７）ｍの長方形であると推定した。調査できたこの周

溝墓自体の周溝は周溝墓12と13の間で調査した長さ５ｍの部分のみであり、幅1.2ｍ深さ35cmと浅い。主体部の所在確認のため、トレンチをいれたが主体部はわからなかった。

遺物の出土はなかった。　（馬場）



挿図27　方形周溝墓17

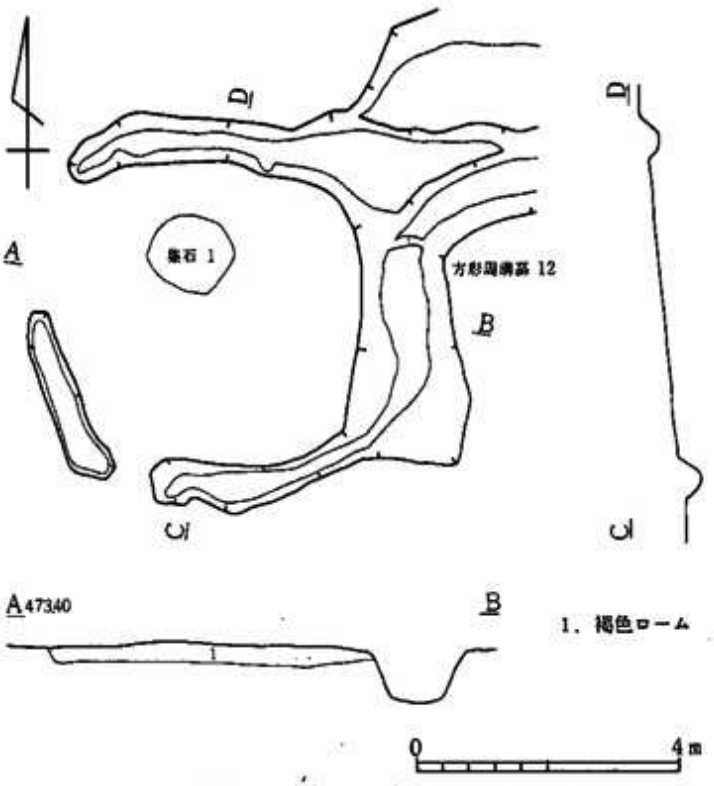
◇方形周溝墓18（挿図28）

方形周溝墓12の西側で細い溝を検出した。一部に木の株がありとぎれた部分もあったが、ほぼ方形になるため方形周溝墓とした。６×６ｍの隅丸正方形であり、他の周溝墓に比べて小型である。東側の周溝は方形周溝墓12の周溝と共有しているものと見られる。この部分は幅1.5ｍ、深さ60cmとしっかり掘り込まれている。しかし、その他のものは約0.7ｍと細く、深さも20cm足らずと浅い。北東の角では周溝の底が段になっており、見方によっては周溝墓12が切っているようにも見える。しかし、南側ではこの底がひとつづきとなっているため、そうとも断言できない。西側の周溝は３ｍしかなく、両側は切れている。この

箇所を入り口部分とした。周溝に囲まれた部分のほぼ中央には集石があったが、溝確認面より上部であり本遺構と直接関係するか否かの判断はできない。

遺物の出土はなく、時期の特定にはいたらなかった。　(吉川)

以上、18基の周溝墓のうち、溝の切り合い関係で直接前後関係を確認できたのは以下のとおりである。



挿図28　方形周溝墓18

周溝墓5は周溝墓13より古く、さらに周溝墓13は周溝墓17より古い。周溝墓10は周溝墓14より古く、周溝墓15は周溝墓16より古い。

いずれにしても、これらの周溝墓があまり、時間差のない間で連続して構築されたと判断される。

これらの周溝墓の切り合い関係や構築箇所、形態等により少なくとも3時期にわたって造られたものと見られる。

第1時期　段丘縁部からやや離れた場所に造られた規模の比較的大きなもの。

周溝墓3・5・6・7・8・10がこの時期と見られる。

第2時期　段丘の斜面にかけて造られている規模の大きなものである。

周溝墓11・12・13・15がこの時期と見られる。

第3時期　段丘縁部の斜面にややかかった箇所で2時期に造られた周溝墓の間に造られた規模の小さなもの及び段丘からはなれた場所に造られたもの。

周溝墓1・2・9・14・16・17・18

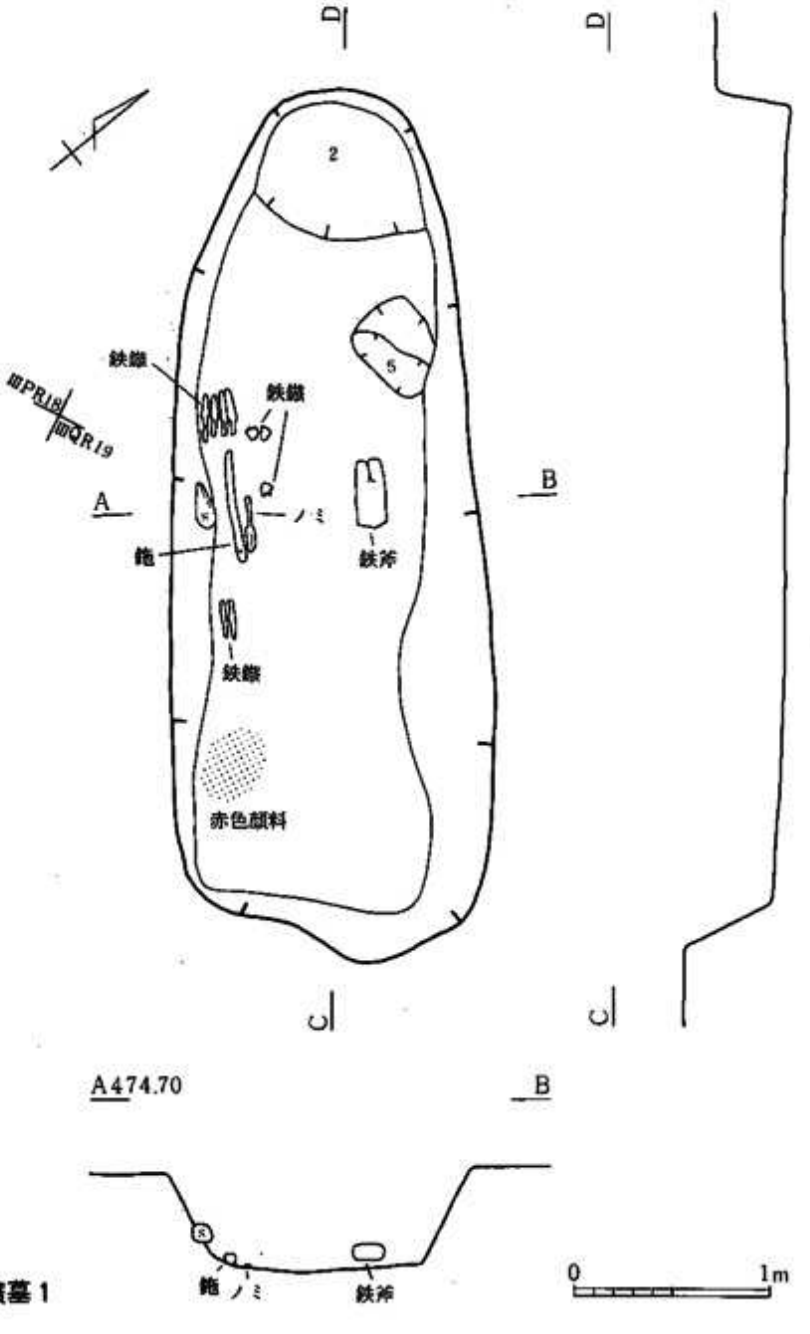
周溝墓4について形態等が不明なため、上記の3段階に入れなかったが、出土土器のみから見れば、一番古い時期に築造された可能性がある。

なお、鉄器の出土している土壙墓は第3時期になるものと考えられる。遺物から判断して時代的には5世紀後半とみるのが妥当だろう。

2) 土 壙 墓

◇土壙墓１（挿図29、第20・21図）

方形周溝墓８の西側で溝状の遺構を検出した。当初、溝と考え掘り下げたところ長さは約２ｍで終ってしまった。さらに底部直上からは鉄器が出土した。幅・深さから見て土壙墓と判断した。



挿図29　土壙墓１

北西から東南に延びる長方形に近い掘り込みである。北西端は攪乱により切られているものの、規模は2.2×0.7mと見られる。底部は中央部にやや傾斜している船底形であり、最深部で28cmを測る。北西側は底部まで攪乱が及んでおり、やや低い落ち込みが見られる。壁は北側が比較的急角度に掘り込まれている以外は、垂直に近い掘り込みである。

木棺直葬の土壙墓と判断されるが、棺の形態についての詳細は不明である。

覆土は暗褐色土であった。南側の角付近の覆土中には赤色顔料とみられる朱色の粒子が土に混じっていた。その範囲は直径15cm程度であり、この部分に遺骸の頭部があったとも考えられる。

遺物としては、鉄器が数多く出土した。遺骸の左側（土壙墓の南側）にまとまっている。20図1、2は平根の鉄鏃である。寸法は1で、長さ3.8cm、最大幅3.8cm、厚さ0.3cmを測る。2は長さ4.0cmで最大幅は3.8cm、厚さ0.3cmである。いずれも二重の逆刺をもち短かい茎を有する三角形状のものである。3はやはり平根の鉄鏃であるが、長さ5.5cm、最大幅3.1cm、厚さ0.3cmと形は縦長の三角形である。逆刺は浅く、短かい茎を有している。4、5は柳葉形の鉄鏃である。両方とも鏃身部は両丸造りで逆刺はない。寸法は5で全長は10.3cmある。刃部は長さ4.8cm最大幅1.4cm厚さ0.4cmを測る。5は茎部が折れているため、全長は8.1cmであるが、刃部は4.3cm最大幅1.6cm厚さ0.4cmである。6、7は鉄鏃の一部と見られ、断面は正方形をしている。8、9は小型であるが、刃先が平になっているところから鑿と判断される。8は、長さ8.2cm刃先の幅は1.1cmを測る。9は全長8.6cm、刃先の幅は1.3cmである。10も鑿である。全長は16cmと長く刃先の幅は1.4cmを測る。

21図1は特殊な鉄鏃もしくは錐状工具である。全長11.3cmで断面は正三角形をしており、先端は尖っている。この三角形をしている部分は6.0cmの長さがある。2は鉇である。全長30.8cm幅は1.4cmと一定である。刃はかなり磨滅している。

それに対し、右側で出土したものは3つの鉄斧がある。全長17.6cmある。この鉄斧は刃先はやや広がっており、幅は5.9cmを測る。基部は方形に近い円形で5.0×4.1cmである。平面形ではほぼ長方形である。

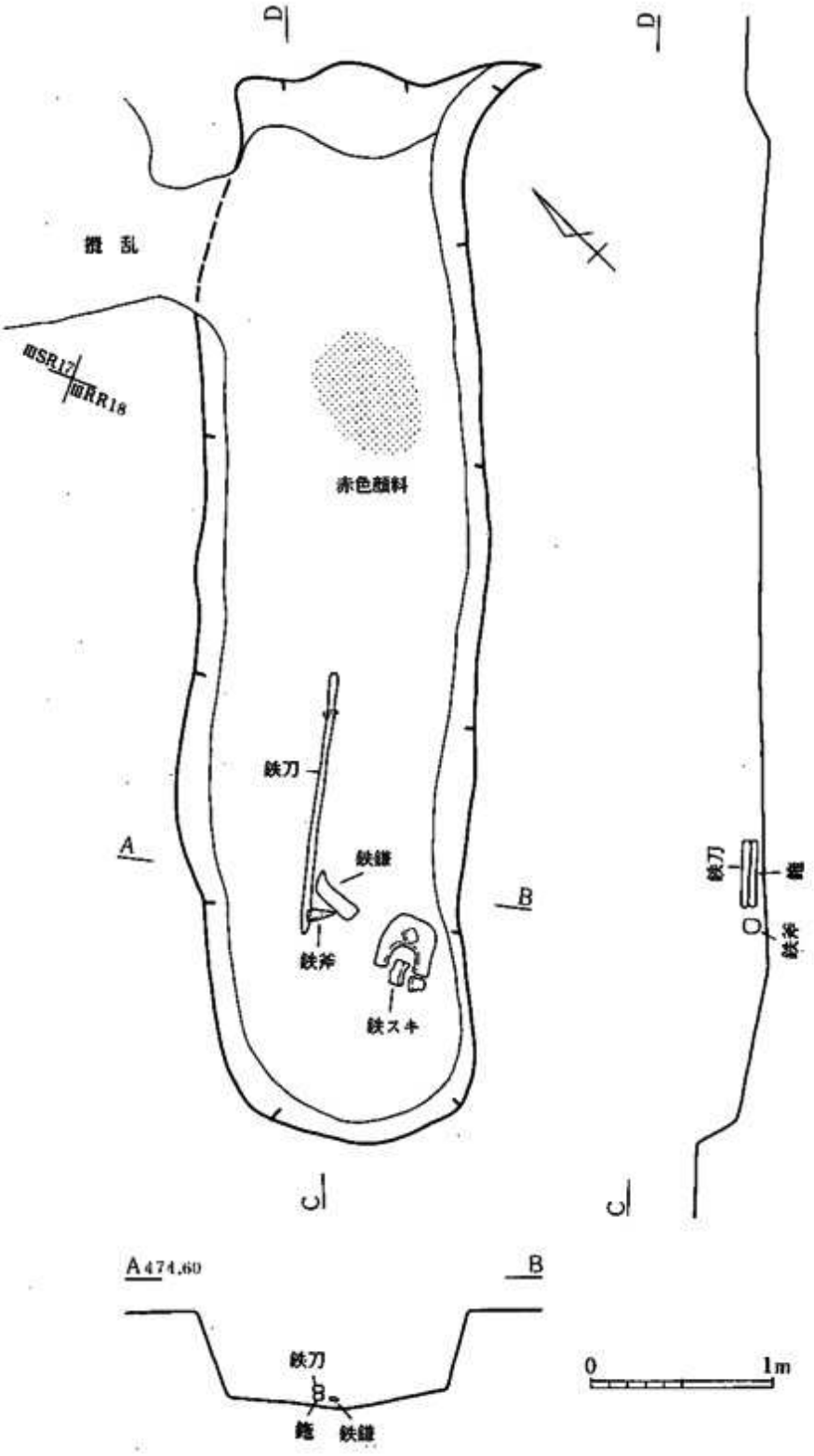
この土壙墓の時代は出土した鉄器のうち編年研究のされている鉄鏃から見て、5世紀後半と見られる。（吉川）

◇土壙墓2（挿図30、第19・22・23図）

土壙墓1の北隣にほぼ直交する南西から北東方向に延びている。北東端は攪乱により破壊されているため、規模は推定で2.5×0.9mの長方形と見られる。底部は中央にやや傾斜している船底形であり、深さは23cmと浅い。壁は垂直に近い掘り込みであるが、攪乱部分は確認できなかった。

土壙墓1と同様に木棺直葬であろうが棺の形態判断は困難である。

覆土中には、赤色顔料が含まれた部分が中央やや北東よりにあった。やはりこれも遺骸



挿図30　土壙墓 2

の頭部の位置と判断できる。

遺物には、鉄器がある。22図1は鋤先で、寸法は長さ20.0×幅で19.5×13.9cmを測る。ちょうどU字型をしている。2は小型の鉄斧であり、全長9.0cm。刃先が方減りしているが、刃先の幅は5.0cmを測る。基部はC字型になっており、3.4×2.3cmある。23図2、3は鎌であるが、破損している。寸法は長さ12.0cm幅3.0cm最大の厚さになる背で0.3cmを測る。これらは遺骸の足元とみられる場所からの出土である。さらに、やや西の壁よりからは、4の直刀と1の鉇が重なって出土した。直刀は、鞘の木質がかなり残っているものの、錆がすすんでおり、切先も欠けている。長さは65.0cm、幅は刃部で2.3cm、茎の胴部は木質が残っているため本来の幅はわからないが、やや細く2.1cmであった。

また、鉇は完形であり、長さは29.4cm幅は1.6cmでほぼ一定である。刃部は柳葉状になっている。

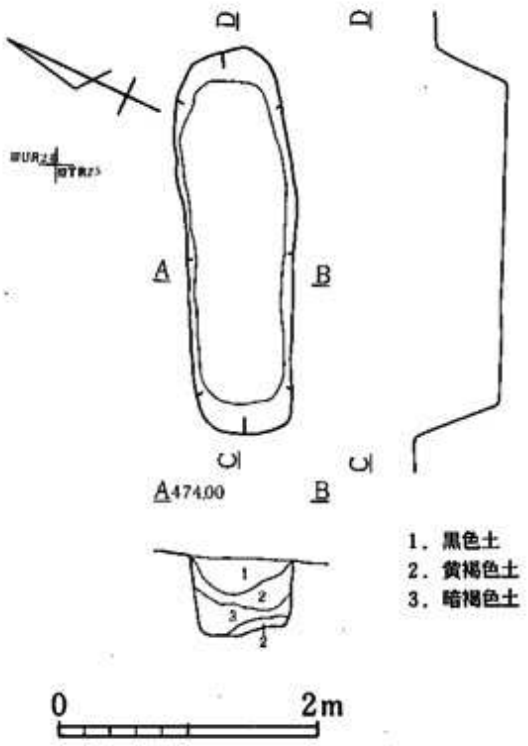
底部の土を持ち帰り、水洗いしたところ臼玉が3個出土した。(19図7～9)

出土鉄製品類の形態から5世紀のものとみられ、6世紀までは下らないと判断した。したがって、この土壙墓も土壙墓1と同時代のものと考えられる。　　(吉川)

◇土壙墓3（挿図31）

方形周溝墓8の南側で確認した土壙墓である。長さ3m幅0.9mのもので、底部は平坦である。深さは最深部で0.71mを計る。壁は比較的急角度で、断面形は逆台形になっている。

覆土からの遺物の出土はないため、遺構の性格も時期も不明であるが、形態から土壙墓と判断した。　　(馬場)



挿図31　土壙墓3

4．平安時代

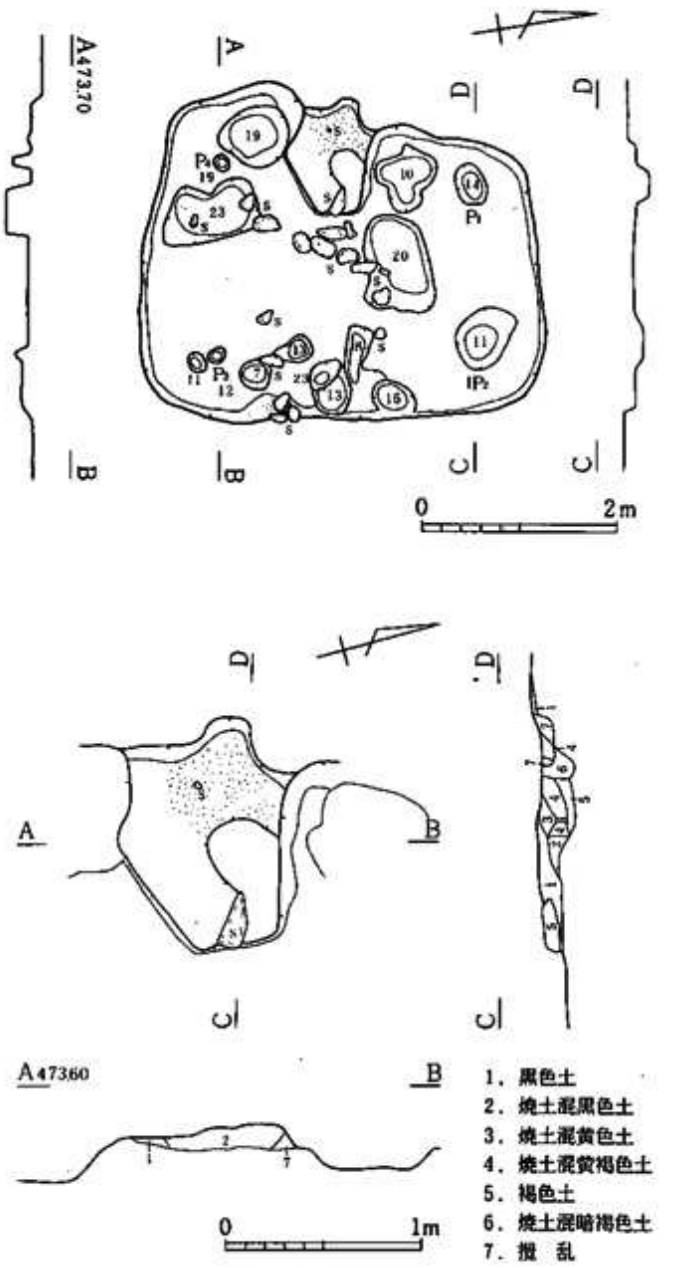
1）住居址

◇1号住居址（挿図32・第11図）

調査区域の西寄り、用地測量杭センター182の南側で漆黒土に焼土が混じった覆土を検出した。さらにこの覆土には人頭大の石が数個含まれており、火事の家と判断された。東側の壁中央付近は溝3により切られているが、住居址には余り影響はなかった。

規模は4×3mのやや台形に近い隅丸方形である。壁は10cm前後の掘り込みしかなく、立上がりもやや緩やかである。床面には穴が多くあり、貼り床は所々にしか見られない。主柱穴は4つそれぞれのコーナー付近で確認した。西側にある2つのものの掘り方は18cmと小さいのに対し、東側の2つの掘り方は、倍以上ある。しかし、深さはいずれも15cm前後と浅い。

その他の穴では東側



挿図32　1号住居址

の壁の中央部に4個の穴がまとまっている。カマドが西側の壁の中央部に残っていることから見て入口施設に関係した可能性がある。また、カマドの両脇にもあまり深くない穴や、焼土がはいる穴がある。いずれも不整円形で、遺物も出土しているが、性格は不明である。

入り口、カマドの位置から主軸方向はN82.5°を示していた。

カマドの残存状況はよくなかった。形態は石芯と考えられるが、石はすでに抜かれていた。断面調査時に石の抜けた跡が確認できた。焚口部分の焼土層は破壊されているためか見られなかった。

この住居址からは比較的多量の土器が出土している。土師器としては、長胴甕が3固体分いずれも、カキメが表面に残っている。さらには坏の破片もあった。

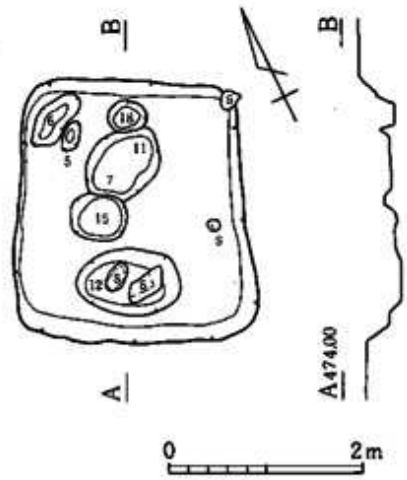
須恵器は坏が中心である。糸切の跡が残っているもの、高台の付くものと付かないものの2種類がある。いずれもロクロで整形されている。蓋も比較的多く出土しているが、いずれも破損している。さらに器形はわからないが、壺・甕と見られる須恵器片もある。

出土土器から判断するかぎり、平安時代前期の住居址である。（吉川）

◇2号住居址（挿図33・第12図）

1号住居址の北西8m隔てたところで検出したものである。2.7×2.3mの隅丸正方形である。床面ははっきりしていない、さらにカマドもないため、正確には住居址と呼べないかもしれないが、遺物の出土があったため住居址と考えた。

床面は西にやや傾斜している。深さは最も深い西コーナーで30cmで浅い東コーナーでは18cmである。さらに床面には、6個の穴があり、そのうち4個が東から西へ並んでいる。しかし、柱穴とは考えられない。



挿図33　2号住居址

出土遺物としては、表面にカキメ調整痕のある長胴の土師器甕の口縁部と須恵器の坏がある。坏は火襷のあるものは、焼成がよくない。もう一つは高台付きのものである。

土器から判断すれば平安時代前期の遺構である。通常の住居址というよりは、特殊な性格を有する竪穴の可能性が強い。（吉川）

◇4号住居址（挿図34・第12図）

1号住居址の北約10mのところで検出し、完掘した。壁は北側で土坑により切られている以外は残っている。壁の掘り込みは比較的急角度ではあるが、いずれも浅く23～28cmである。表土剥ぎの時に検出面を下げ過ぎた可能性もある。貼り床は多少残っているが、全体的には明瞭でない。床には、数個の穴が確認できた。主柱穴は4つとみられるが、いずれも他の穴と切り合っており掘り方がわかるのは、南西コーナーで確認できた直径40cmの

円形もので深さは10cmとごく浅いもののみであるが、他の主柱穴も同程度と見られる。カマドは東の壁の中央付近にある。断面調査でも石・粘土の層はなく形態は不明である。しかし、炭の層がしっかり残っており使用頻度の高かったことを示している。

カマドの位置からこの住居址の主軸方向はN100°Eである。

この住居址からは土師器の長胴甕と須恵器の蓋および坏が出土しているが、量的には比較的少ない。

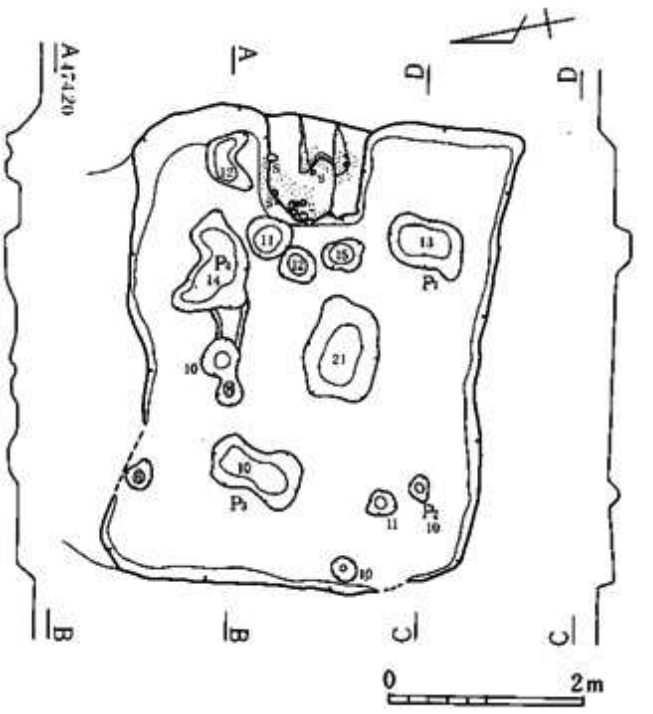
出土土器から判断するかぎり、平安時代前期の住居址である。

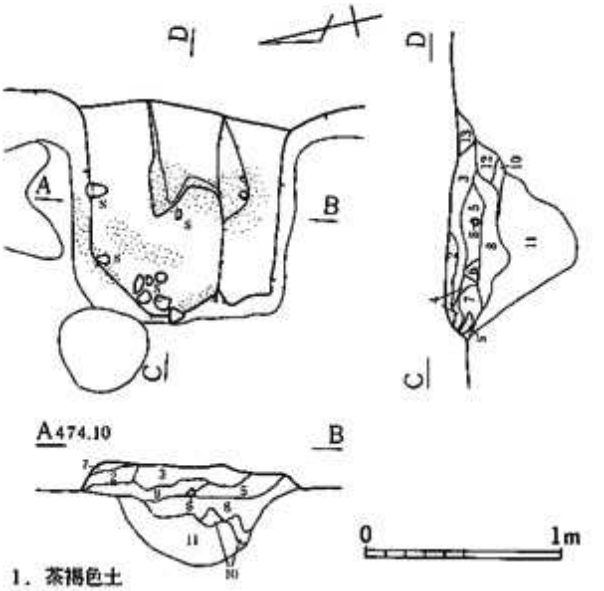
（渋谷）

◇5・6号住居址（挿図35・第13図）

4号住居址の東で検出した。当初はひとつの住居址としたがセクションの観察からふたつが切り合っているものと判断した。西側を5号住居址、東側を6号住居址とした。同時に掘り下げたため切り合い関係ははっきりしない。

5号住居址は壁のコーナーから8×6.4mの隅丸方形と推定できる。南側の壁は大きな穴に切られており、一部欠ける。また、北西のコーナーには中段があるが、住居址に関係したもの

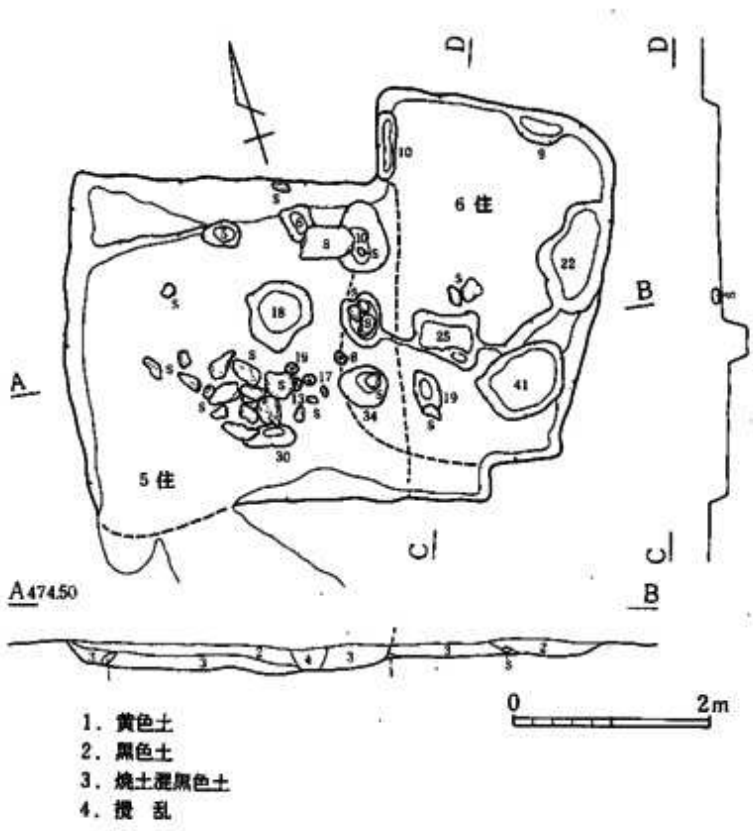




1．茶褐色土
2．黄褐色土混茶褐色土
3．焼土粒混暗褐色土
4．暗黄褐色土
5．焼土ブロック混暗褐色土
6．暗茶褐色土
7．黒色土
8．炭
9．焼　土
10．褐色土
11．こげ茶色土
12．暗褐色土
13．黒色土

挿図34　4号住居址

かどうか決め手がない。壁は、北側の残存状態が良好で、深さ31cmあり、急角度に立ち上がっている。それ以外は10cm前後の深さしかない。床はあまりしまっていない。床面にはいくつかの穴があるが、主柱穴は特定できなかった。中央に並ぶ3つの穴はこの住居址につくものと考えるが、性格は不明である。また、カマドの位置も不明である。



挿図35　5・6号住居址

6号住居址はやはり検出できたコーナーから7×4.8mの隅丸方形と推定できる。壁は全体の東半分が残っているが、せいぜい10m前後で立上がりはやや急角度である。床の中央部に貼り床が残っている。5号住居址との境は床面が一段高くなった部分と考えられる。北側の壁直下には2か所に周溝と見られる細い溝が確認できた。いずれも長さ1.2m幅0.4m深さ10cmである。その他床面では数個の穴が確認できたが、性格は不明である。ただ、東側の壁中央にある2.2×1.4mの楕円形のものは入口施設の可能性もある。

遺物は覆土中の物が多く分けることができなかったため、5・6号住居址を一緒に記述することにした。

出土遺物としては、土師器の長胴甕にはその表面にカキメ調整痕がある。坏では土師器は内黒処理が施されている。須恵器のものには高台の付くものと付かないものがある。蓋は須恵器であり、1点のみの出土である。そのほかには、丸底で頸部の立上がりのほとんどない須恵器の壺がある。口縁の作りから蓋が付くものと見られるが出土していない。さらには、長頸壺と見られる高台の付いた壺片が出土している。

この住居址は新旧関係が不明であり、出土遺物もほとんど時間差が認められず、両方とも平安時代の前期のほぼ連続した時期に建て替えられた住居址といえる。　（吉川）

2) 土　　坑

◇土坑３（挿図37、第14図）

２号住居址の北東で検出中に焼土がかたまっている部分があったため、土坑として調査した。焼土の厚さは比較的薄かったが南側にかたよっていた。その下には漆黒土が確認できた。この土が土坑の覆土である。直径1.4ｍの円形、深さ84㎝である。底部は中央にやや窪んでいる。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

遺物は上部の焼土中からの出土したものである。須恵器の坏は無台のものであり、底部には糸きり痕がある。また、須恵器の甕は一部破片が出土したのみであるが、自然釉がかかっている。遺物は平安時代に属し、住居址等との関連が考えられるが性格等は不明である。

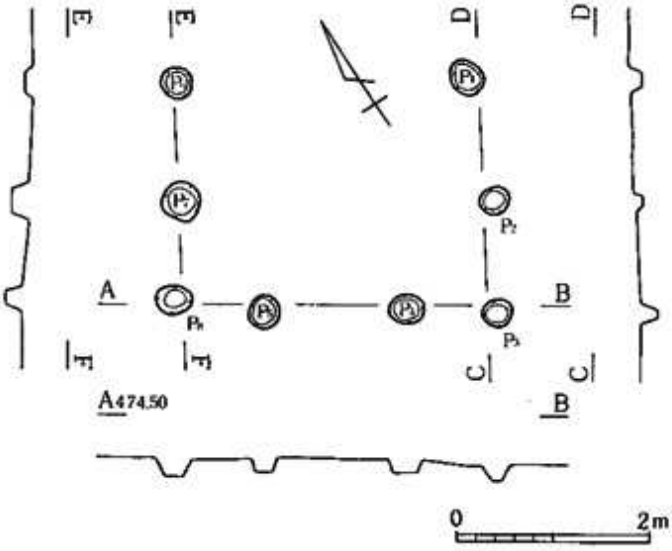
（吉川）

5．時代不明

1) 掘立柱建物址

◇掘立柱建物址１（挿図36）

３号住居址の北西で直径30㎝前後の柱穴を８個検出した。それらの柱穴の配列から建物址と判断した。しかし、北側は表土剥ぎで深く削り過ぎたため建物の規模ははっきりしない。調査できた部分は３×(２)間のみである。柱穴の深さは15㎝前後と比較的浅いが、掘り込みは比較的急角度である。



挿図36　掘立柱建物址１

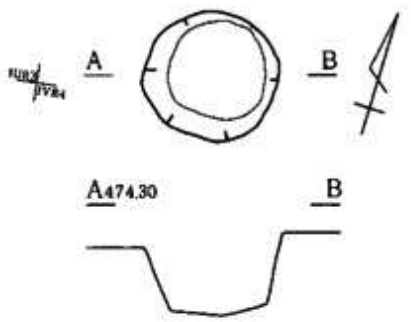
柱穴およびその周辺からの遺物の出土はなく時期の特定はできなかった。また、この建物の性格についても不明であるが、周辺に分布する平安時代住居址群との関連も考えられる遺構である。

（吉川）

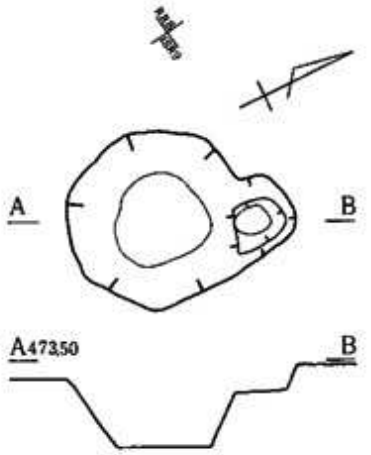
2) 土　　坑

◇土坑４（挿図37）

１号住居址の西側で検出した、直径1.8ｍの円形であるが北側を0.8ｍの別の穴が切っているため不整円形となる。深さは81㎝で、底部はほぼ平坦である。壁は北側に前述した穴が在り、中段のようになっているため、２段に立ち上がっている。それ以外はほぼ垂直の立上がりをもっている。



土 坑 3



土 坑 4

土 坑 6

土 坑 11

0 2m

挿図37 土坑3、4、6、11

覆土からの遺物の出土はなく、性格・時期ともに不明である。（吉川）

◇土坑６（挿図37）

７号住居址の西で、検出した。２×1.2ｍの楕円形である。両側に耕作の跡が残っており、一部東側の壁を切っているが、さほど土坑には影響がない。深さは71㎝と比較的しっかり掘り込まれている。底部はほぼ平坦である。壁は全体的に急角度であるが、北側と西側は東側や南側に比べれば立ち上がる角度はやや緩やかである。

暗褐色の覆土からはなんの遺物の出土もなく、性格・時期ともに不明である。（吉川）

◇土坑11（挿図37、第14図）

方形周溝墓９および10を検出中、周溝を切って確認した。２×1.2ｍの長方形の土坑である。底部は西から東へ傾斜しており、検出面からの深さも一番浅い西側で27㎝、一番深い東側で39㎝を測る。壁は比較的急角度に立ち上がっている。

出土遺物としては、南側の壁中央付近から、土師器の壺の口縁のみが出土しているが、周溝墓の遺物とも考えられるため、時代特定の資料にはならなかった。したがって、時期および性格は不明である。（佐合）

3） 溝

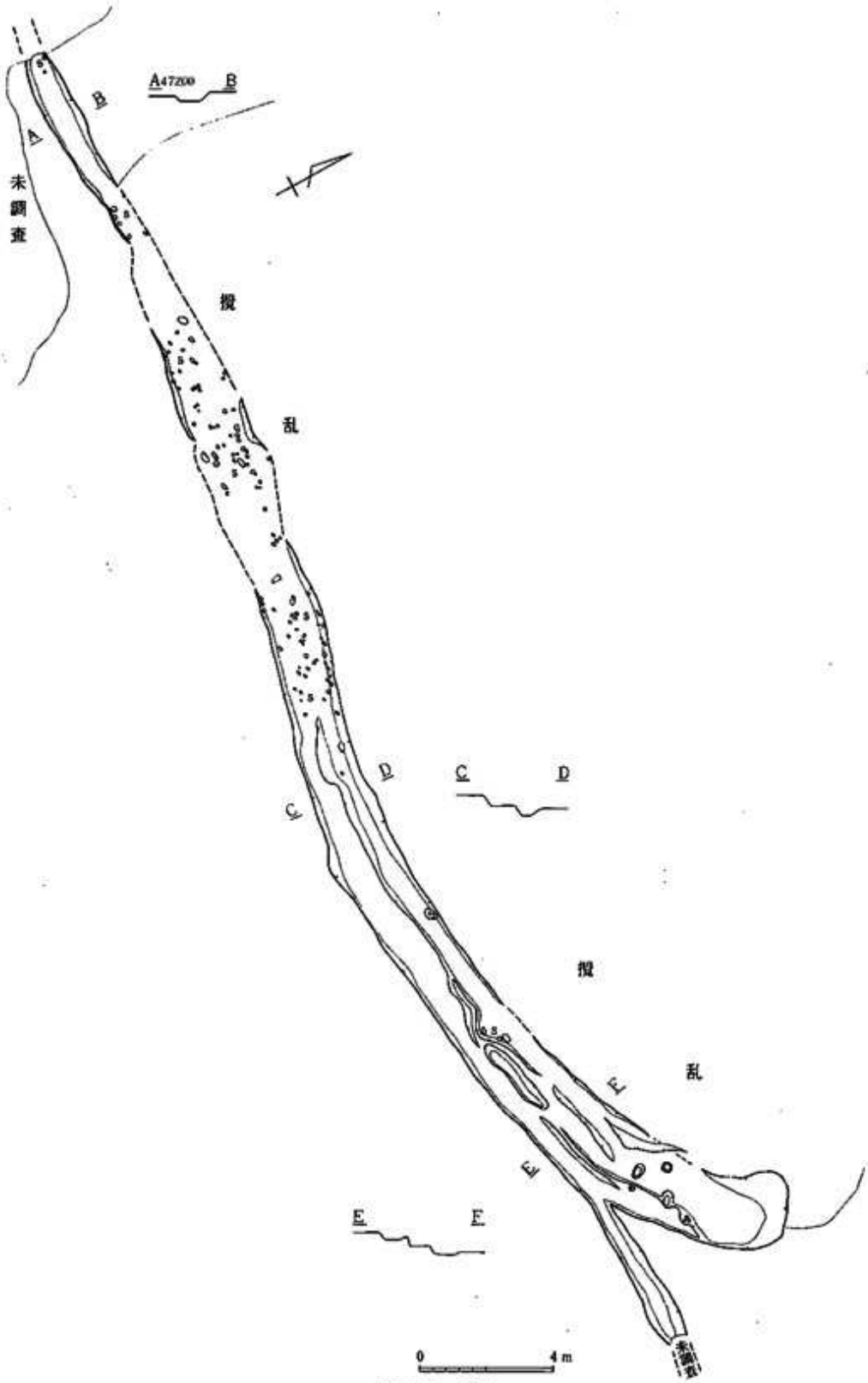
◇溝１（挿図38）

調査区の西より、南側に金色洞（乞食洞）と呼ばれる沢が山の斜面を流れている。その沢沿いに旧道に通じる細い坂道がある。今回の調査はこの道の東側の斜面をかけのぼった段丘の上である。

試掘着手以前にこの地を踏査したときには崖によった部分は笹が群生していたが少し低くなっていることが看取された。表土剥ぎを実施した時点で以前畑へ通うための道があったことが分かった。遺構の検出を実施した結果、この場所はかなり大きな落ち込みがあることが確認できた。また、旧道の脇にあたる部分に幅１ｍ深さ30㎝前後の掘り込みが東西に伸びていたため溝とした。

調査した部分の全長約4.3ｍであるが、さらに東西に延びるものと見られる。北側の壁は隣接する落ち込みのためほとんど残っていない。調査範囲の東側半分は南北に２本になる。これは別れたものというよりも２本あったものが、途中で１本になって西へ延びたものと考えたい。底部は地山の礫が露出しているが、おおむね平坦である。覆土は黒色土の１層の堆積であり、砂等の層は確認できない。したがって、この溝は水流によるものではないと判断できる。

崖の斜面とこの溝との間に１ｍ程度の平らな部分が溝と平行して延びている。このような状況から、この溝は道の側溝に類するものと考えられる。しかし、溝からの遺物の出土はなく、時期は不明である。（吉川）



挿図38　溝1

◇溝２（挿図39、第14図）

方形周溝墓１を切って東西に延びている。溝３に切られ、溝８と接している。全長20mである。西端から8.5mで一度切れる。この部分はちょうど方形周溝墓１の南側の周溝内に当たる。さらに、東へ5.5m延びると再び方形周溝墓１の東側の周溝を切る。この部分では周溝のほうが深いため、この溝の底部が切られている格好になっている。ここから東へ７m延びるが、やや北に向きを変えて溝３に切られる。幅はおおむね一定で１m、深さは一度切れる部分が一番深く73cm、西端では42cm、東側の周溝を切る部分では27cm、溝３に切られる東端で16cmである。底部には多少の凹凸があるが、おおむね平坦であり水流の痕跡は確認できない。掘り込みはほぼ垂直である。

覆土からの出土遺物は、打製石斧や横刃形石器があるが、これらは混入したものと考えられる。その他には近世の陶器片があるが、時代決定の資料にはならなかった。性格も不明である。（吉川）

◇溝３（挿図39）

調査区は以前は畑と林であり、その境界を細い道が通っていた。林と道と、道と畑との間には段差があった。つまり、林の脇を通る道が低くなっていた。

表土剥ぎを地形通りに実施したため、林の部分と畑の部分の間には段差が残った。続いて実施した遺構検出ではこの低い部分がまわりとは土の色が違っていたため、溝であると判断し、調査を実施した。

検出時には１本としたが、掘り下げるにしたがって２本の溝が切り合っていることがわかり、崖よりのものを溝３とした。

調査の結果この溝は１号住居址から始まり、クランク状に方向を変えながら東へ延びていく。その途中で３号住居址と方形周溝墓１を切りさらに東へ延びる。方形周溝墓２の西側で再び方向を北に変えて延びている、方形周溝墓４付近からは林の肩の斜面で確認した。さらに北へ延びるものと見られ、最終的には方形周溝墓９の北側に広がる攪乱に続くものと見られるが、途中で調査を中断してしまった。

調査した全長は83mに及んだ。１号住居址から15m東へ延びる部分は幅1.5mから徐々に狭くなり、深さも43cmから８cmへと徐々に浅くなる。これは検出面が斜面にかかるためである。壁がなくなる部分が約７m続き、方向をほぼ直角に曲がる部分では、３号住居址を切って、さらに10mほど東へ延びる。この部分の幅は約１m、深さは約40cmと再び深くなる。壁は南側は斜面になるためあまり残っていないが、北側はほぼ垂直に掘られている。セクション観察をした部分がちょうど曲がり角にある。ここからこの溝は東へ32m延びる。その間に、方形周溝墓１の西側で溝５に切られている。さらには方形周溝墓１を切っている。溝５に切られている部分からは溝４と平行して延びている。この部分は多少曲がるもののほぼ直線的にのび、幅は壁のはっきりしたところで約１m、深さは溝５に切られた部

分が60cmで、方形周溝墓1を切っているところが78cmと一番深くなる。底部にはいくつかの穴があるものの、東へ向かうにしたがいやや浅くなり、方形周溝墓2の西側では59cmとなる。ここから溝は北へ延びていく。ここでは、方形周溝墓2を切っている。

遺物としては出土した須恵器の高坏の脚部には窯印と見られるばつ印がある。それ以外には近世の陶器片が出ている。しかし、時代特定はできなかった。性格については断定は困難であるが、段丘端部を通過する道路址もしくは段丘崖直下に八幡町並が存在することから、それへの土砂崩落防止を目的とした施設等が考えられる。（吉川）

◇溝4（挿図39・第15図）

溝3の北側（道路用地のセンターより）のものを溝4とした。溝3に比べ深く、広い。方形周溝墓1と方形周溝墓2を切っている。

方形周溝墓2付近で方向を北に変えて溝3と同じ攪乱へ延びていくものと見られる。調査した全長は方形周溝墓1の西側から溝が向きを変える方形周溝墓2付近までの20mのみである。

方形周溝墓1の東側の周溝を切る部分までは耕作の攪乱が上部を覆っていたため、検出面は20cm前後低くなった。南側には溝3が平行して延びているため、壁はこの溝に切られている。それに対し北側の壁はほぼ垂直に掘られている。

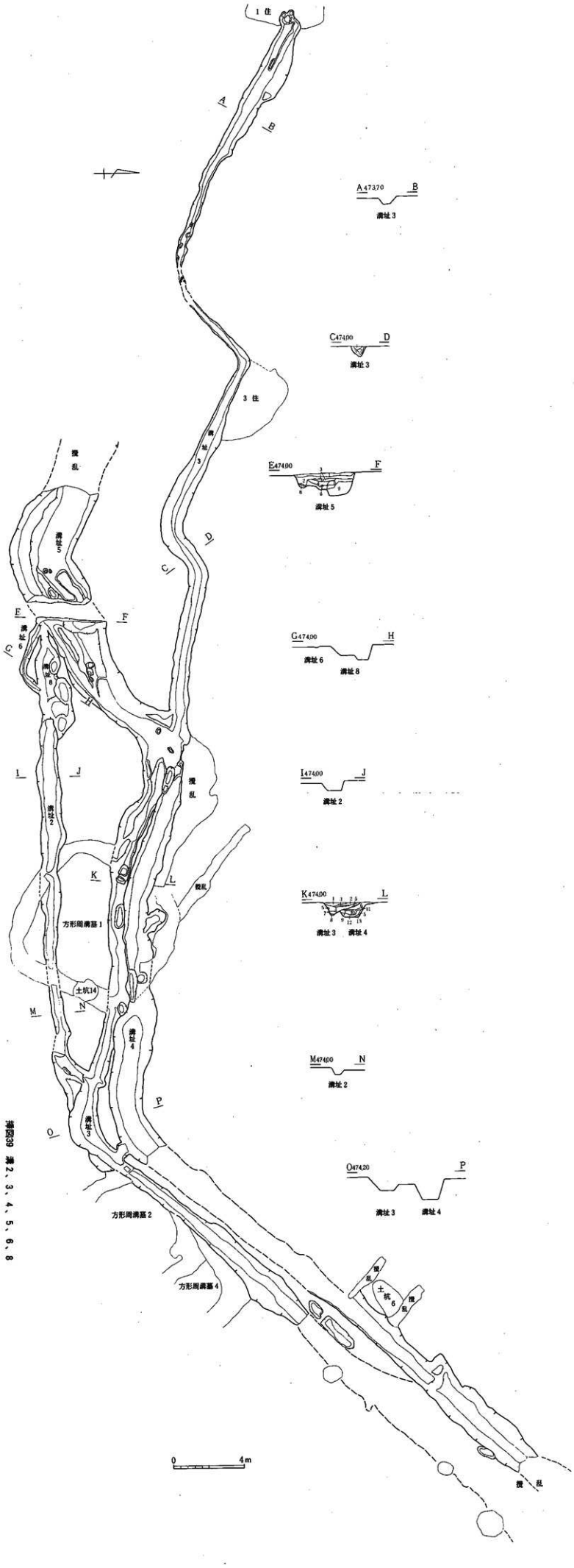
方形周溝墓1を切った部分で底部は約0.4m低くなり、さらに東へ8m続く。底部は平坦である。覆土の状態から人為的に埋められたものと判断できる。壁はほぼ垂直に底部から立ち上がっている。この状態のまま延びるものと判断したのは、土坑6の東側で攪乱と一緒に掘った部分も同様の形状を成していたためである。

遺物は中世と見られる陶器片や縄文土器片、須恵器の破片が出土しているが、時代を特定する資料にはならなかった。さらに、自然水流の痕跡がないところから、なんらかを区画する溝であった可能性が強く、溝3と同様の性格も検討の要がある。（吉川）

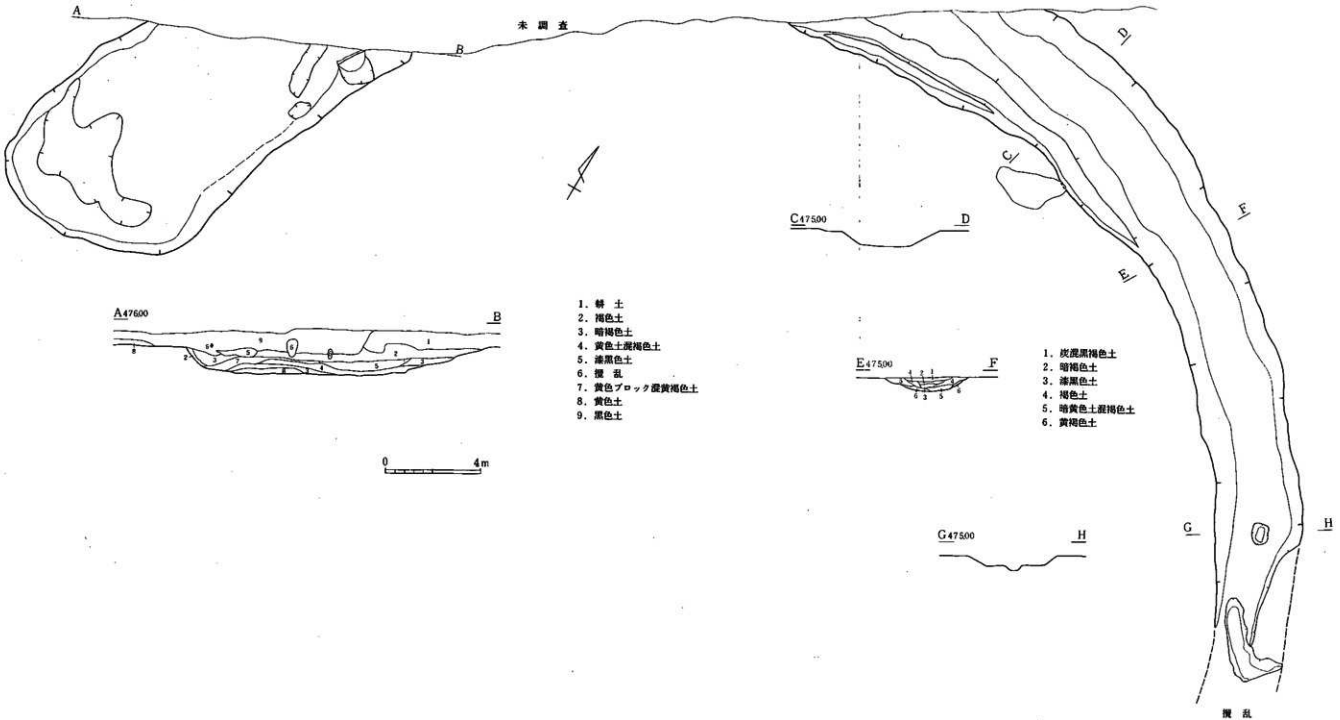
◇溝5（挿図39・第15図）

方形周溝墓1の西側には、耕作による攪乱がかなりの範囲に広がっている。この攪乱の下で溝4はなくなる。溝4と平行して延びてきた溝3はさらに西へ延びている。ここから南へ延びる幅2mの溝がある。この溝はさらに南側にある山の斜面へ向かうものと見られる。南端は表土を剥ぐ以前、一段低い畑であり、遺構が削平されているものと判断し、排土を集めてしまったために完全な調査はできなかった。調査できた部分の全長は17mほどである。南に進むにつれて、幅は広くなり、最大幅は南端で3.5mになる。また、深さも北端で0.6mであるが、一番深くなる南端では1.1mを測る。また、底部をみると中央部にはかなりの起伏がある以外は、平坦である。掘り込みはほぼ垂直である。しかし、南東の壁は2段になっている。

覆土からは打製石斧や横刃形石器と同時に近世の陶器片が出土しているが、時期の特定



第図39 溝2、3、4、5、6、8


A
B
未 調 査
C 47.500
D
E
F
G
H
A 47.600
B
E 47.500
F
G 47.500
H
0
4m
1．耕 土
2．褐色土
3．暗褐色土
4．黄色土混褐色土
5．漆黒色土
6．攪 乱
7．黄色ブロック混黄褐色土
8．黄色土
9．黒色土
1．炭混黒褐色土
2．暗褐色土
3．漆黒色土
4．褐色土
5．暗黄色土混褐色土
6．黄褐色土
攪 乱

挿図40 溝7

はできなかった。自然水流とも考えにくく、性格は不明である。　（吉川）

◇溝6（挿図39）

溝5の東側で溝8に切られる細い溝を確認し、溝6とした。この溝の調査できた部分の全長は4mあるが、途中でほぼ直角に曲がる。さらに溝8の北側へ延びるものと推測される。幅0.5mでほぼ一定である。深さは8cmとごく浅い。壁の掘り込み比較的急角度であり、断面形で逆台形である。底部はほぼ平坦であり、水流の痕跡はない。

覆土からの遺物の出土はないが、覆土の色が漆黒土であり、切り合い関係から見てもこの一帯で確認した溝野中では一番古いものと判断できるが、時期の特定にはいたらなかった。さらに性格についても不明である。　（吉川）

◇溝7（挿図40）

試掘の時、グリッドで調査した北側の幅杭186付近がロームまでの深さが約2mとかなり深く、遺構の存在を示していた。表土剥ぎを押しブルで行なったため、他の遺構の検出面よりかなり低くなったが用地外に延びるかなり大きな溝状の遺構を確認し掘り下げた。この部分では長さ12m幅8mの溝で深さは最深部で114cmある。底部には細かい凸凹があり、壁は垂直に掘り込んである。

さらに、この溝の東側に弧を描くように溝が検出された。方向だけの判断であるが、前述の溝状の落ち込みと同一の遺構と判断した。比較した場合幅は5mと狭く、深さも最深部で70cmとやや浅い。底部もほぼ平坦であり、壁は一部3段になるところがある以外は比較的急角度である。

この溝はさらに延びるものと見られるが、攪乱と見られる落ち込みへ続くため、どこまで延びるかは確認できなかった。攪乱部分にこの溝が含まれていたとすれば、外周はおおむね直径58mの円形となる。しかし、調査できた部分は全体の約1/5全長40m程度である。

覆土も西側が漆黒土であるのに対して、東側は暗褐色土であった。遺物としては、土師器の小片が出土している。また、混入品と見られる石鏃も溝の中から出土している。

時期的には覆土の状態および出土土師器から古墳時代とみられるが、断定できない。もし、推測通りにこの溝が円形を呈しているとすればこの規模から考えられるものとしては、古墳の周溝がある。しかし、この溝に囲まれた部分の平坦面を精査したが、攪乱と時期不明の柱穴が存在しただけでその他の遺構は確認できなかった。もし、古墳であるとすれば、畑の造成や耕作により盛土が削平されてしまったことも考えられるが、それを積極的に是とする材料はなく意味不明の遺構と判断せざるを得ない。　（吉川）

◇溝8（挿図39）

溝2を掘り下げている途中で溝2と溝5をつなぐ格好に短い溝が確認できた。溝というよりは穴が連続して切り合っているといったほうが良いかもしれないが溝址とした。全長は6.2m幅1.4mである。溝自体の深さは約50mであるが、底部を4つの穴が切っている。

壁はどの部分をとってもほぼ垂直である。

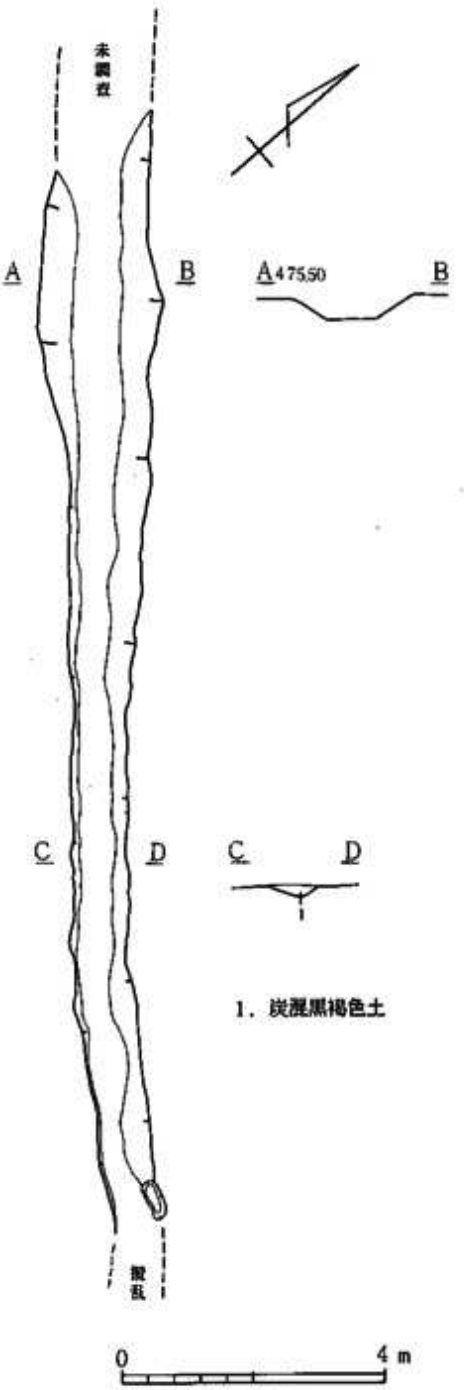
遺物の出土はなく時代は不明である。覆土の状態や底部の状態から見て自然水流による溝とは考えにくく、性格は不明である。　（吉川）

◇溝10（挿図41）

溝７の西側から東側に向かって一直線に延びる。この溝の西は溝７の検出のため深く剥いでしまったため、なくなってしまった。また、東は攪乱により切られている。そのため、調査できた部分は全長18ｍである。幅は２～0.8ｍ、深さ30～20㎝であるが、南側の壁は北側に比べるとあまり残りが良くない。底部は比較的平坦である。水流による溝とは考えにくい。

覆土からは器形は分からないが、土師器片と近代陶器片が出土している。しかし、時期決定はできなかった。また、性格も不明である。

（吉川）



挿図41　溝10

4）溝　状　址

形態は溝址であるが、長さが短いものを　溝状址とした。

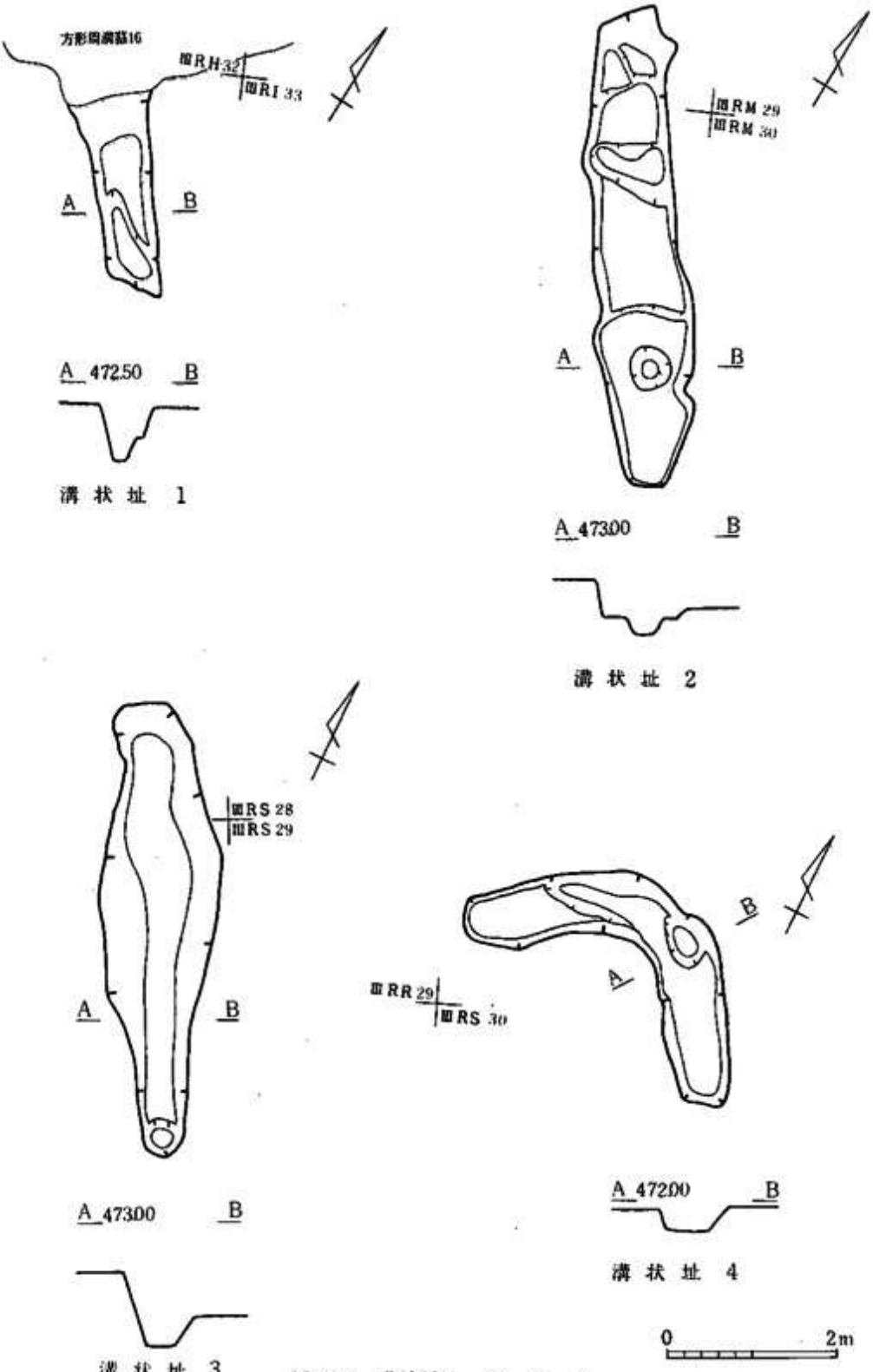
◇溝状址１（挿図42）

方形周溝墓16の南角で東側の周溝を切って検出した。東側の斜面に延びる長さ2.5ｍの物である。幅は0.7ｍと一定であり、壁は急角度に掘り込まれている。底部は東西に２段になっていて、検出面からの深さは東側で42㎝、西側では32㎝であるが、検出面が傾斜しているため、標高にすれば西側のほうが低くなる。

覆土からの遺物の出土はない。時期は古墳時代より新しいと見られるがそれ以上は特定できない。また、性格も不明である。　（馬場）

◇溝状址２（挿図42）

方形周溝墓15の盛土部分に主体部確認のためのトレンチを開けたときにその所在が明らかになった。位置は方形周溝墓15の中央部分で東西に延びる、全長5.5ｍ幅１ｍのもので



挿図42　溝状址1、2、3、4

ある。底部にはいくつかの穴があり、平坦ではない。検出面の標高差は１ｍあるのに対し、底部の差は42㎝しかない。元の地形の傾斜は緩やかだったと思われる。

覆土からの遺物の出土はない。時期は盛土の下から検出できたことからして、方形周溝墓の時期より古いとみられるが、それ以上は特定できない。また、性格も不明である。

（馬場）

◇溝状址３（挿図42）

方形周溝墓７の東側の斜面で検出した２本のうちの南側に位置し、東西方向に延びている長さ5.5ｍのものである。幅は中央部が1.5ｍともっとも広いが、東端では0.6ｍと狭くなる。底部は平坦で、東端の直径0.4ｍの穴に向かって傾斜している。壁は中央部がやや緩やかに立ち上がるのを除けば、ほぼ垂直である。

覆土からの遺物の出土はないため、時期・性格ともに不明である。　（馬場）

◇溝状址４（挿図42）

溝状址３の北隣で検出した長さ５㎝のものである。中央部で鍵の手に曲がるものの、幅は一定で0.8ｍである。底部は２段になっているが、おおむね平坦で東に向かって傾斜している。これは元の地形によるものである。

覆土からの遺物の出土はないため、時期・性格ともに不明である。　（馬場）

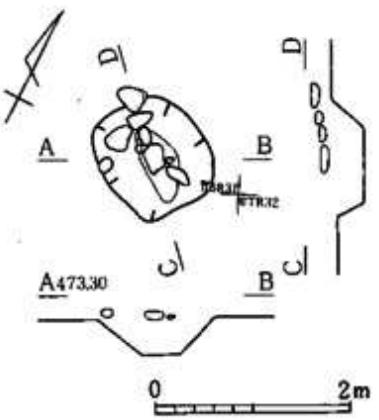
5）集　　石

時代は不明であるが、なんらかの目的で人為的に石が集められたものと判断できる遺構を集石とした。

◇集石１（挿図43）

方形周溝墓18の中央で、40㎝前後の大きさの石を数個確認した。この集石は1.2×１ｍ、深さ33㎝の不整楕円形の落ち込みの上部に位置していた。しかし、この落ち込みの覆土には石は入っていなかった。

遺物の出土はなく、時代は不明である。位置的には周溝墓の主体部があったとしても良い位置であるが、盛土の上に主体部があるとは考えにくく、方形周溝墓に関係する遺構ではないと判断した。したがって、性格は不明である。　（馬場）



挿図43　集石１

6) そ の 他

(1) 柱穴群（挿図44～54図）

調査範囲内では、数多くの穴が検出され、それらも調査した。それらの中で時代・性格が不明であるものを、柱穴とし部分的に分けながら記述する。

◇Ⅰ区柱穴群

調査範囲のうち一番西よりの50mをⅠ区とした。

この部分では表土剥ぎが浅かったため、トレンチ状に掘り下げ遺構の検出を行なった。その結果として、いくつかの穴が確認できた。覆土の色・規模・形態等に統一性もなく性格を特定できるものはなかった。

◇Ⅱ区柱穴群

Ⅰ区の東隣の50mの間をⅡ区とした。

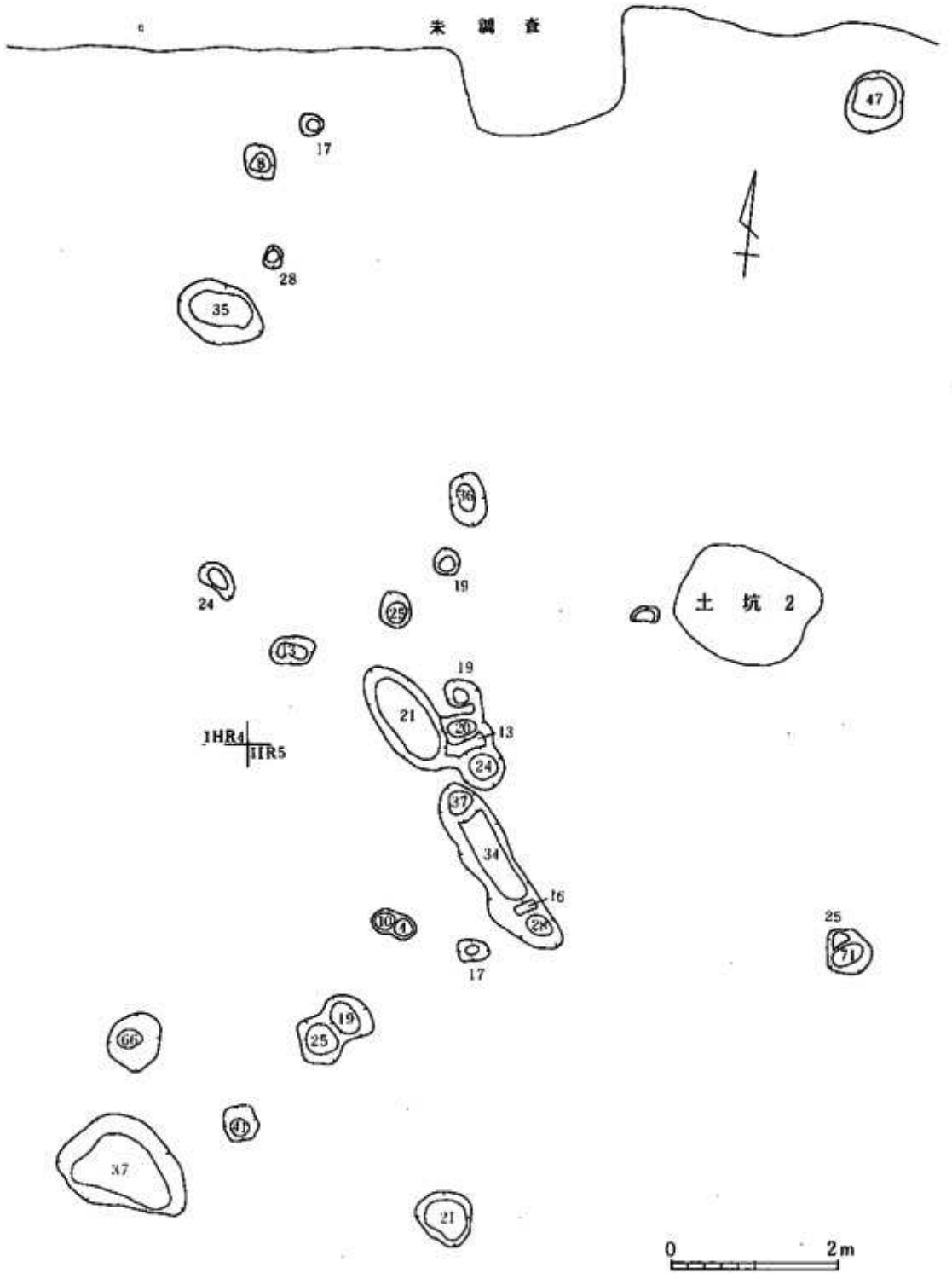
この部分では、センター付近で比較的大きなものが集中して検出できた。形は不整を含む円形がほとんどである。大きさは2～0.4mで深さはおおむね40～15cmとまちまちである。

遺物の出土はなく時期は不明であるとともに、性格も特定できなかった。

◇Ⅲ区柱穴群

Ⅱ区からバイパスは北へ向きを変えている。したがって、Ⅲ区はⅡ区の北隣に位置する事になる。

挿図44　土坑1付近柱穴群



挿図45　土坑 2 付近柱穴群

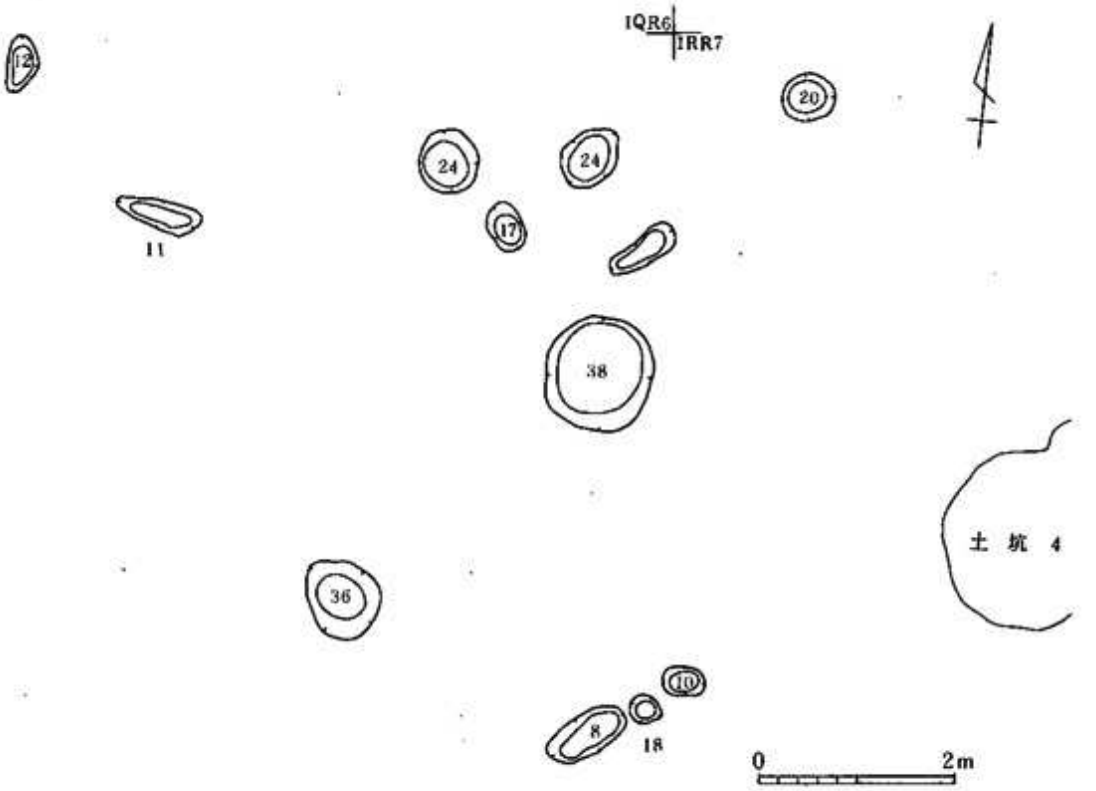
幅はやはり50mである。

この範囲内では方形周溝墓群の北側の林であった部分に集中していた。この部分では、周溝墓を確認するために入れた何本かのとレンチにかかったものもある。この場所で確認した数は比較的少ない。木の根による攪乱に切られているものもあるが、規模・形状・深さには規格性もないため、性格は不明である。時期も特定できる出土品がなかった。

◇Ⅳ区柱穴群

Ⅲ区の北側の50mの部分である。調査範囲の北端にあたる。

この部分で柱穴が集中してきたのは、溝10の両側付近である。しかし、この部分には攪乱があり、その周辺が多かった。それらの柱穴には、なんら規格制がなく、時期も性格も不明であった。　　（以上 吉川）



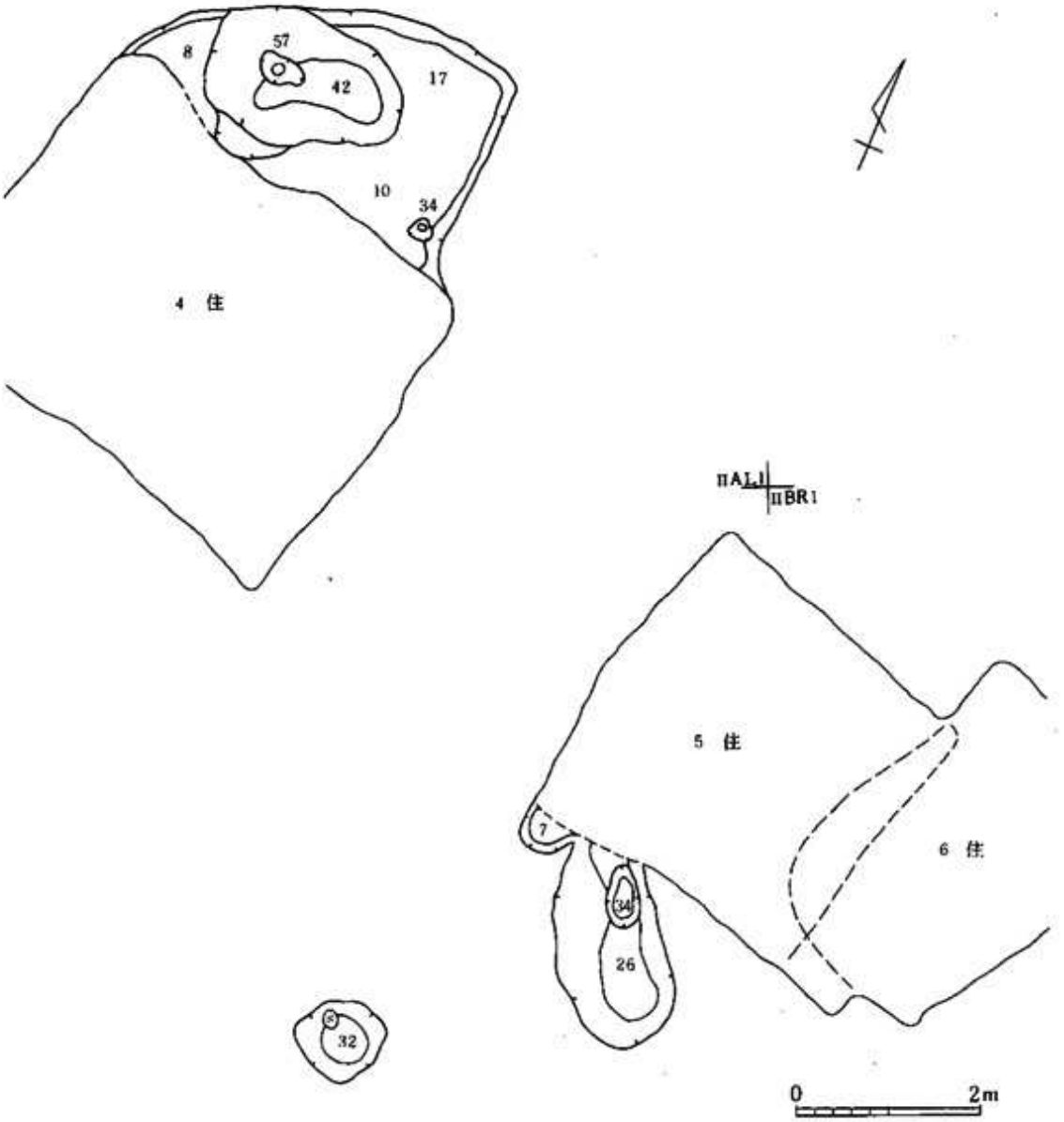
挿図46　土坑４付近柱穴群

(2) 攪　乱

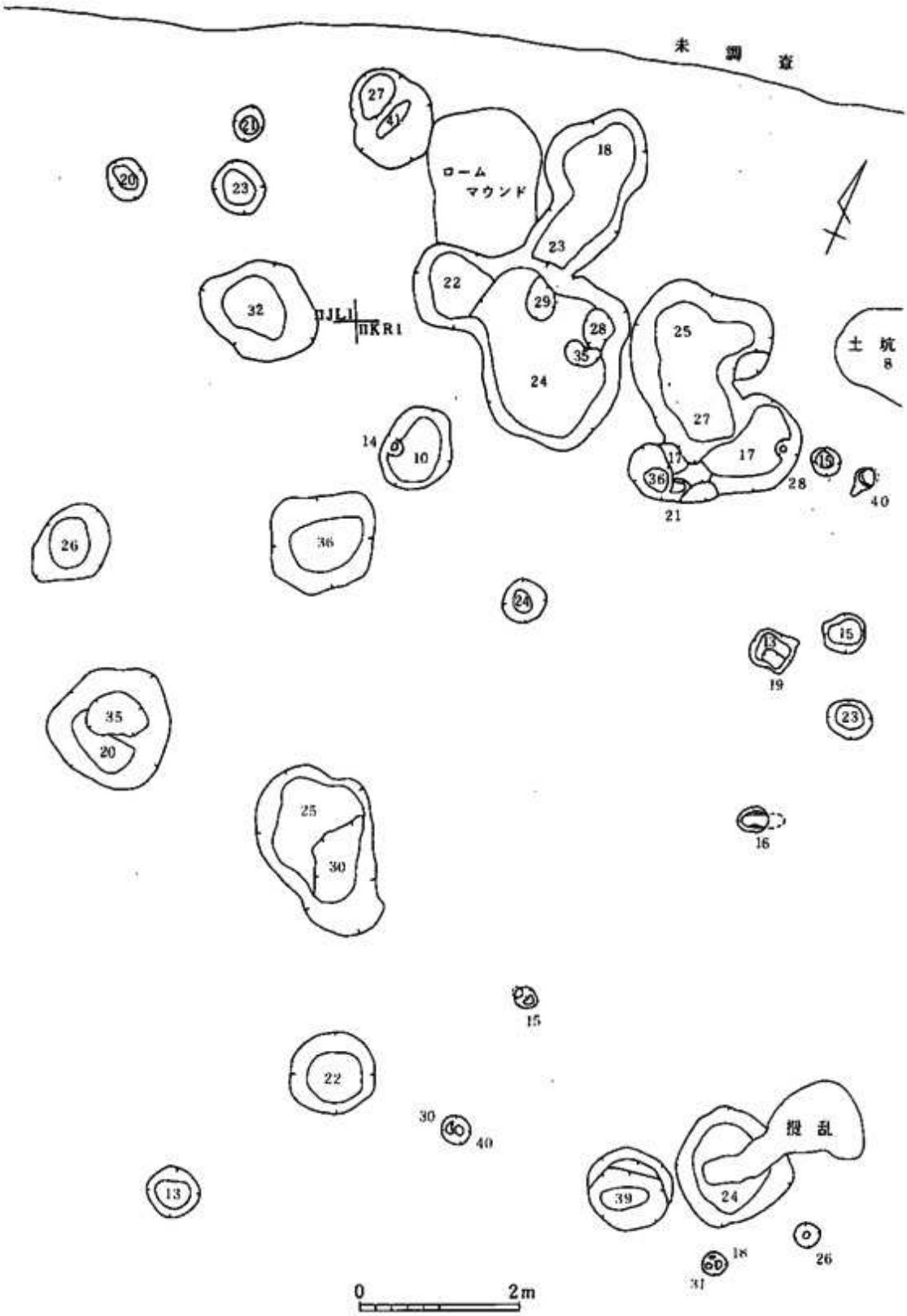
調査範囲内に大規模な落ち込みがあった。それらは諸事情により調査できなかった部分もあるが、攪乱として記述する。

溝1の北側に広がるものでかなり広い。礫が混じる深さまでロームを掘り下げてある。このまわりには同種の落ち込みがいくつかある。土坑6の東隣にも大きな落ち込みがある。この落ち込みはかなり深く、溝4程度の深さはある。

方形周溝墓9および10の西側は一段低くなっていた。その一段低いところは大きな落ち



挿図47　4、5、6住居址付近柱穴群

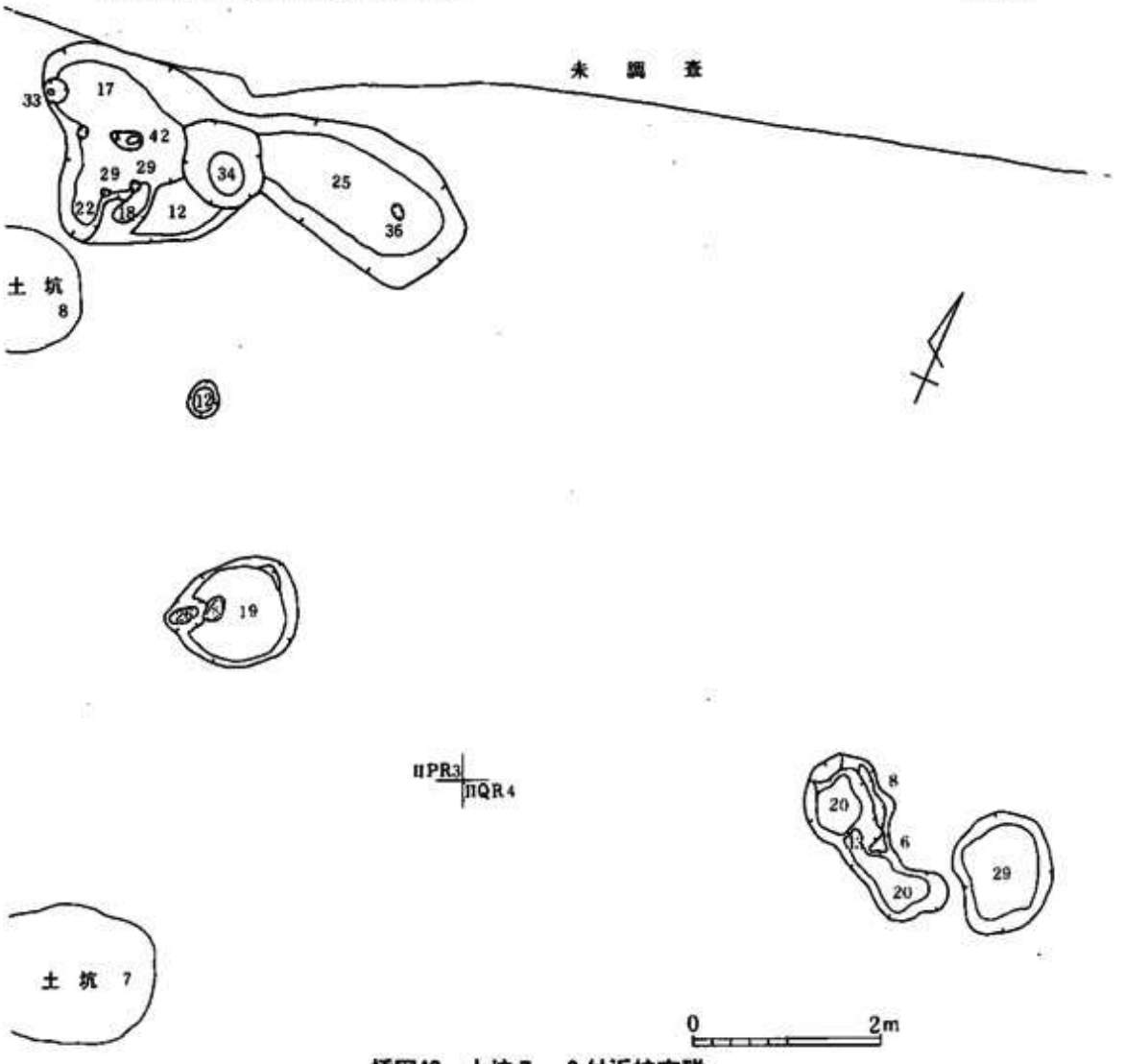


挿図48　土坑8付近柱穴群

込みとなっている。この部分は溝3・4および7を切っているものと見られる。この落ち込みの北は地形が掘割状になっていて、その箇所を下の段丘へ続く道が通っていた。これらの掘り込みは、いずれも不定形であり、その位置は下段に中近世に栄えた八幡町並から段丘崖を登り切った段丘端部に集中し、その状況から粘質の強いローム層で、地元では通称「赤土」と呼ばれ、壁土に利用した土を採取した痕跡と推測される。諸般の事情により詳細な調査実施が困難であったが、ある意味では中近世に関わる生産遺構といえるものである。

さらには、畑の造成とみられる攪乱がこの落ち込みの北側にあった。

これらの攪乱の中には、総量はあまり多くはないが、各時代にわたる多種の遺物が出土した。時代の特定はできなかった。（吉川）

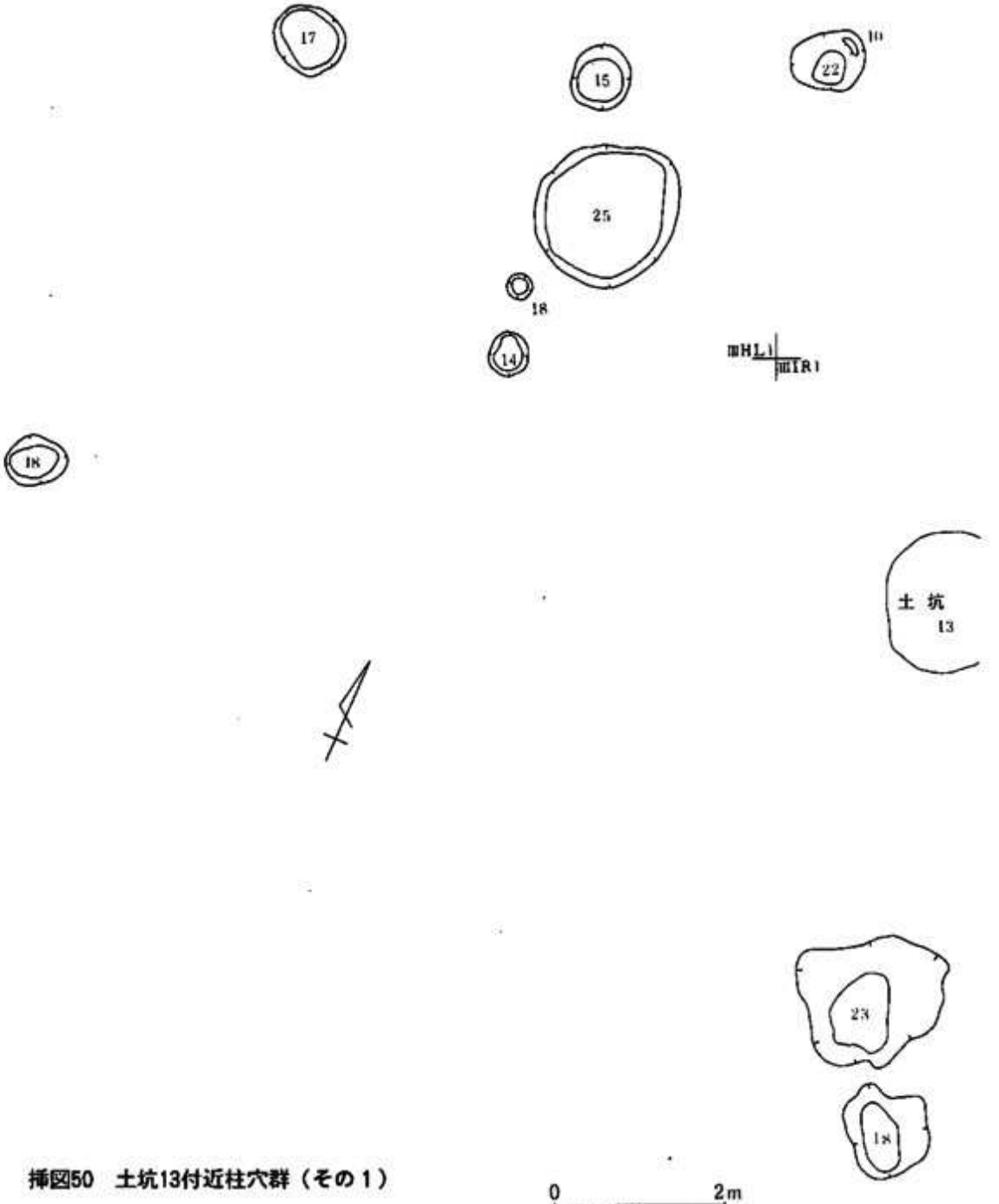


挿図49　土坑7、8付近柱穴群

(3) 遺構外出土遺物（第16・17・18・19図）

発掘調査区域内において、遺構に伴わない遺物の出土があった。それらは試掘・表土剥ぎ・検出時等において出土した遺物である。時代的には旧石器時代から縄文、古墳、中世および近世にいたるまでの石器および土器・陶磁器の破片が中心である。

時代順に記述してみる。



挿図50　土坑13付近柱穴群（その１）

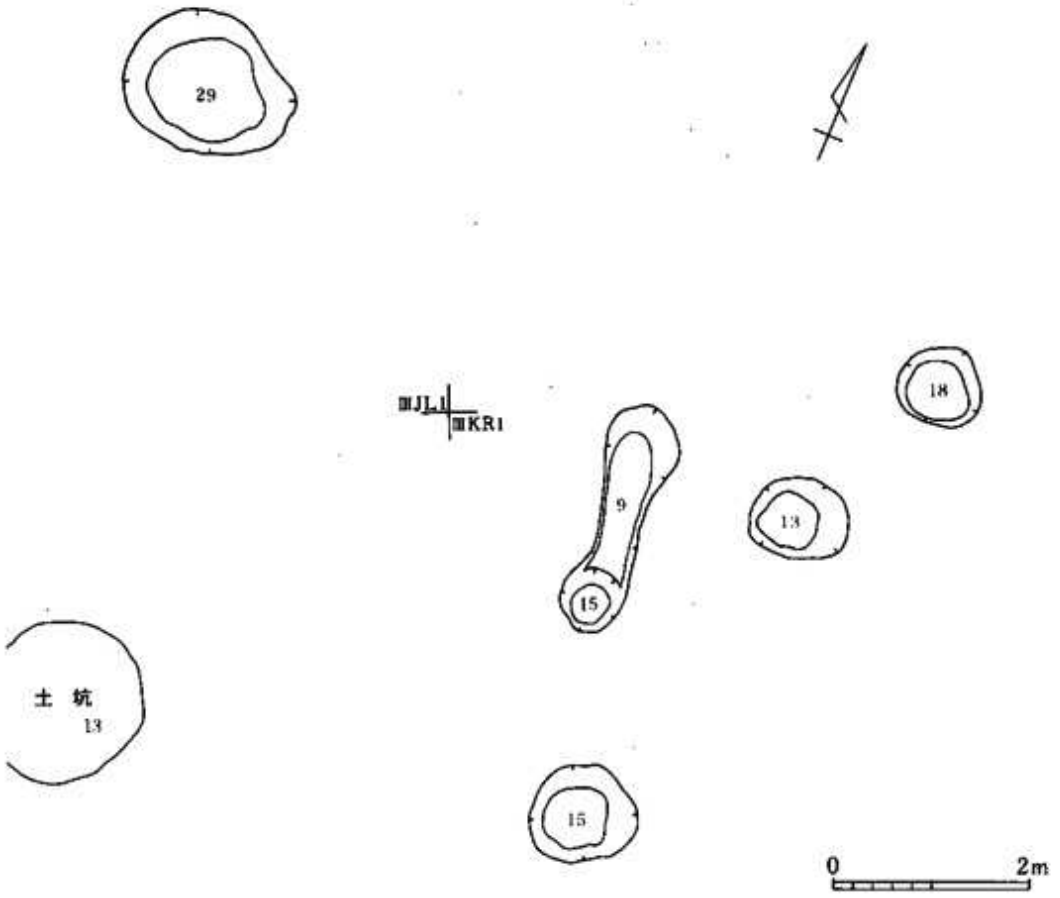
① 旧石器時代（第17図）

この時代と判断されるものは1点のみである。溝10付近で検出中に出土した尖頭器（彫器）がそれである。石材は玻璃質安山岩と見られ、一部破損していた。

② 縄文時代（第16・17・18・19図）

・石器

詳細時期は特定できないが、黒耀石のチップは各所から出土しているが製品である石鏃や石錐は少ない。硬砂岩製の横刃形石器や打製石斧は数が多い。1点のみであるが、同石製の石錘もある。さらには、緑色岩製の打製石斧や乳棒状石斧が出土している。



挿図51　土坑13付近柱穴群（その2）

・土器

土器としては、縄文時代前期が中心であり、それ以外にはほとんど見当たらない。

前期の土器としては、細線文を施した破片が所々で出土しており、それらは住居址や土坑と同時期のものであろう。

③ 弥生時代

この時代と判断できる遺物は、遺構外からは出土していない。

④ 古墳時代～平安時代（第18・19図）

遺構外から出土した須恵器・土師器のうちで確実にこの時代と判断できるものとしては、坏の破片やカキメのある長胴甕の破片のほか、須恵器の蓋がある。平安時代の遺物が中心である。

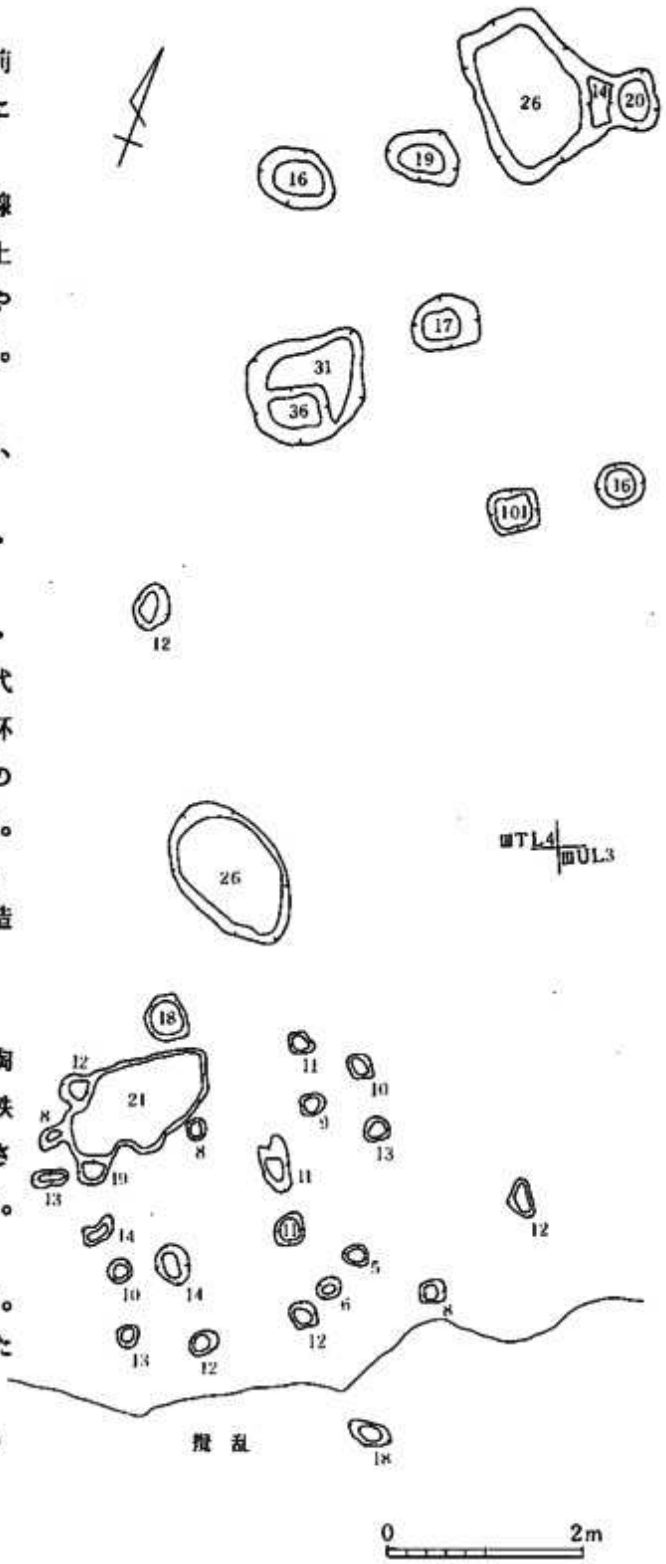
また、勾玉を模した石製模造品が出土している。

⑤ 中世以降（第17・18図）

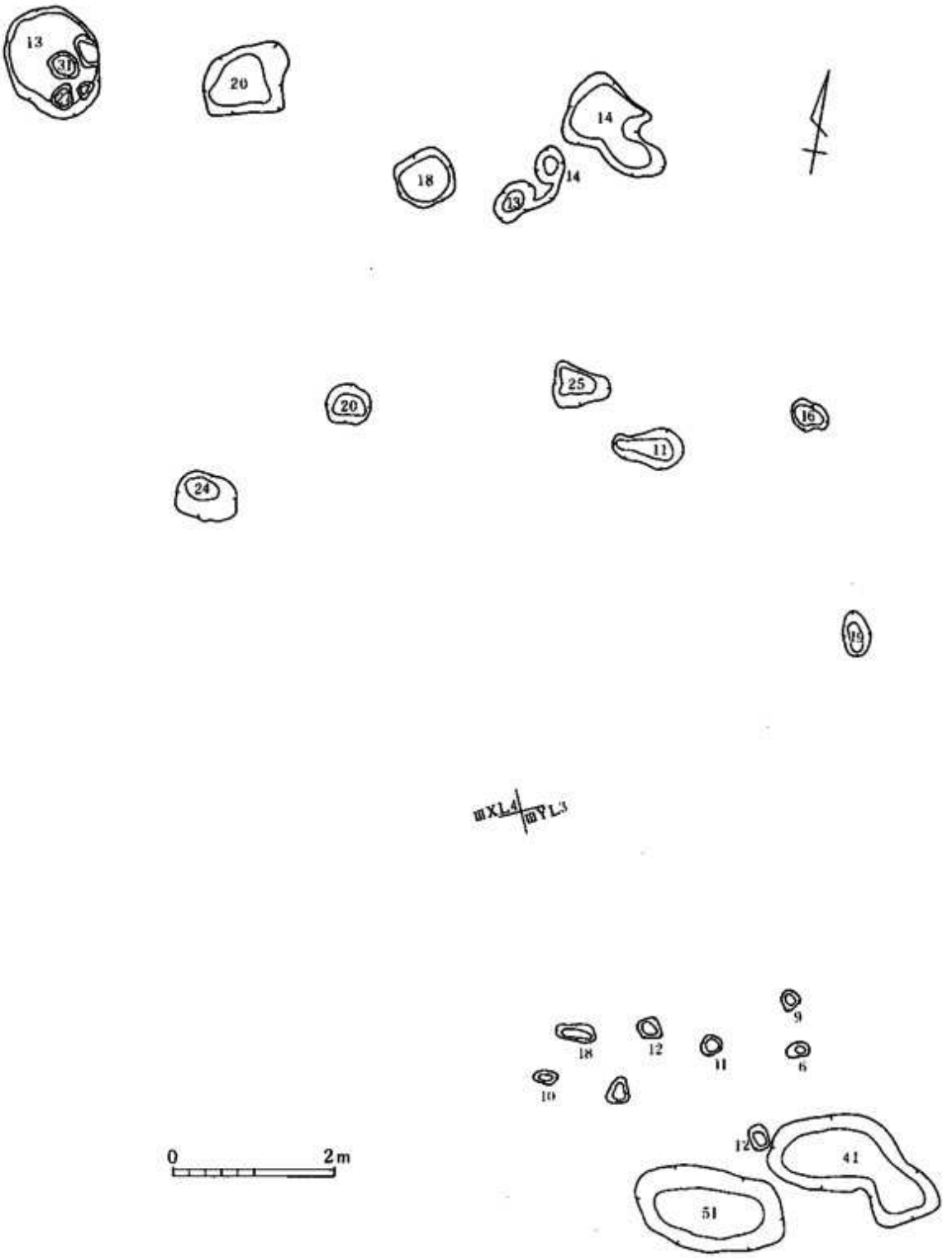
出土場所は攪乱に集中し、陶磁器片が中心である。摺鉢は鉄釉のものであり、目は荒い。さらには、天目茶碗の破片もある。楽焼系の茶碗も見られる。

石製品としては、砥石がある。この砥石はかなり、使用されたものと見られる。

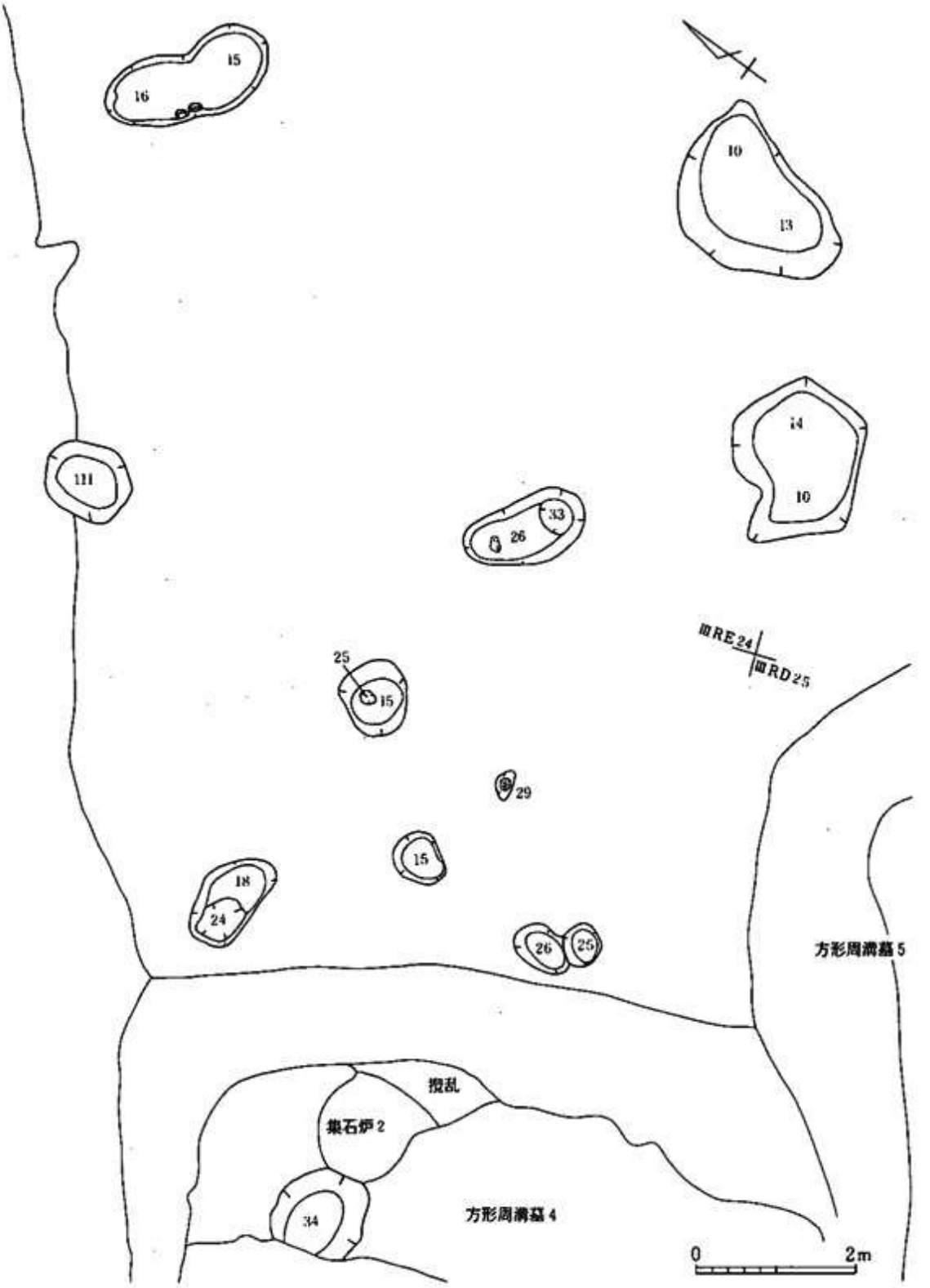
（吉川）



挿図52　ⅢＴＬ４付近柱穴群



挿図53　ⅢＸＬ４付近柱穴群



挿図54　方形周溝墓4付近柱穴群

Ⅳ　ま　と　め

今回の調査により縄文時代前期・弥生時代後期・古墳時代・平安時代・近世の遺構が発見され、遺跡の持つ具体的な正確が捉えられたといえる。

本文中にも記したとおり、本遺跡は、中規模な段丘面上にあり、過去2回にわたって実施された発掘調査と併せれば、その段丘面上のすべての調査が行なわれたといえる。

その結果は、西端部にあたる現矢高霊園所在地では、縄文時代の石器および中世の断片的な資料が得られたのみである。また、段丘面上の大半を占める飯田市立病院敷地内においては、その広大な範囲の大半において遺構の存在を認めることがなく、縄文時代の石器がわずかに採集された程度である。唯一注目されるのは、その用地内の北端の段丘崖頭に割竹形木棺を内部主体とする物見塚古墳とそれに先行する方形周溝墓1基の存在が確認されたことである。

一方、今回の調査地点は段丘の東端部分にあたるわけであるが、市立病院敷地内でみられた、遺構分布の希薄な状況とは異なり、かなり濃密に遺構が分布することが把握された。

その主体をなすものは、段丘端部に連続して検出された方形周溝墓群であることはいうまでもない。今回の調査とほぼ併行して段丘東端部において、民間の宅地造成に先立ち実施した調査の結果も合わせると、1基の古墳と24基の方形周溝墓および土壙基2基が連続して分布する状況が把握された。

今回の調査結果により得られた個々の墳墓については、本文中に記したとおりであり、本遺跡の墳墓群は、その全体でこそ大きな意味を持つといえ、個々の墳墓について若干の考察を加えた上で、全体について整理としてまとめに変える。

貼石を持つ低墳丘墓

調査時および整理作業を通じて方形周溝墓7としたもので、方形周溝墓群のほぼ中央に位置し、その構造から一目でその中心的な存在であると判断されるものである。周溝内部、つまり墳丘部にあたる四方に石を貼ったもので、一般的な方形周溝墓とは区別して捉えることができ、また、そうすべきものといえる。

当地方における類例としては確実なものとしてこれ以外に2例がある。1つは竜丘蒜田で発見されたもので、弥生時代後期に属する。もう1つは平成3年に発掘調査された松尾田圃遺跡から発見されたもので、古墳時代前期に属する。

これらは、周溝の内側法面、古墳であれば墳丘の下端部分にあたる部分に、石積みもしくは、貼石を行なったもので、周溝内及びその周辺部における礫の検出量から若干の盛り土がなされ、その部分まで貼石がなされたものと判断される。

当地方において、一般の方形周溝墓との区別を意図して、方形台状墓と呼称されてきたが、む

しろ石を貼る（積む）ことによりその特徴があるといえ、また、時代的にもいわゆる古墳の築造される時代と重なる部分もあり、「貼石を持つ方形低墳丘墓」のような呼称に妥当性を感じる。

方形周溝墓群中にこのような墳墓を造ったことの意味は即座に解明困難であるが、いずれにしても、本墳墓中においては中心的な位置付けのなされるものといえる。

方形周溝墓11

本墳墓は民間の宅地造成による部分との境界部に検出されるものであるが、本周溝墓群中で内部主体が確認されたわずか2例のうちの一つである。

本墳墓も段丘崖頭の傾斜地に構築されたもので、西側周溝にくらべ東側の周溝はかなり斜面の下方に位置する。

周溝検出時に直刀が出土し、内部主体の存在が確認されたものである。内部主体の残存状態はきわめて不良であり、検出面から棺底部まで10数cmとその底部のわずかを残すのみであった。また、盛土との土層変化も微妙であり、一部把握できない部分もあったが、割竹形木棺を埋葬したものと判断した。

また、出土遺物には、直刀のほかに刀子1点と竪櫛破片が3点がある。段丘斜面の盛土上部に棺底の検出された本墳墓の状況から周溝の掘削がなされ、墳丘の全体形を整えた後にその頂部より棺を埋葬したものと推測される。

このことにより本墳墓は、最低でも棺を被う高さの盛り土が必要といえ今回の調査で溝を確認した西側周溝部分において、少なくとも50cmの盛り土があったと判断され、段丘斜面にあたる東周溝部分では、2mを越す盛り土が成されていたといえる。

今回の調査では、本例以外に内部主体の確認されたものはないが同様の立地に造られた墳墓群の盛り土と主体部の状況が本墳墓の様相と共通することはある程度の予測可能といえる。

土　壙　墓

周溝墓群の西側、完全に段丘平坦部となる位置より検出された2基の土壙墓は周溝墓から主体部が検出されず出土遺物もわずかしか認められないのと好対称を成している。

2基の土壙墓はその方向は異なるが、近接した位置にあり出土遺物の内容からもあまり隔たりのない時期と考えられる。

その位置から見ると方形周溝墓7との強い関連性をうかがわせる。副葬品の内容は共通するものもあるが、異なるものもあり、それぞれの被葬者が生前に果たした役割の差をも推測可能といえる。また、区画を有しない単なる土壙墓の出土品がこのように多様であることは、方形周溝墓被葬者への副葬品は本土壙墓のそれよりは勝っていた可能性が強く、いずれの方形周溝墓も一定量の副葬品を持ち得た人の墓とすれば、これらの墳墓を築造した人々の生活の基盤はかなり安定したものであったといえる。いずれにしても、本土壙墓も一連の方形周溝墓群と一体となった墓

域の一要素であることはいうまでもない。

墳墓群の構築時期

それぞれの周溝墓についての構築時期は、出土遺物が少なく、すべてを明確に示すことはできない。方形周溝墓4は他の遺構との切り合い等により全体形が不明であるが、北側の周溝内より甕形土器が2個体分の出土がある。土器は当地方弥生時代後期中島式土器の最終段階に位置づけられるもので、その時代は4世紀の後半といえる。今回の調査により確認された墳墓のうちでは最も古い段階にあたる。

続く時期の遺構としては、方形周溝墓3が考えられる。方形周溝墓2と周溝を共用する部分より小型の甕・壺が出土しており、供献用に作られた土器と見られるが、その製作技法は前述の方形周溝墓4の出土土器との共通点も認められ、時代的にはほぼ近接した4世紀終末に位置付けられ、4世紀代の中で複数の方形周溝墓が構築されたといえる。

5世紀代に入るものとしては、土師器を出土した方形周溝墓7・9・11・12・15がある。遺物の出土しなかったものの多くもこの時期に該当すると判断される。また、調査地全域において、須恵器の出土がなく、検出された方形周溝墓の築造時期は5世紀前半の当地方に須恵器が伝えられるより以前と考えられる。

八幡原遺跡の位置について

結局、今回調査地点において検出された墳墓の構築は、4世紀後半にはじまり、5世紀の半ばまでの約1世紀の間に連続して行なわれたものと考えられる。

次に遺跡の性格については、本調査結果そのものが具体的に示しているとおり、特定の集団に関連する墓域であることはいうまでもない。また、今回の調査地点の同一段丘面上に当該時期の人々が居住した痕跡は皆無であり、同時期の遺構として認められるのは西方約500m離れた位置に確認された物見塚古墳と方形周溝墓1基があるのみで段丘面上全体、特にその縁辺部が墓域として位置付けられる。

この段丘面を墓域とした人々の居住域をどこに求めるかは、その地形的な関係から捉えるより術がないが、今回の調査により検出された墳墓群は、東側段丘崖下に広がる下位段丘面上に求めるのが妥当といえる。しかし、下位段丘面上には居住域と生産域がそれぞれの条件下で複雑に構成されており、段丘崖直下に居住域を求めるのが妥当と考えられるが、具体的にはどの一帯に居住した人々の墓域として位置付けられるかの断定は困難といえる。そのことは下位段丘面上北端部には5世紀から6世紀の古墳群が構築され、下位段丘上に集落を展開した集団の主要勢力の墓域と考えられ、今回の調査により確認された墳墓群は二次的な精力もしくは、従的な階層の墓域として構成されたことも推測される。

当地方において、古墳時代の墳墓は古墳のみが論ぜられそれ以外の墳墓について具体的な墓制

を考究することがほとんどなされなかったわけであるが、今回の調査結果により新たな視点での検討が必要となったといえる。

また、当地方において既調査により確認された方形周溝墓がすべて弥生時代として扱われてきたが、そのうちいくつかについては所属時代を改めて検討する必要が生じたともいえる。

以上、今回の調査に関して若干の整理を行なったが具体的には今後さらに検討を要する点が多くその結論のすべてを本書の中で示し得ないが、当地方における古墳時代研究に多大な問題を投じたことは現時点の最大の結論といえる。

なお、今回の調査により古墳時代以外の遺構・遺物が検出され、それらについてもこの場所で発見された意義はそれぞれにあることはいうまでもないが、それらについても今後の研究課題として、本書では事実のみを記載することにとどめる。（小林）

V 引用参考文献

飯田市教育委員会　1973『妙見大塚（3号）古墳』

中央道遺跡調査会　1975『中央道調査報告－下伊那郡鼎町その2－』長野県教育委員会

鼎町教育委員会　1975『下伊那郡鼎町天伯A遺跡』

飯田市教育委員会　1980『猿小場遺跡』

鼎町教育委員会　1983『矢高原・八幡原遺跡』

鼎町教育委員会　1984『鼎町黒河内遺跡』

鼎町教育委員会　1984『鼎町一色・天伯B遺跡』

飯田市教育委員会　1985『日向田遺跡』

飯田市教育委員会　1988『田井座遺跡』

飯田市教育委員会　1990『日向田遺跡Ⅱ』

飯田市教育委員会　1989『六反畑遺跡』

飯田市教育委員会　1991『田井座・一色・名古熊下遺跡』

下伊那史編纂委員会　1991『下伊那史　第1巻』

下伊那史編纂委員会　1955『下伊那史　第2巻』

下伊那史編纂委員会　1955『下伊那史　第3巻』

下伊那史編纂委員会　1955『下伊那史　第4巻』

日本古代文化研究　1984『古墳時代の鉄刀について』臼井　勲

鼎町史編纂委員会　1986『鼎町史』

長野県教育委員会・更埴市教育委員会　1987『土口将軍塚』重要遺跡確認緊急調査

長野市教育委員会　1988『地附山古墳群』

飯田市教育委員会　1989『物見塚古墳現地見学会資料』

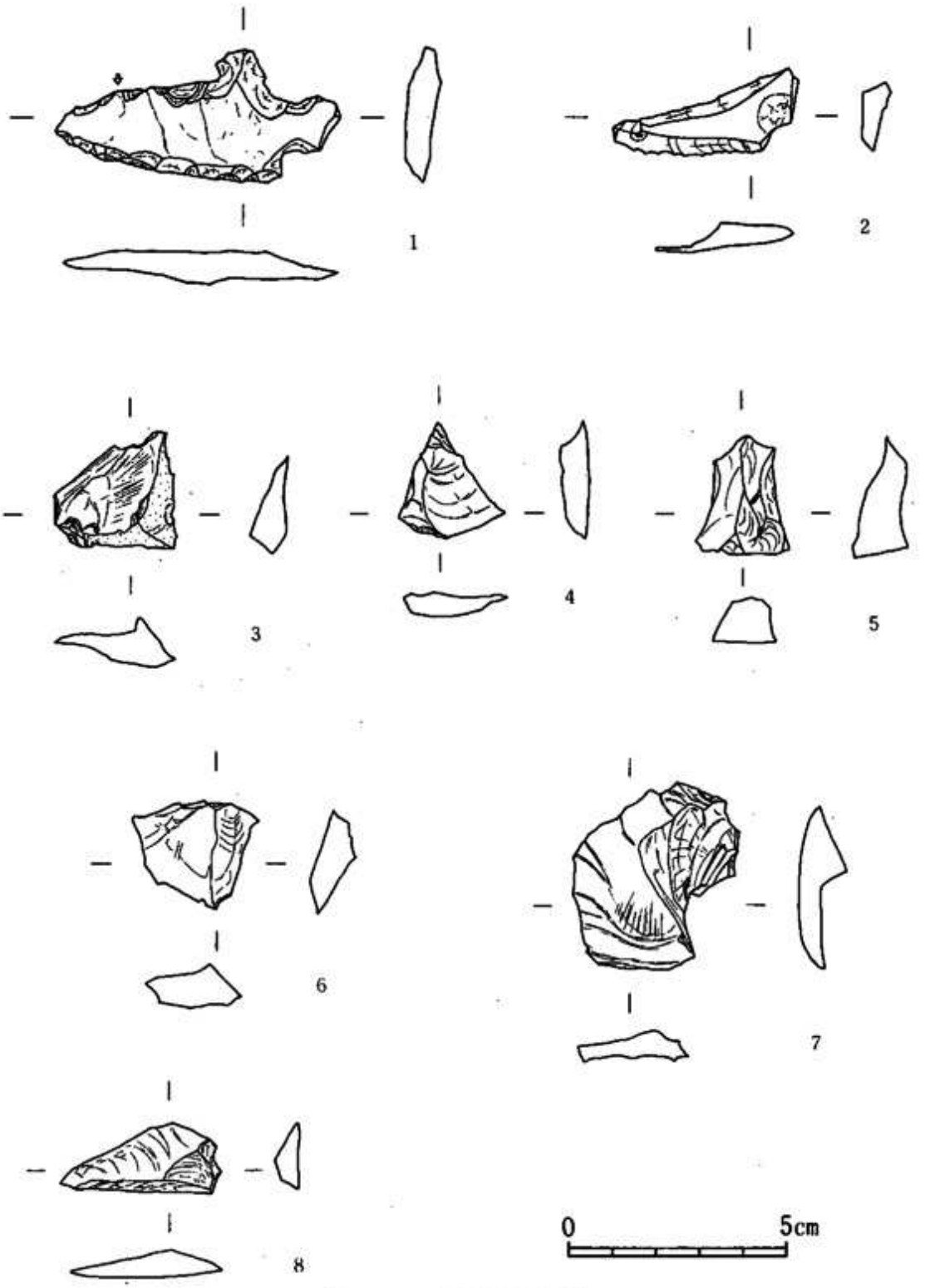
飯田市教育委員会　1991『柳添遺跡現地見学会資料』

飯田市教育委員会　1991『城遺跡』

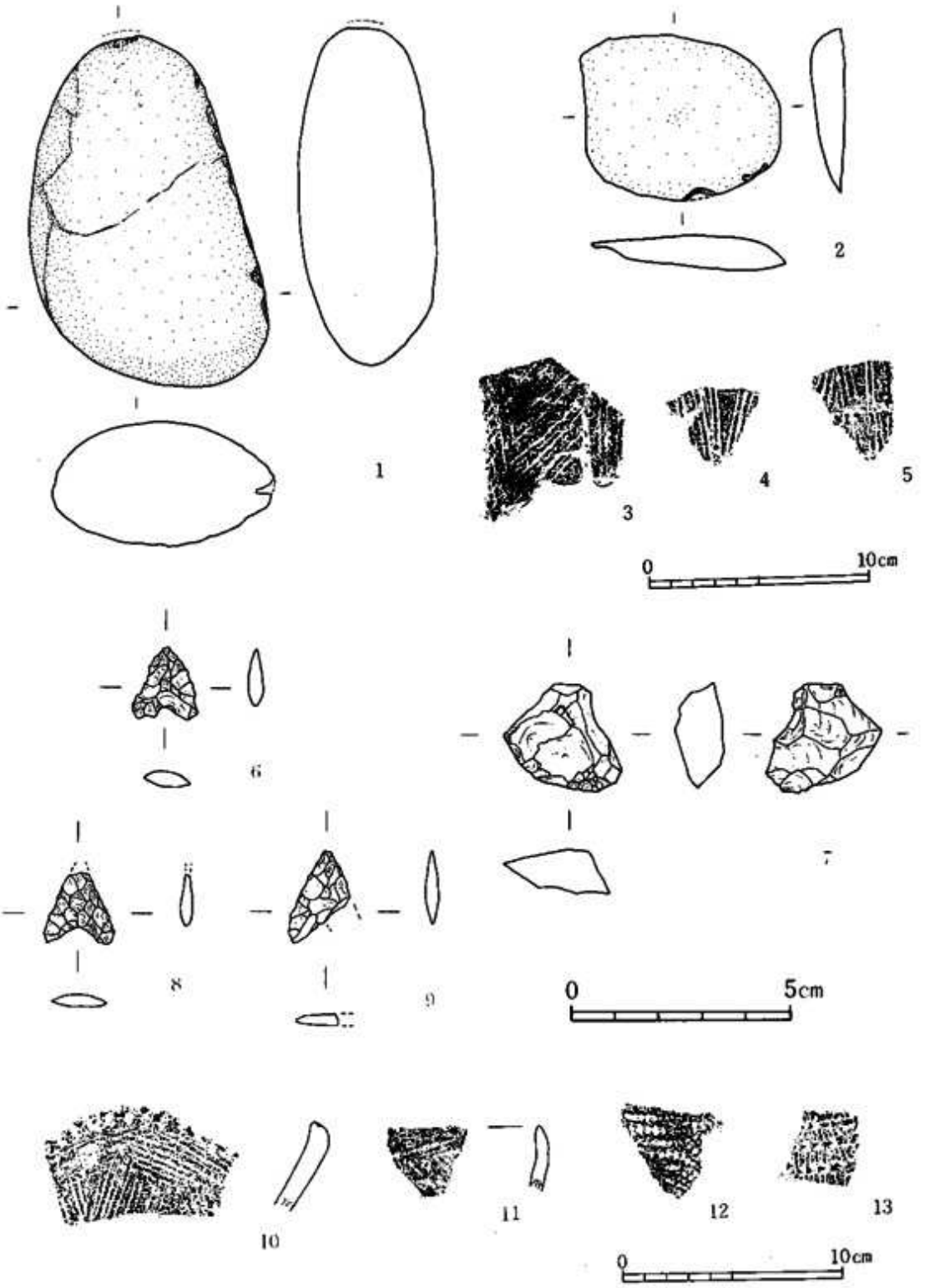
飯田市教育委員会　1991『清水遺跡』

宇治市教育委員会　1991『宇治二子山古墳』発掘調査報告

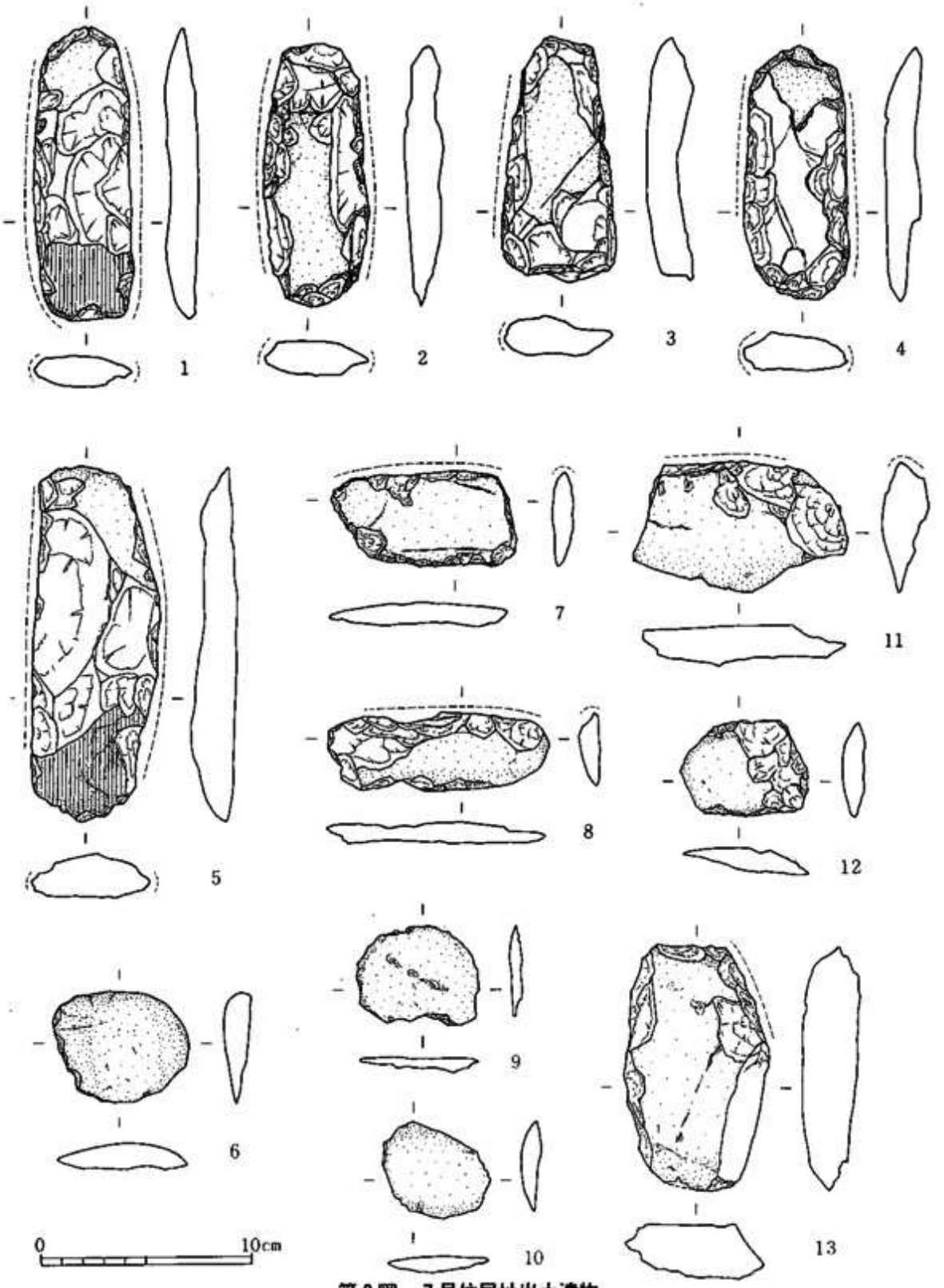
遺物図版



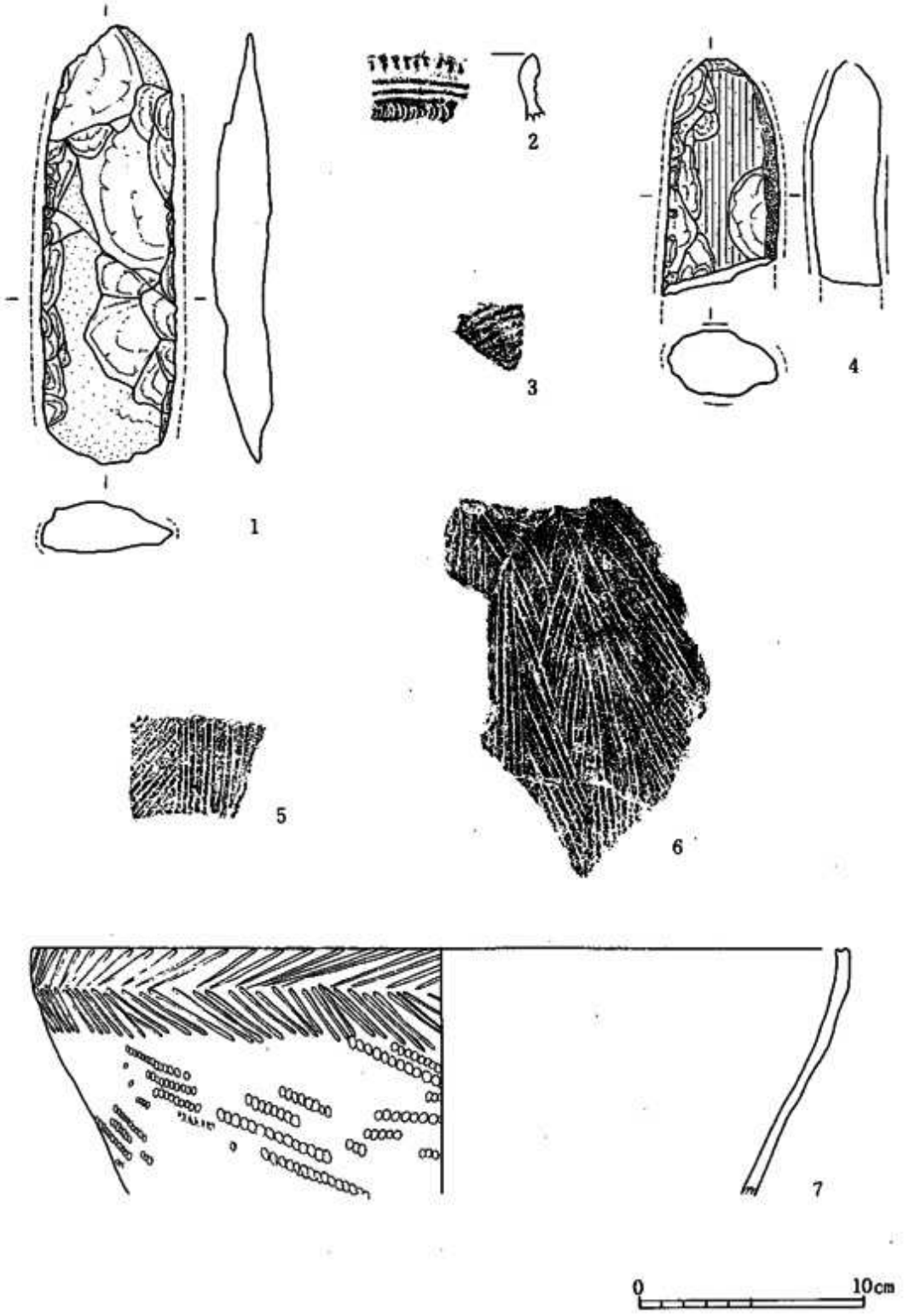
第1図　3号住居址出土遺物



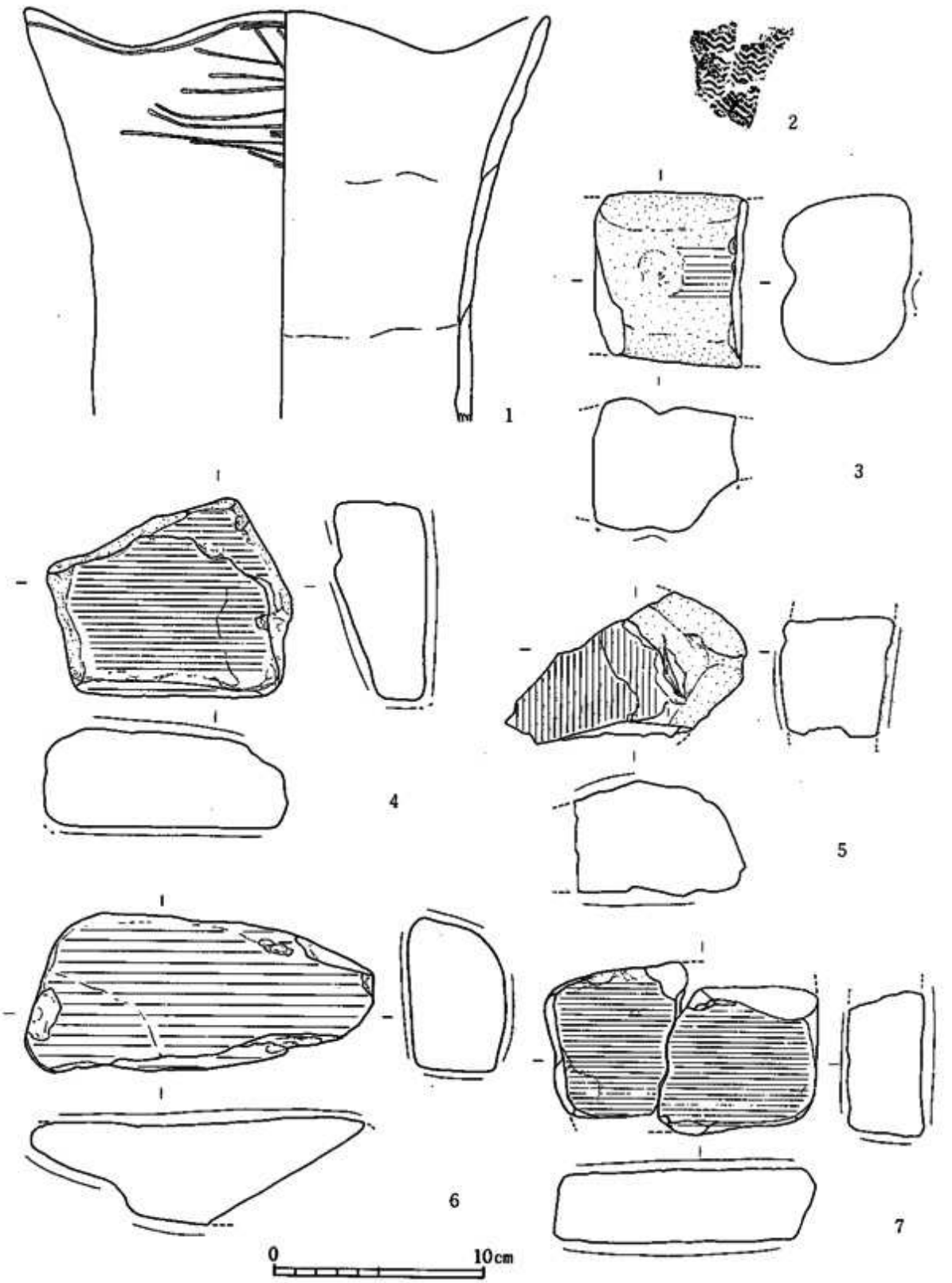
第2図　3号・7号住居址出土遺物



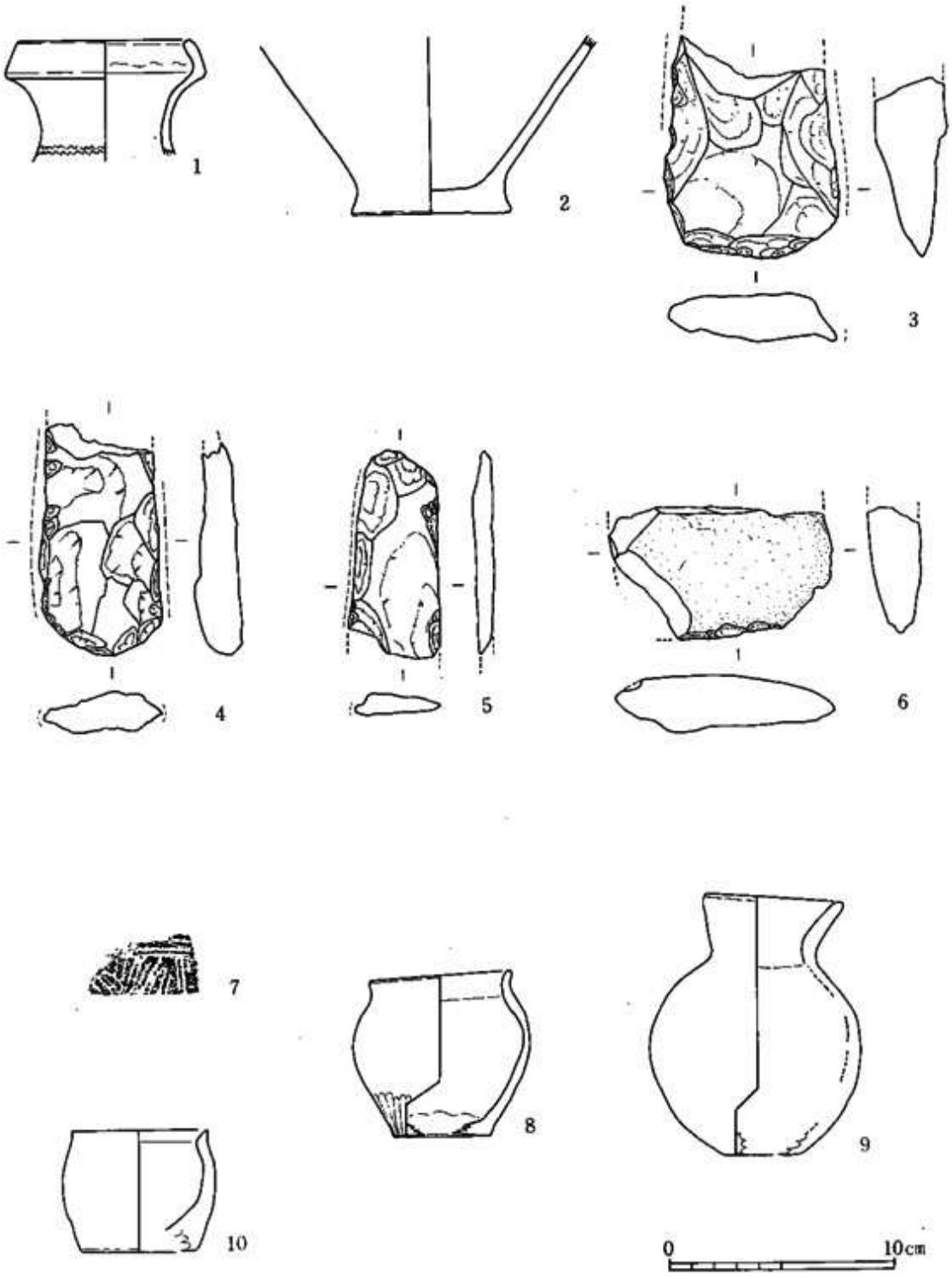
第3図　7号住居址出土遺物



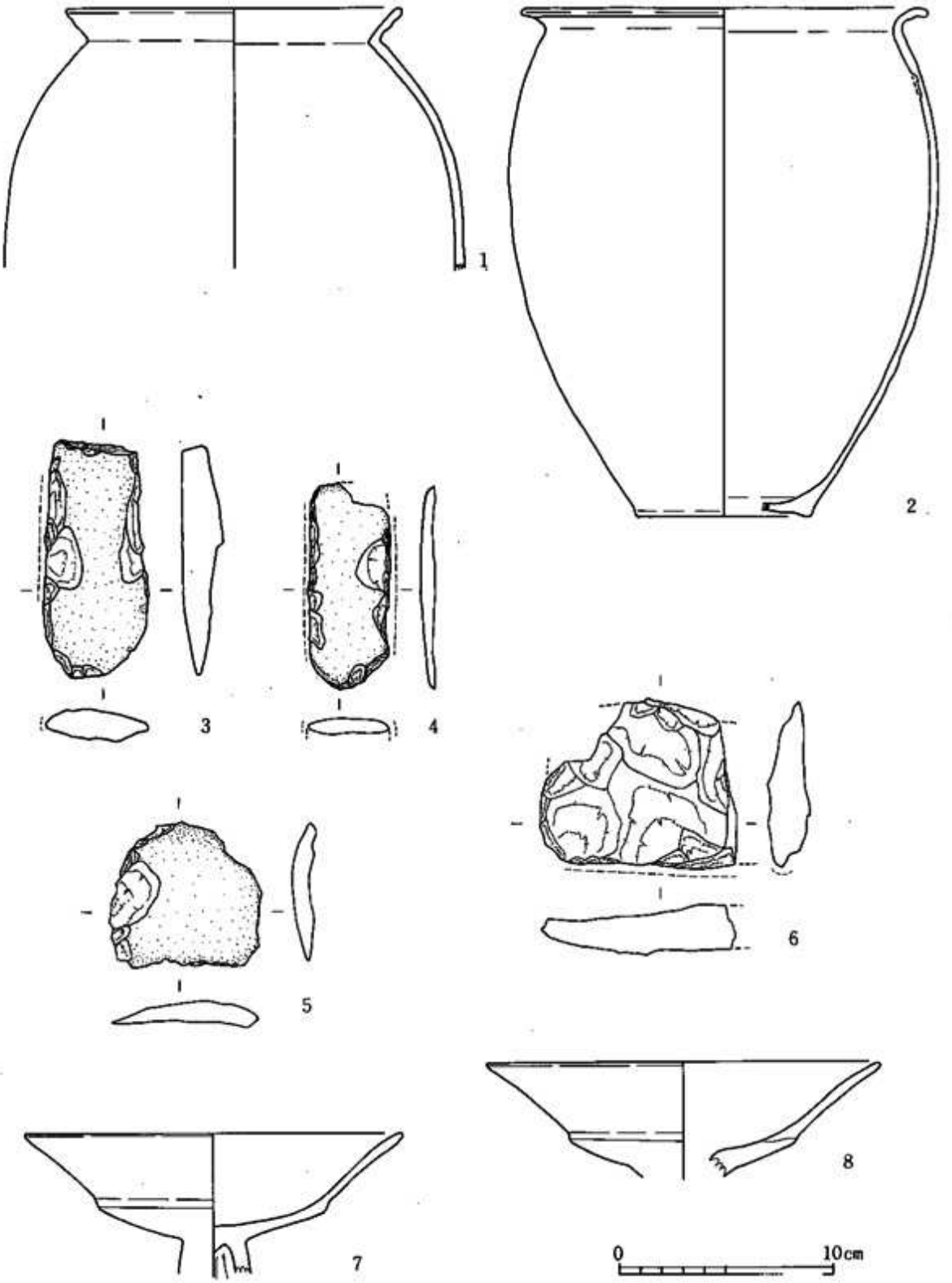
第4図　土坑1・2・5・12・13出土遺物



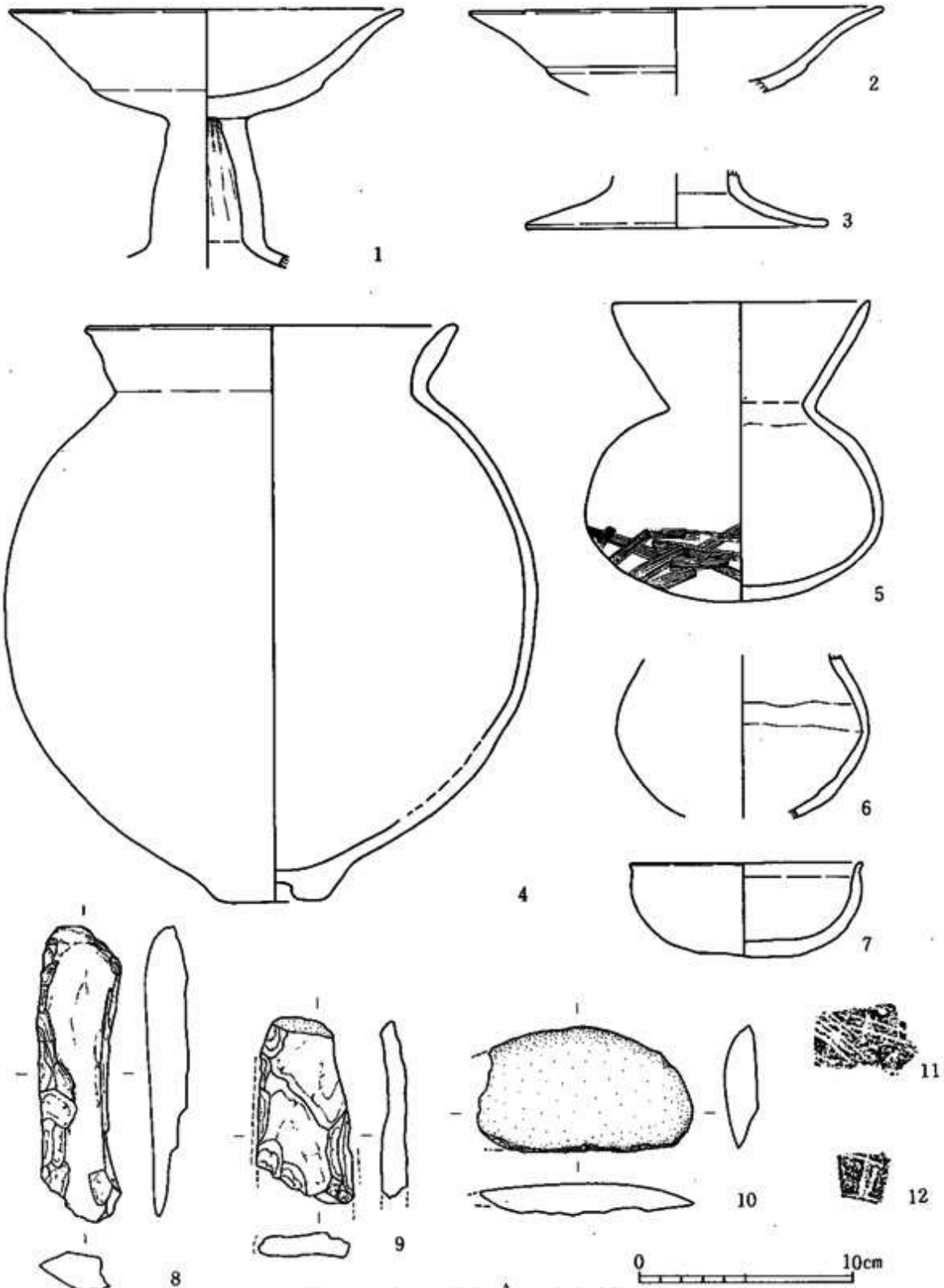
第5図　土坑14、集石炉1・2出土遺物



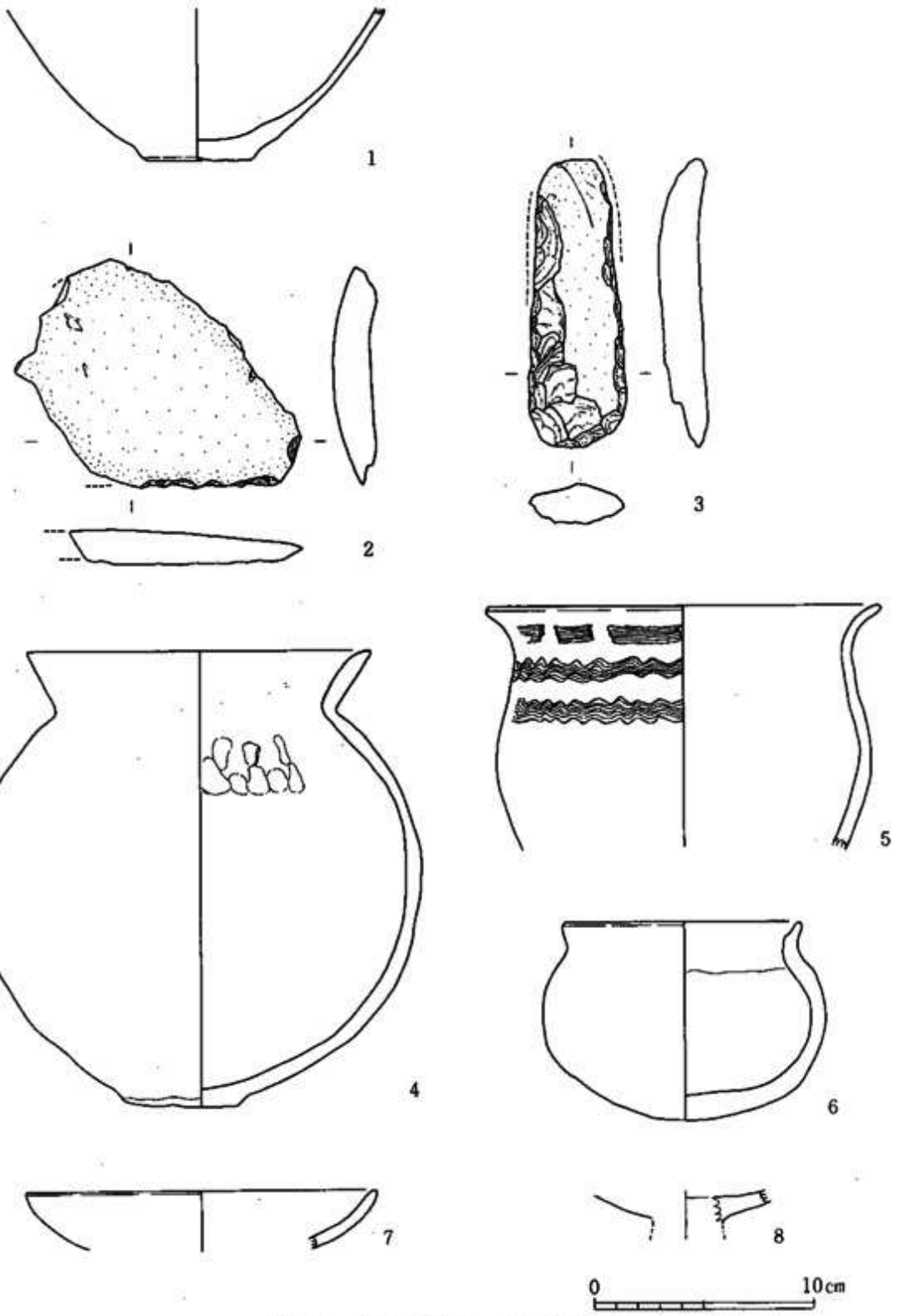
第6図　竪穴1、方形周溝墓1・2・3出土遺物



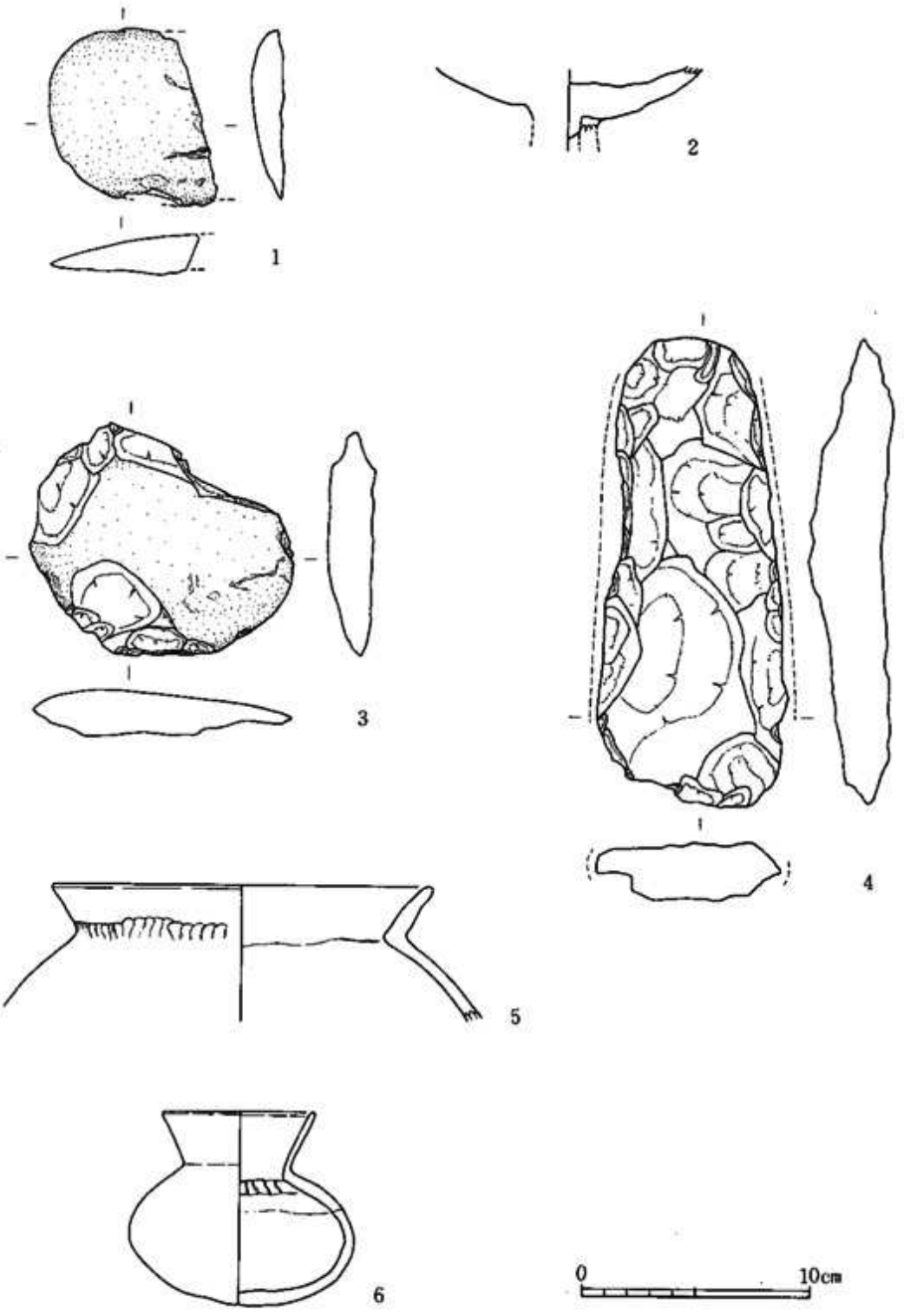
第7図　方形周溝墓4・5・6・7出土遺物



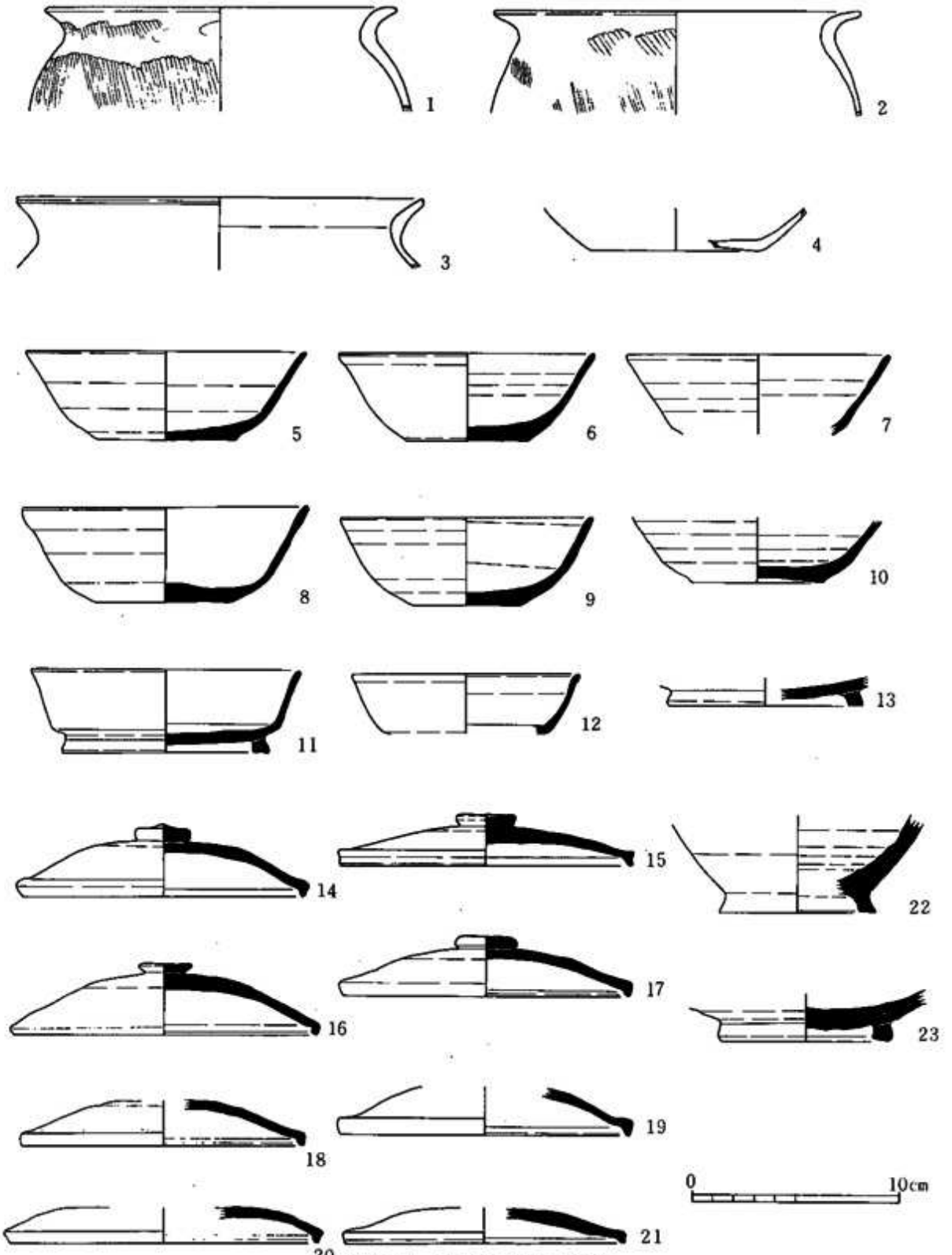
第8図　方形周溝墓7・8出土遺物



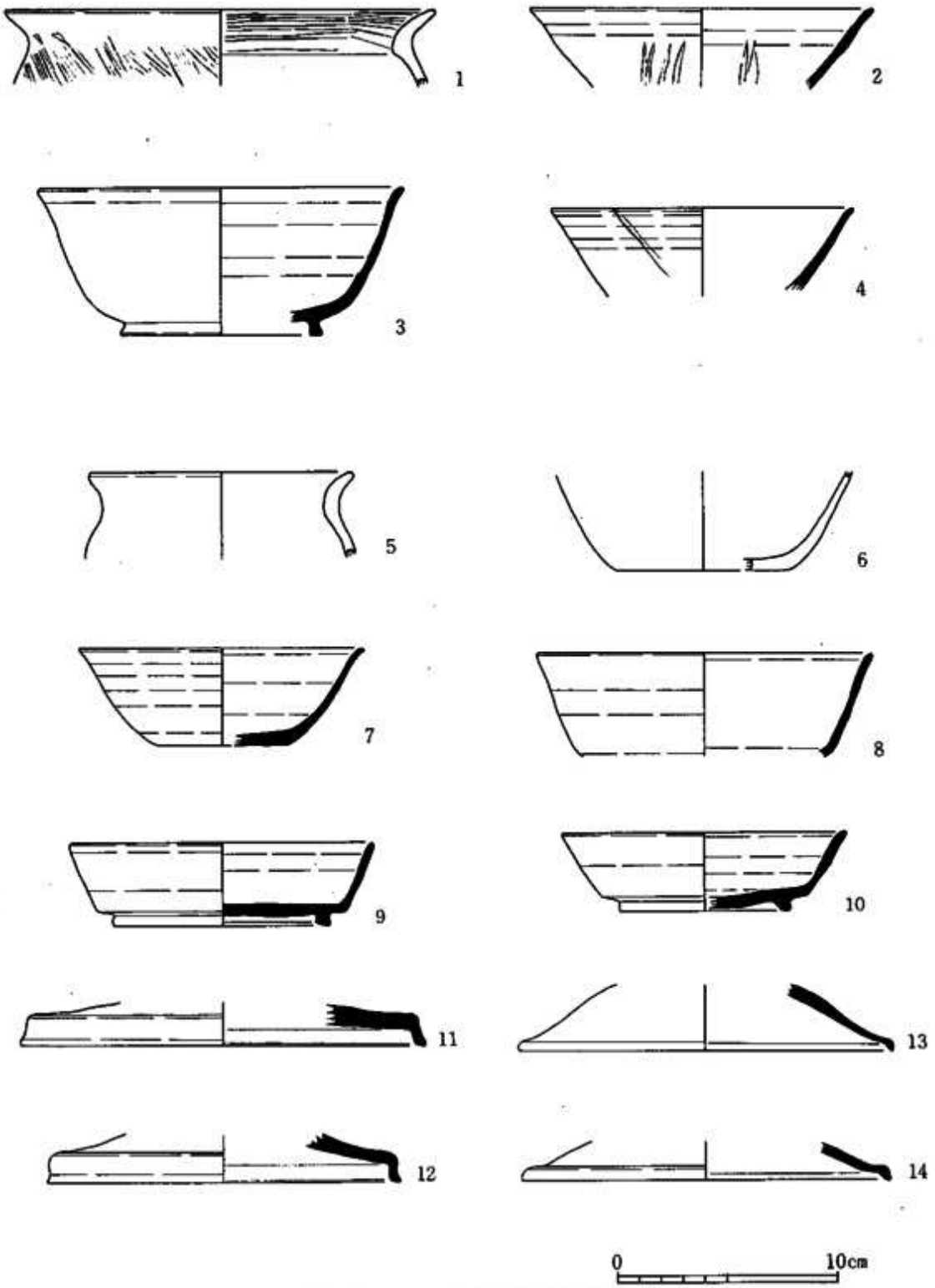
第9図　方形周溝墓9・11出土遺物



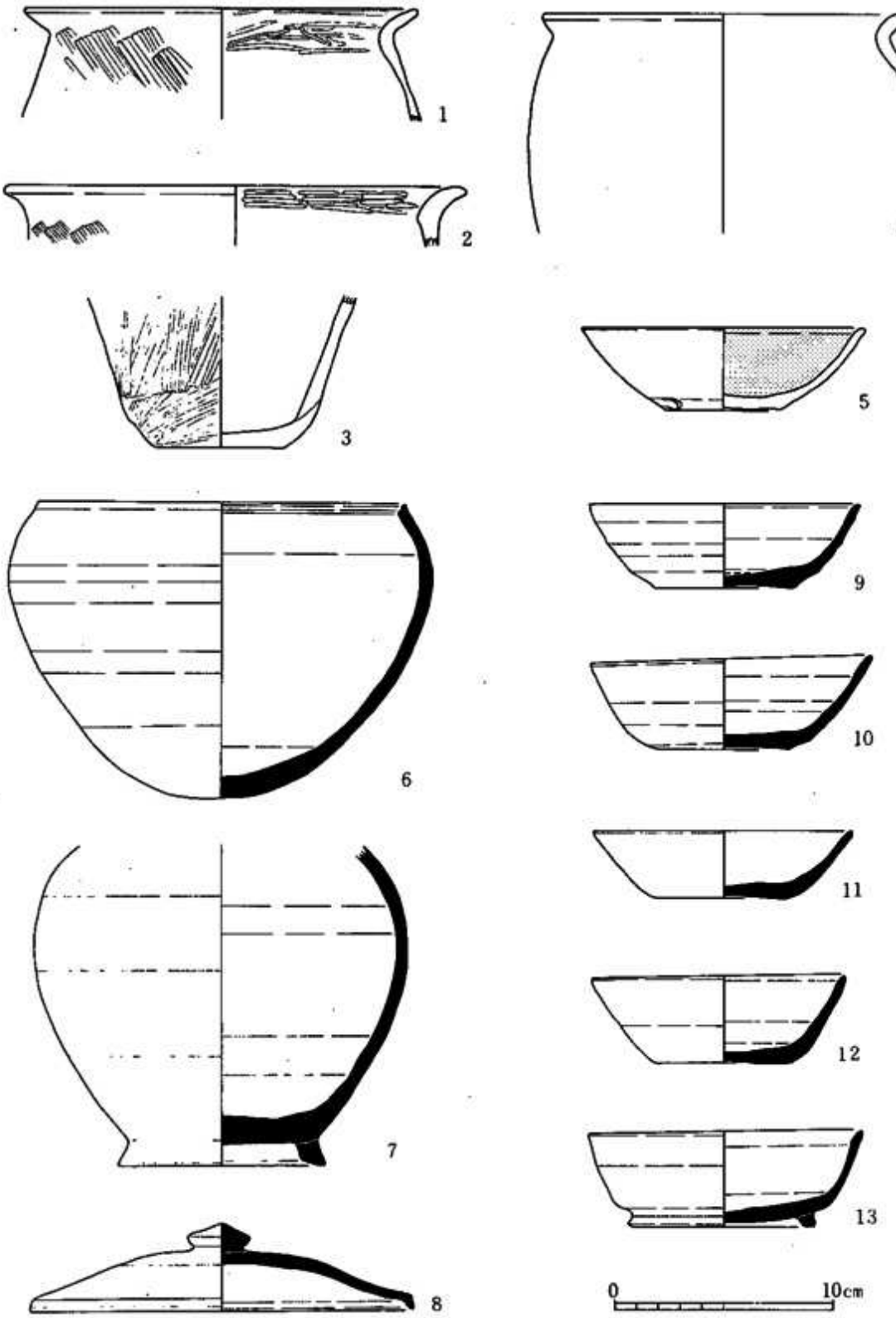
第10図　方形周溝墓12・13・14・15出土遺物



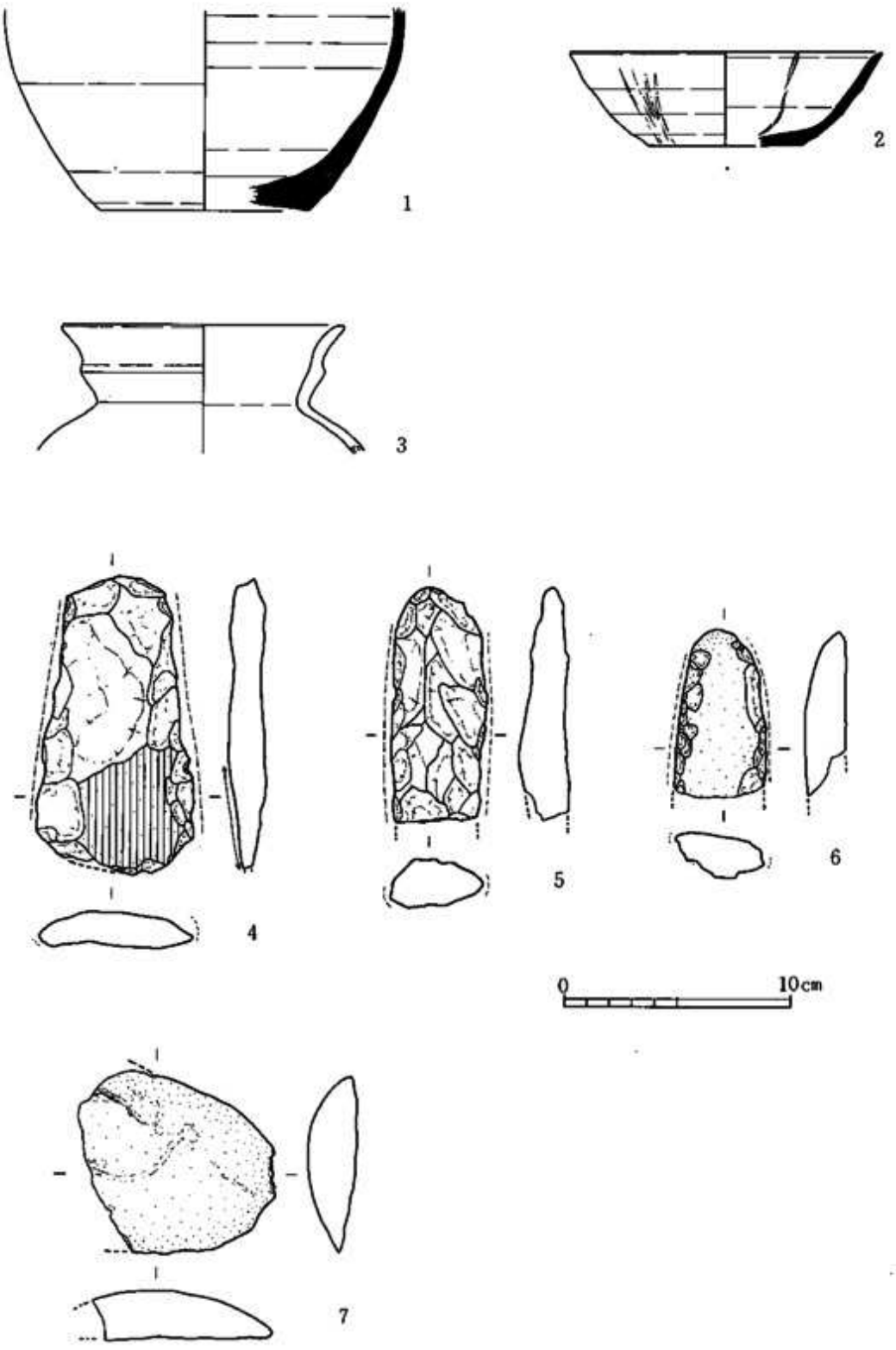
第11図　1号住居址出土遺物



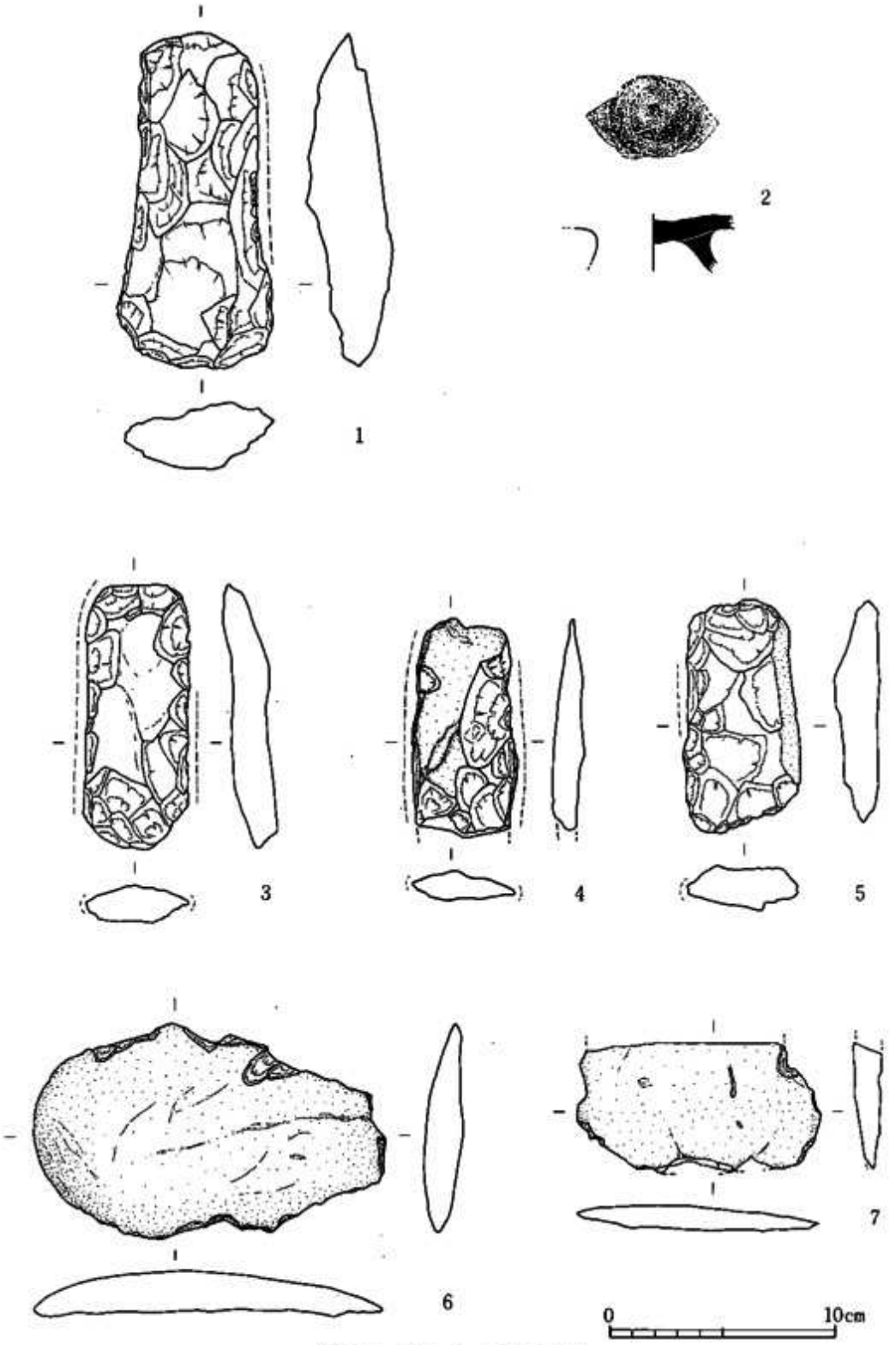
第12図　2・4号住居址出土遺物



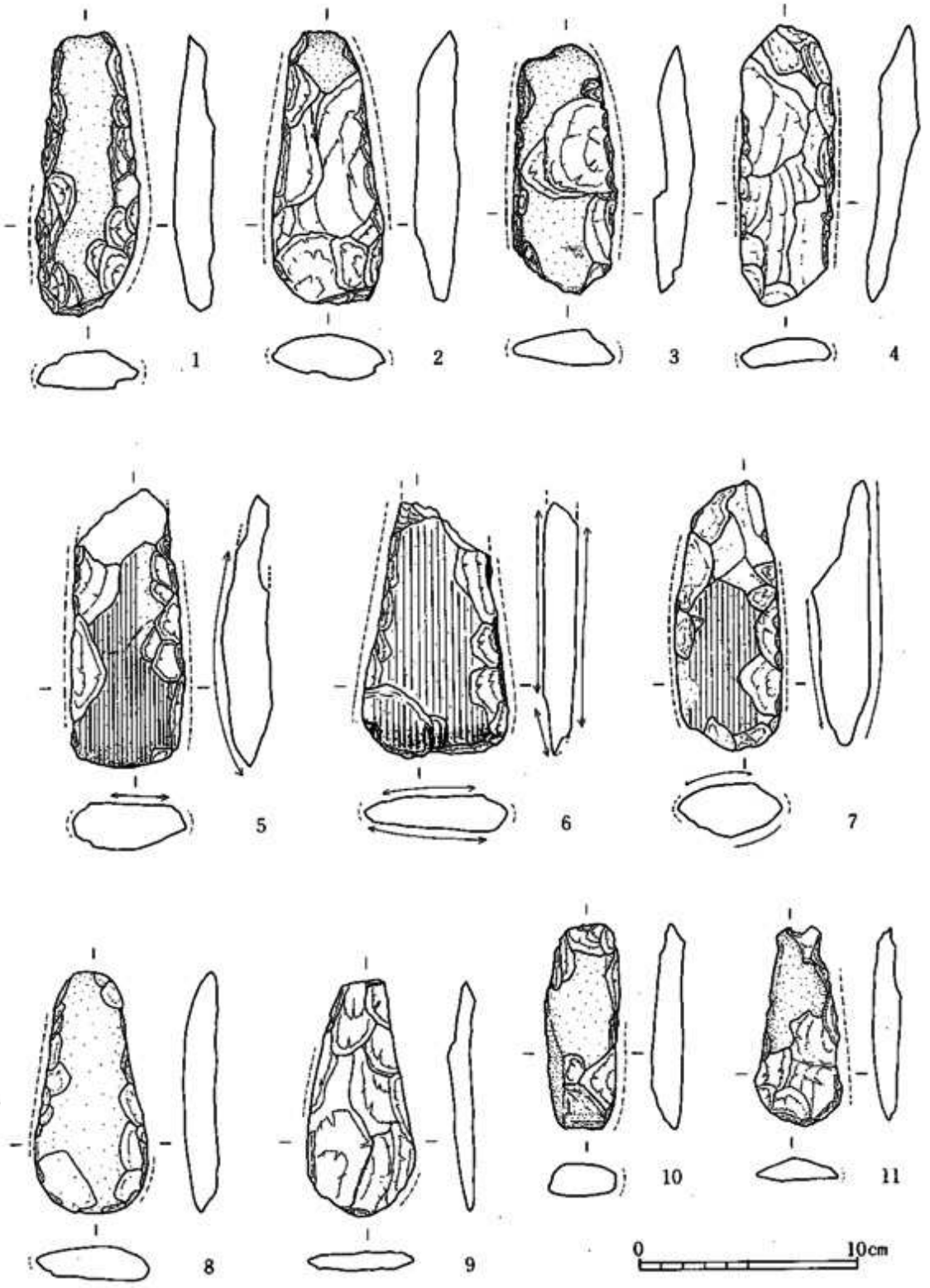
第13図　5・6号住居址出土遺物



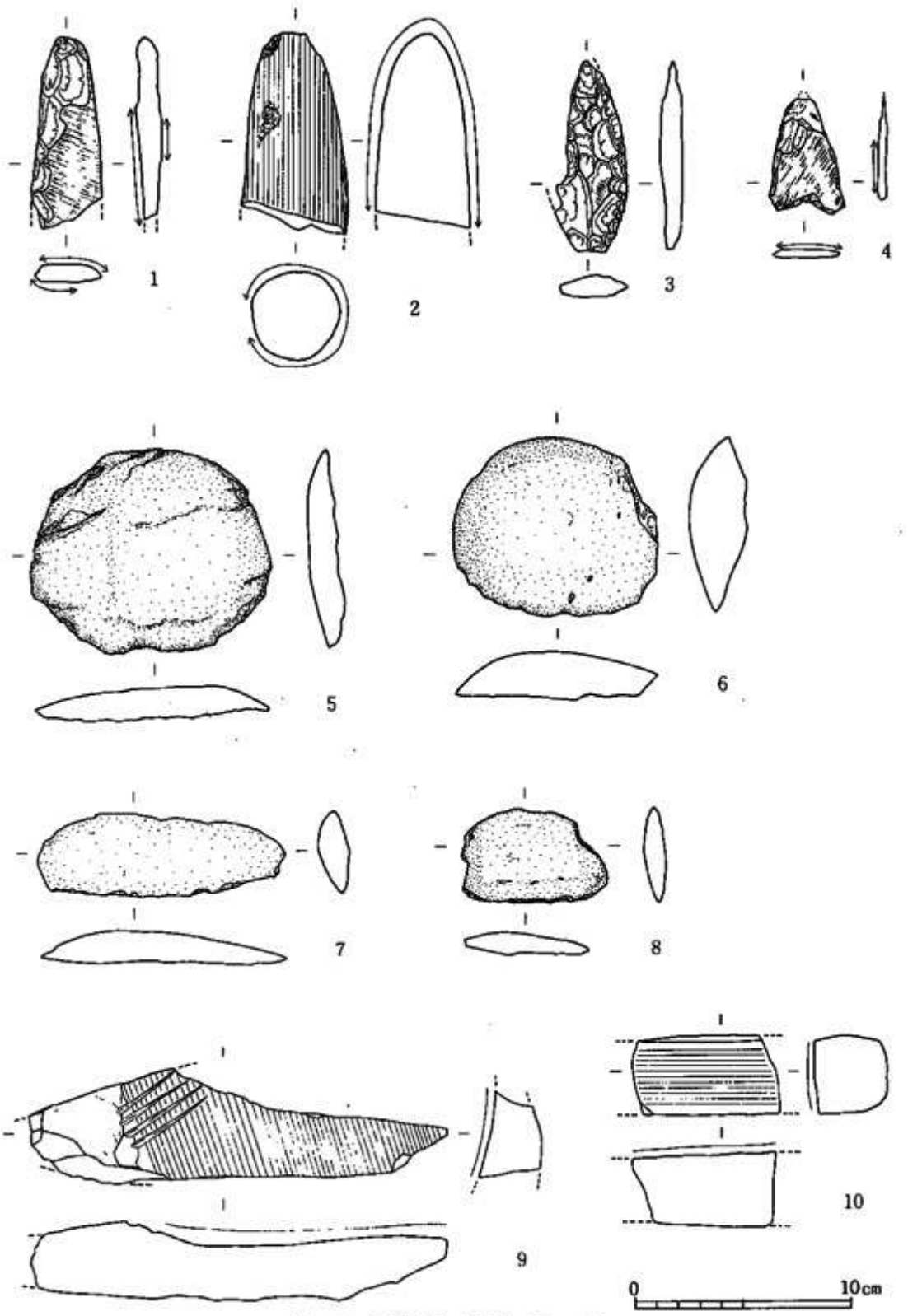
第14図　土坑３・11、溝址２出土遺物



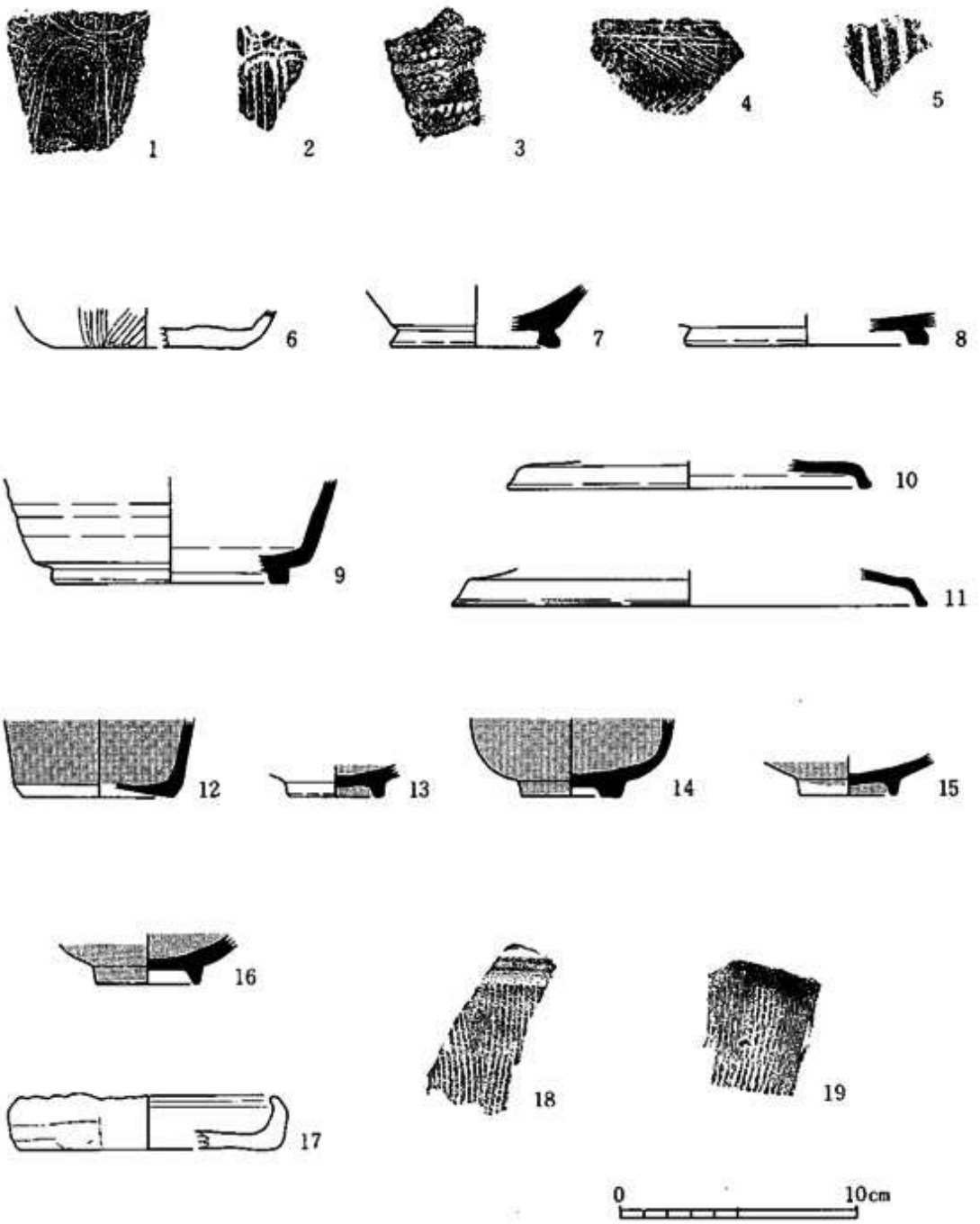
第15図　溝址４・５出土遺物



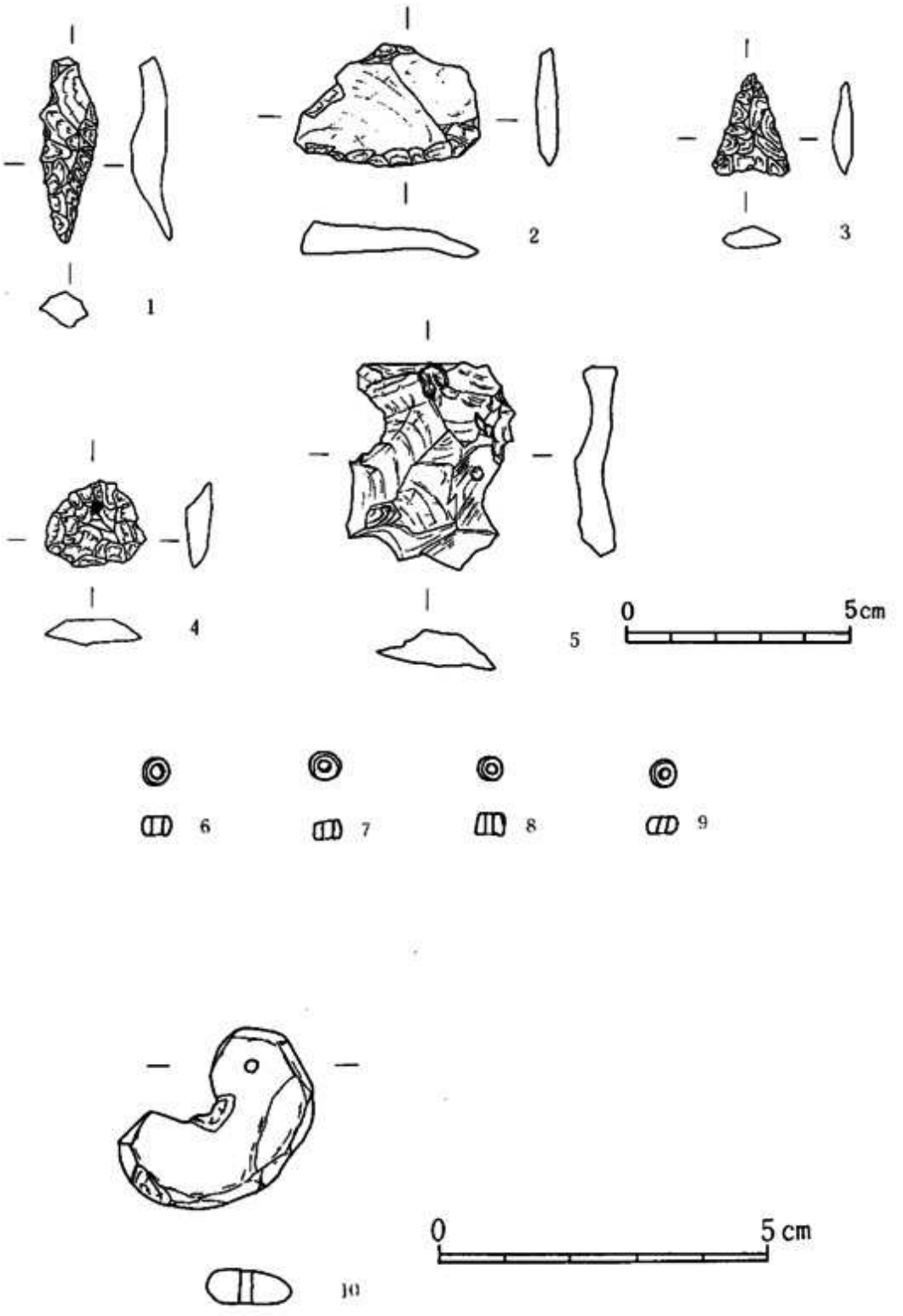
第16図　遺構外出土遺物（その１）



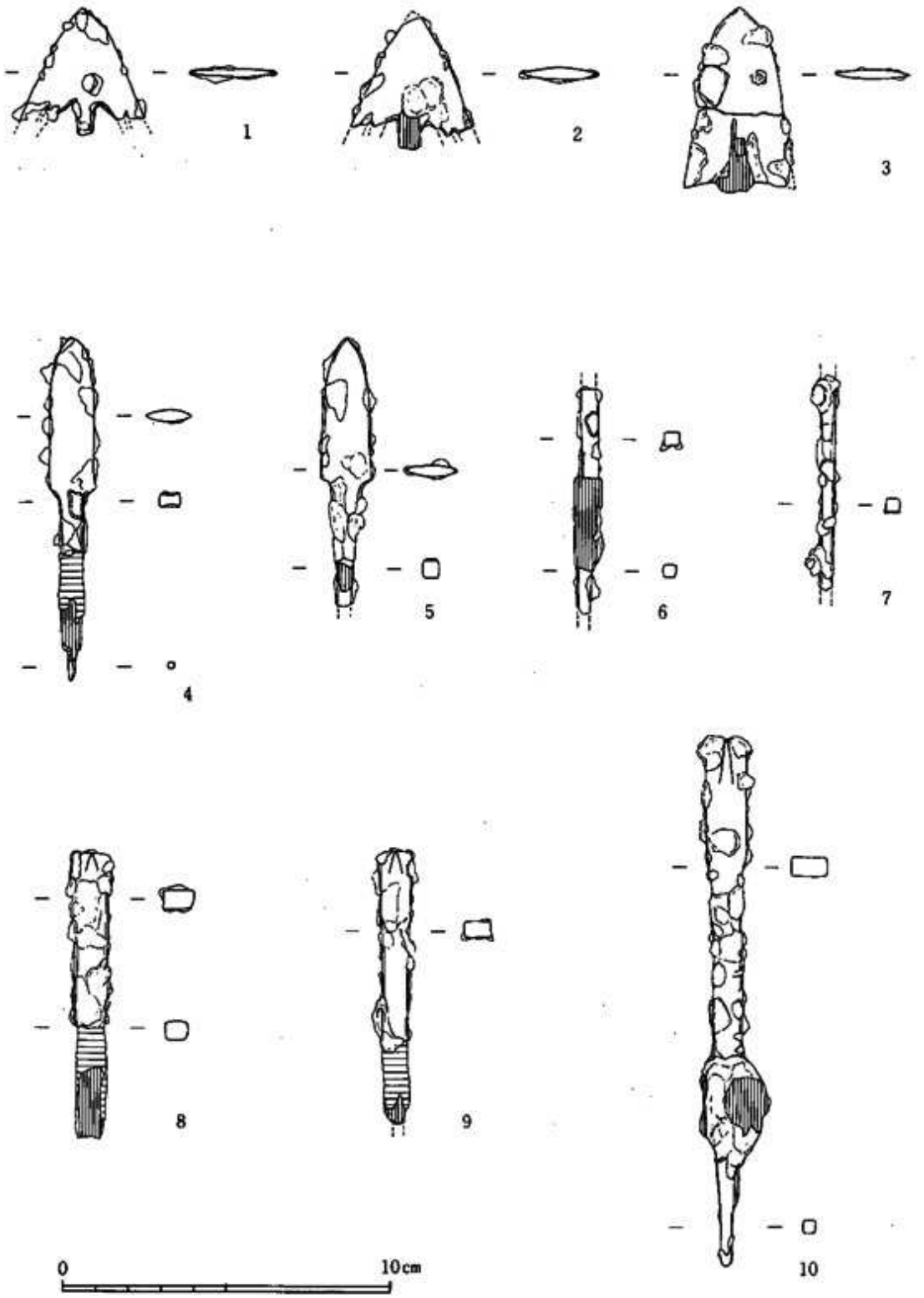
第17図　遺構外出土遺物（その２）



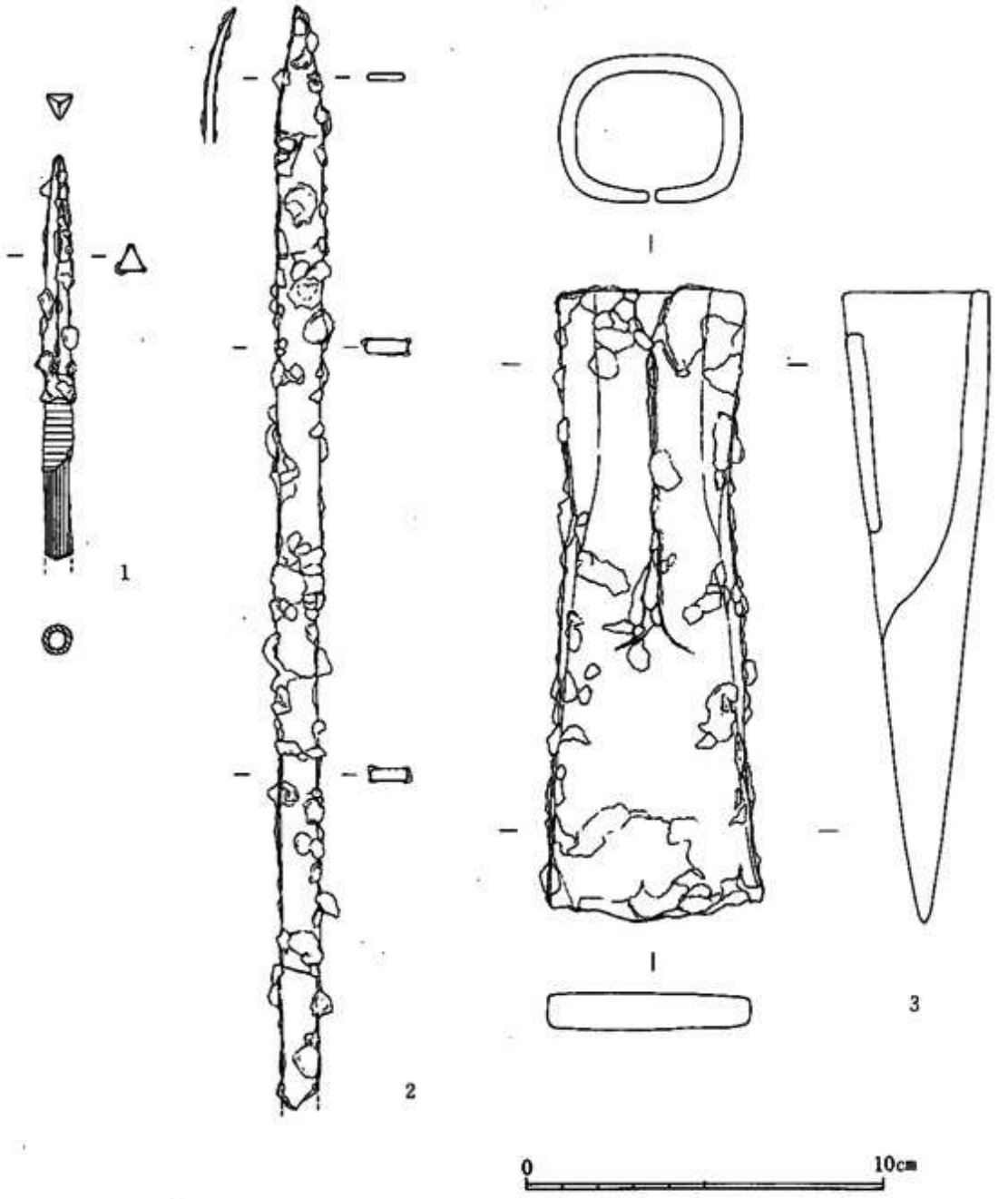
第18図　遺構外出土遺物（その３）



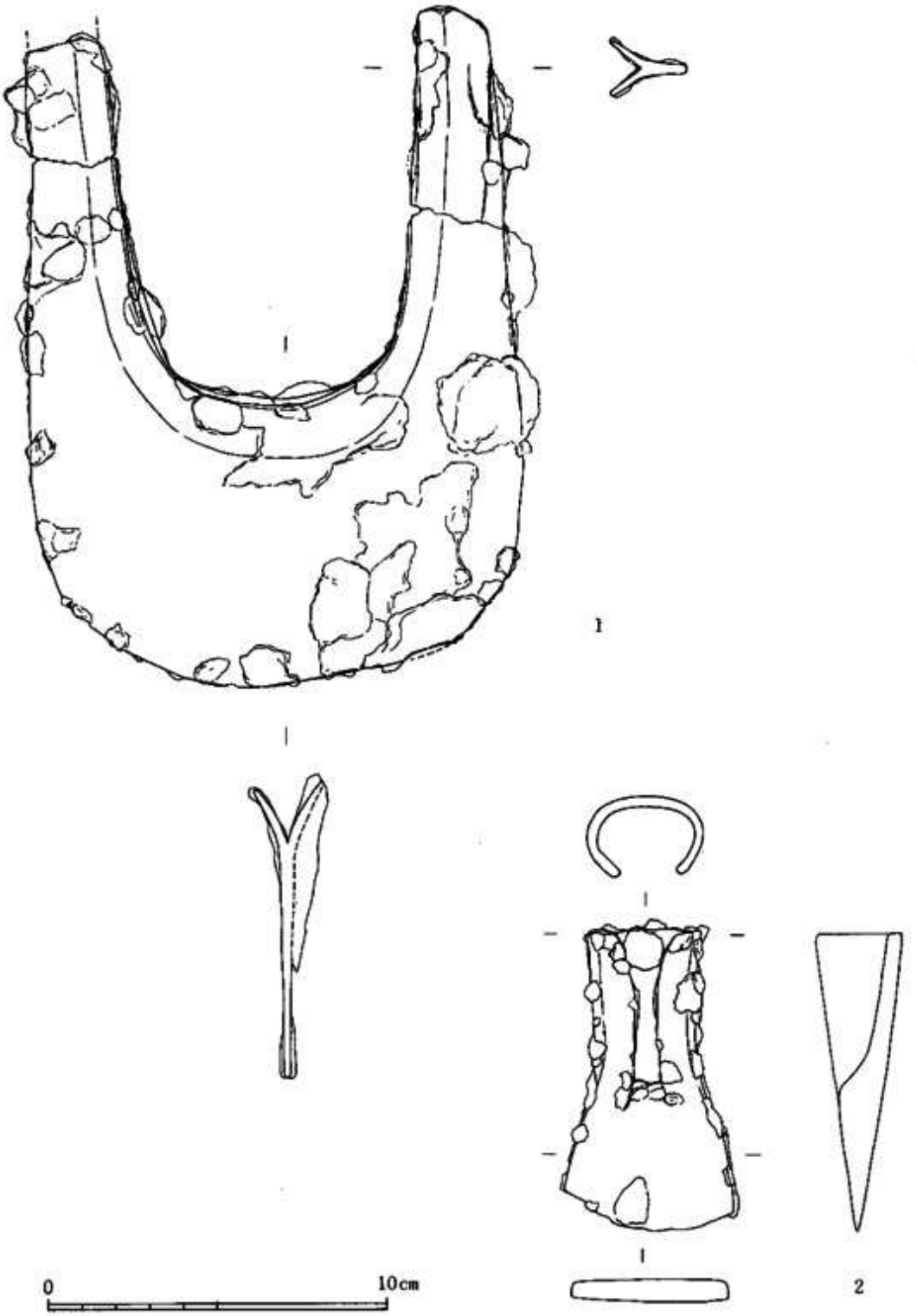
第19図　遺構外、方形周溝墓11、土壙墓２出土遺物



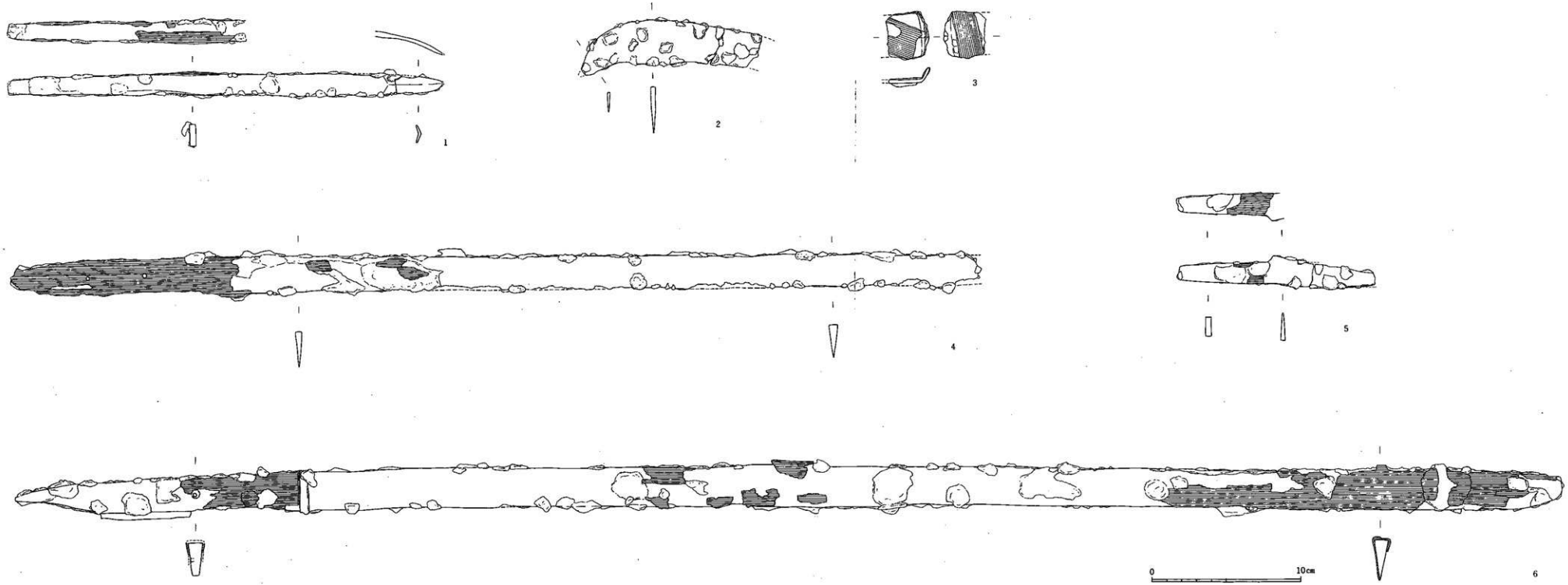
第20図　土壙墓１出土鉄器（その１）



第21図　土壙墓１出土鉄器（その２）



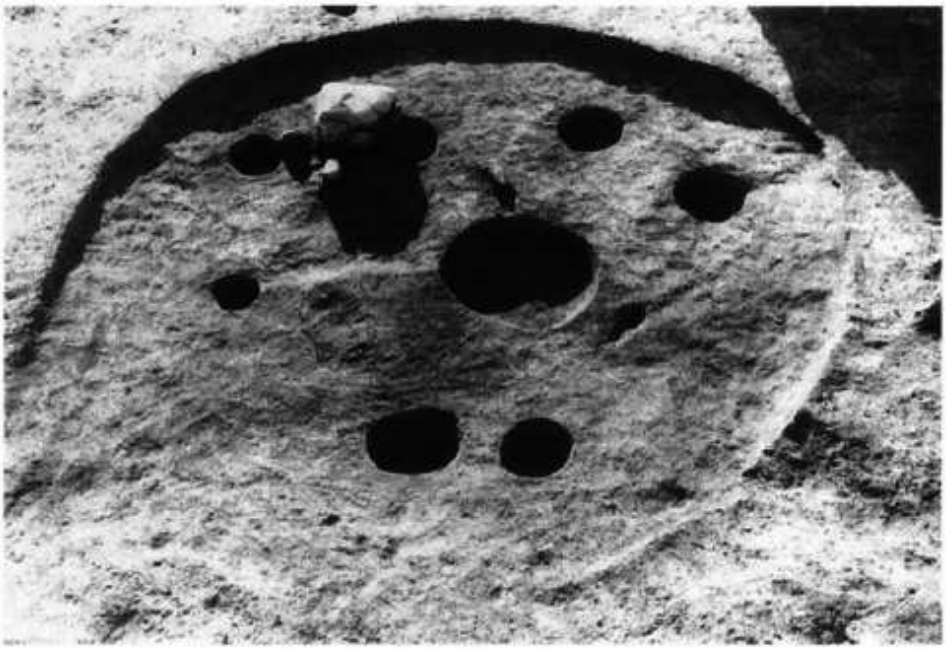
第22図　土壙墓２出土鉄器



第23図　土壙墓２、方形周溝墓11出土鉄器

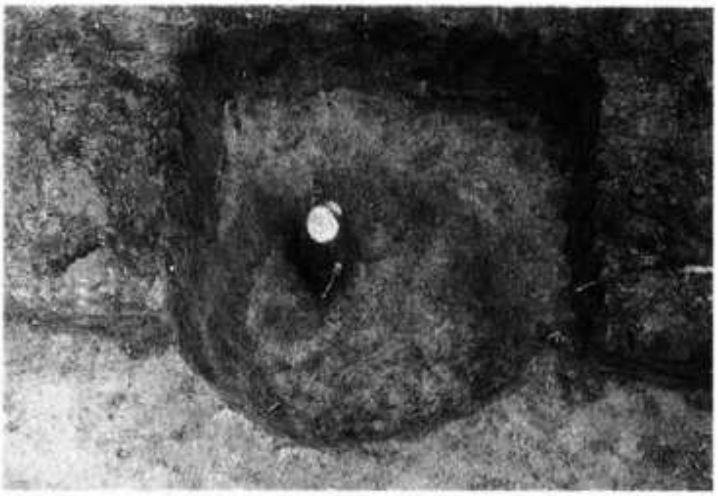
写真図版

3 号住居址と溝址 3

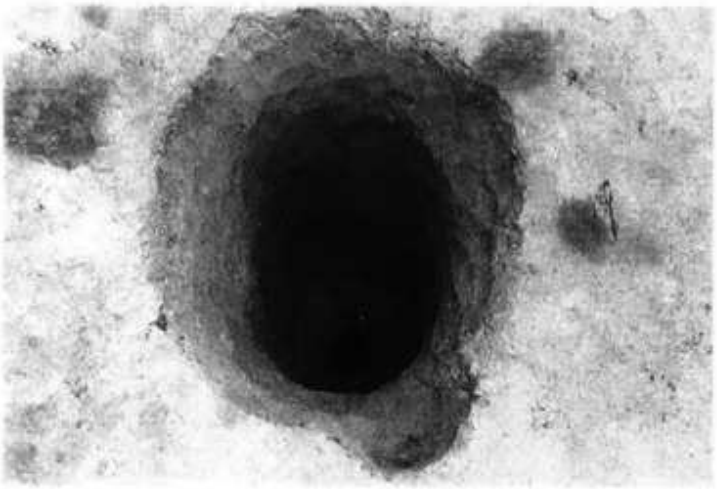


7 号住居址

図版 6

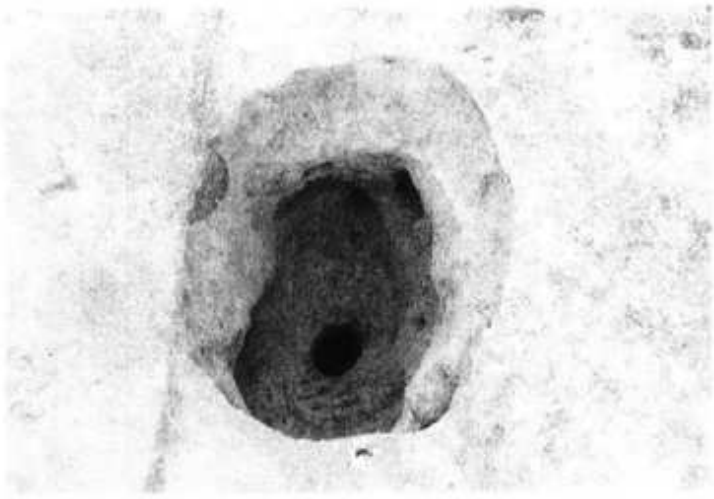


土坑 1



土坑 2

土坑 5



土坑 7

土坑 8

土坑 9

図版 8

土坑10

土坑13

土坑14

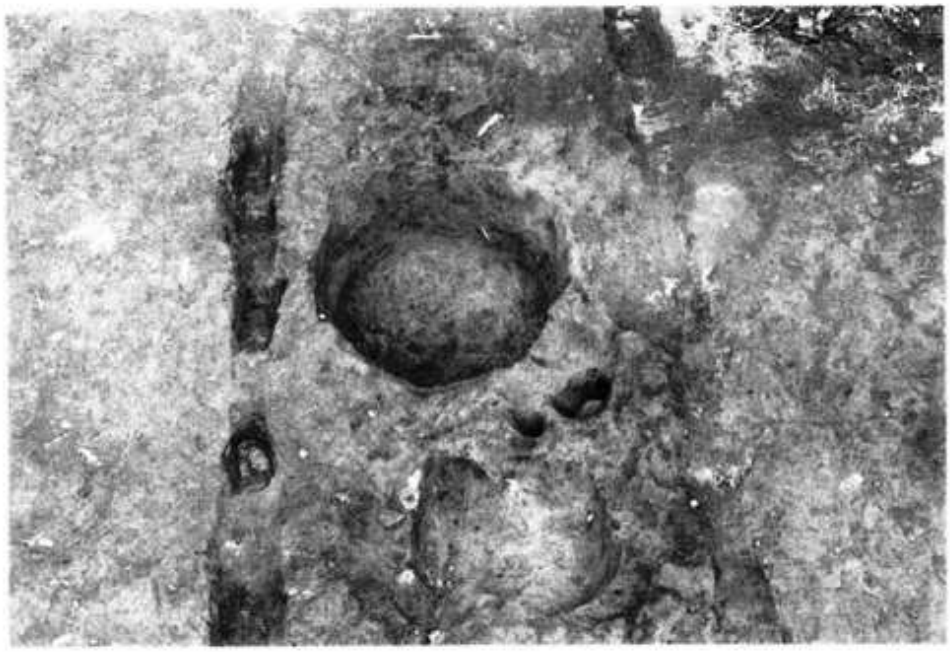
集石炉 1

集石炉 2

集石炉 3

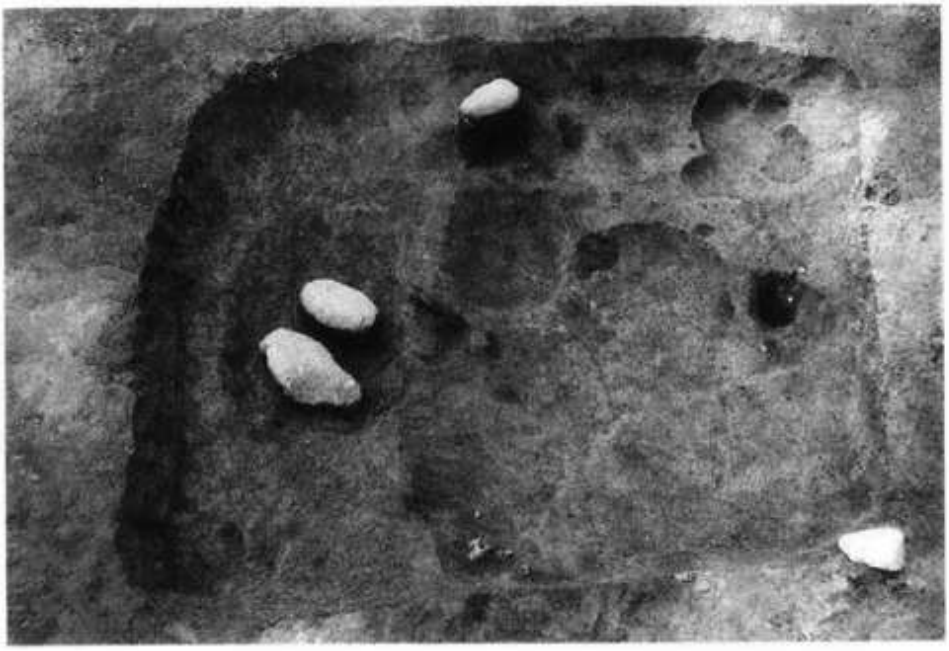
図版10

弥生時代の竪穴１



平安時代の土坑３

1号住居址

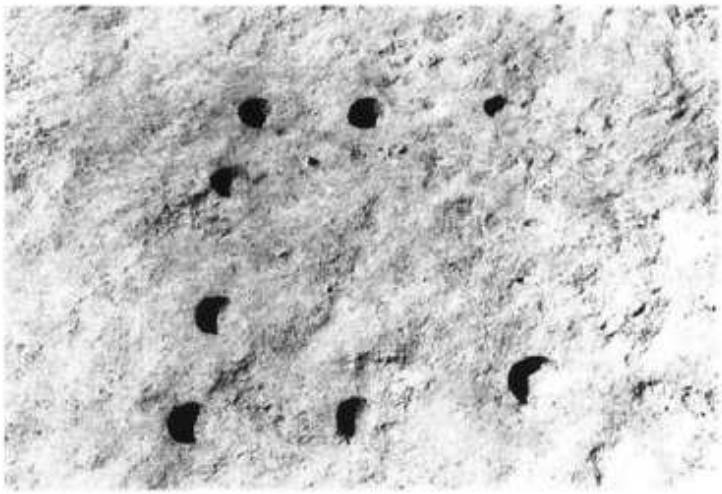


2号住居址

図版12

4号住居址

5・6号住居址



掘立柱建物址 1

土坑 4

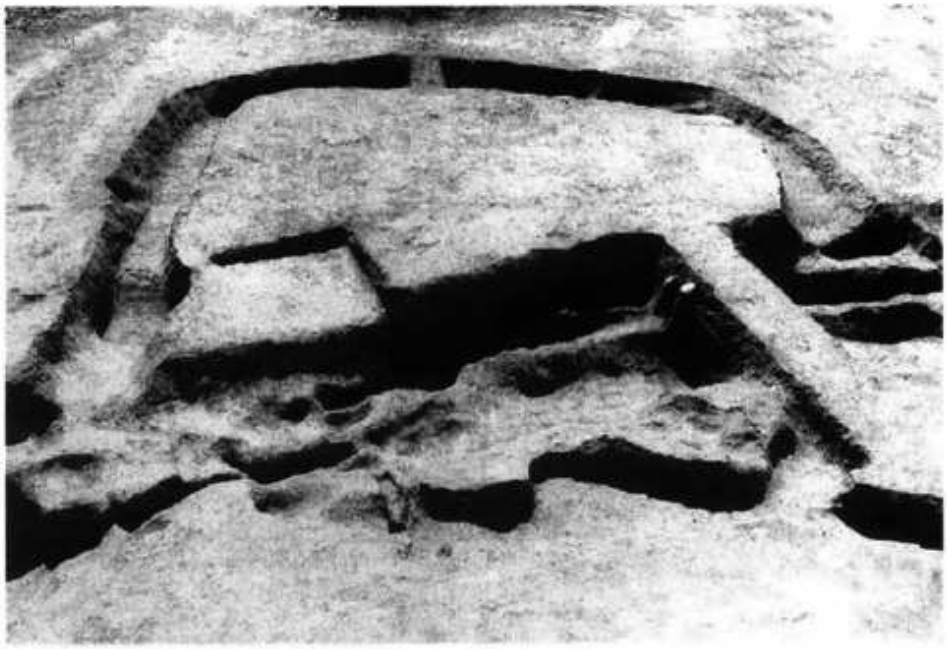
溝状址 3 ・ 4

図版14

溝址１と攪乱

溝址３・４

溝址７



方形周溝墓 1

方形周溝墓 2 と 4

方形周溝墓 3

方形周溝墓 5 （右奥は方形周溝墓12，奥は方形周溝墓13）

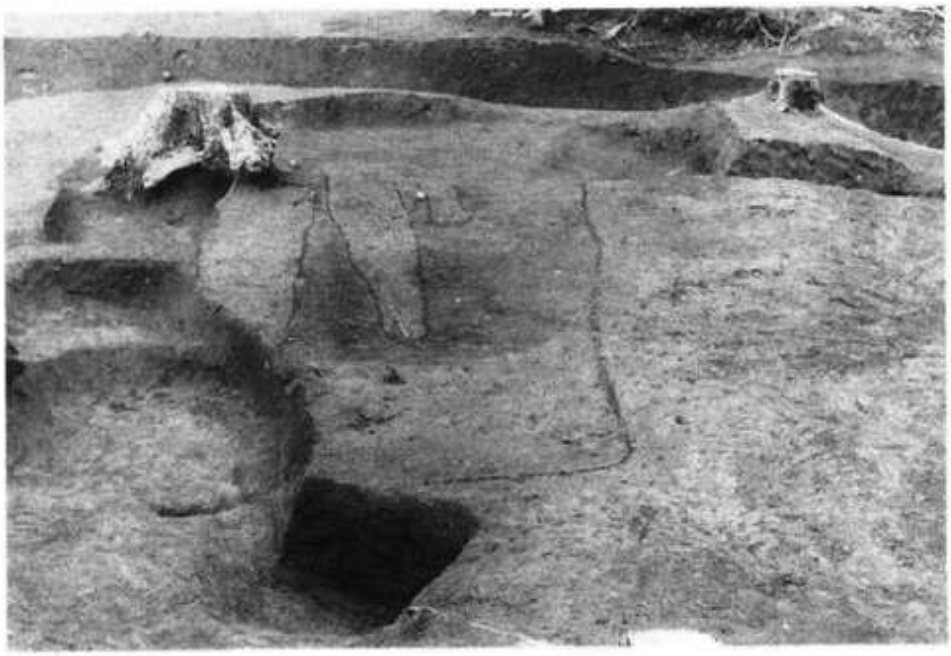
方形周溝墓 6

方形周溝墓 8

方形周溝墓 9

方形周溝墓10

方形周溝墓11



同主体部

方形周溝墓13

方形周溝墓14

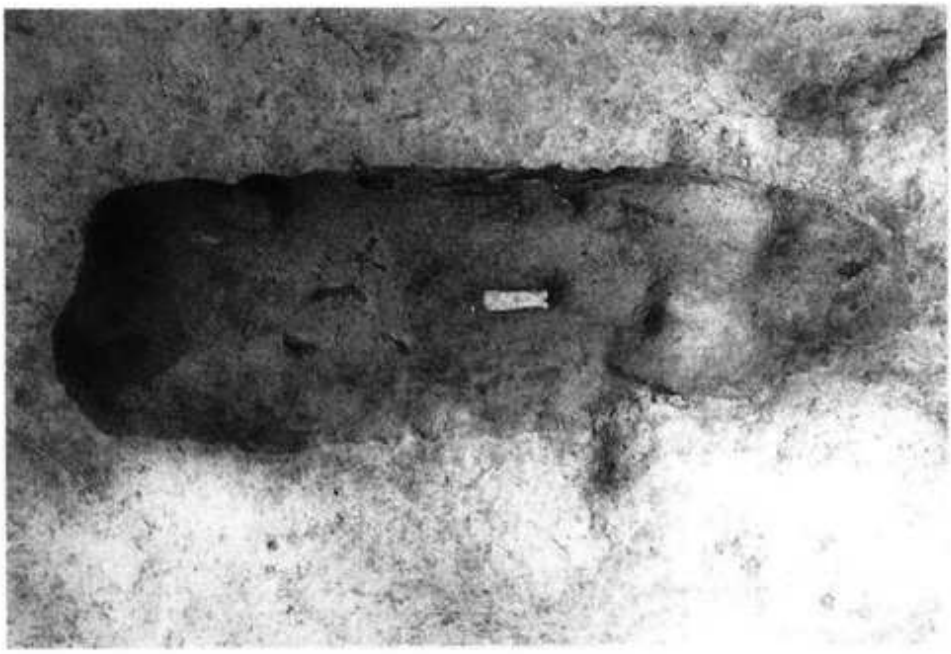
方形周溝墓15

方形周溝墓16

図版22

方形周溝墓17

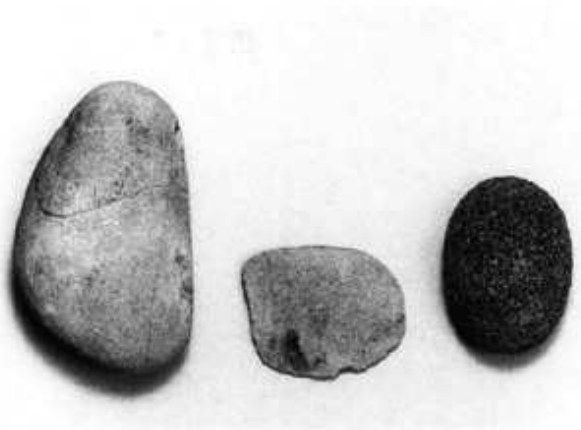
方形周溝墓18

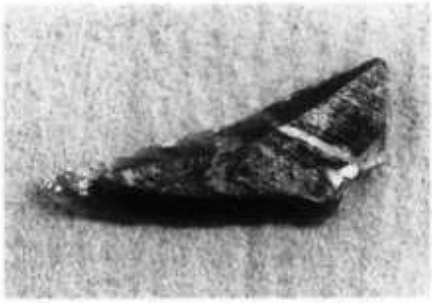


土壙墓 1

土壙墓 2

図版24





3号住居址出土石器

7号住居址出土遺物

集石炉1出土
押型文土器

集石炉2出土

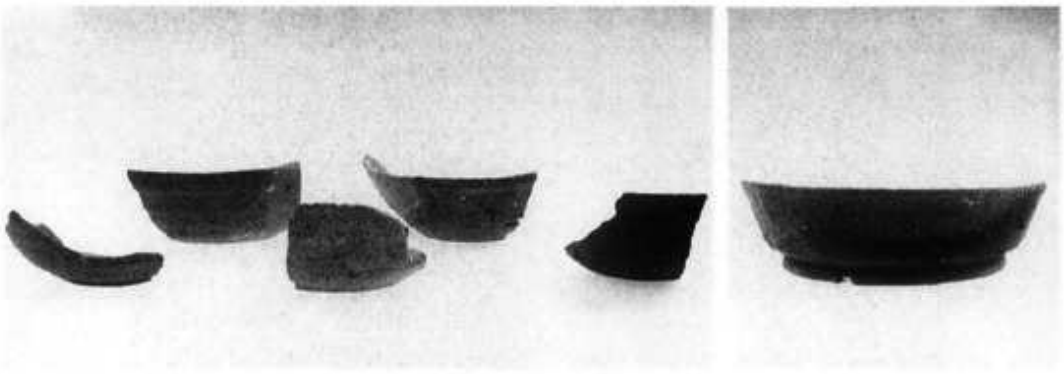
土坑出土
打製石斧

土坑13出土
土器

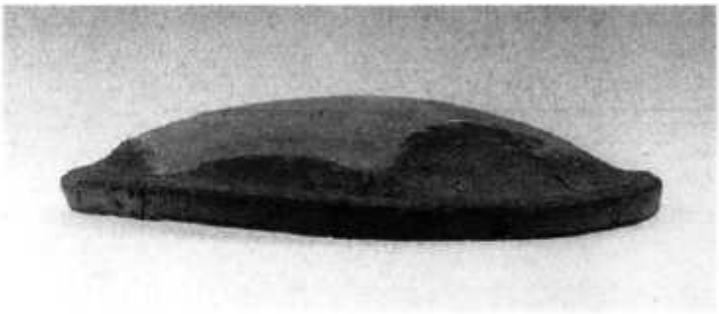
土坑14出土
土器

竪穴1出土土器

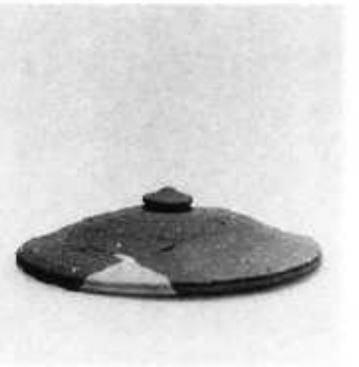
図版26



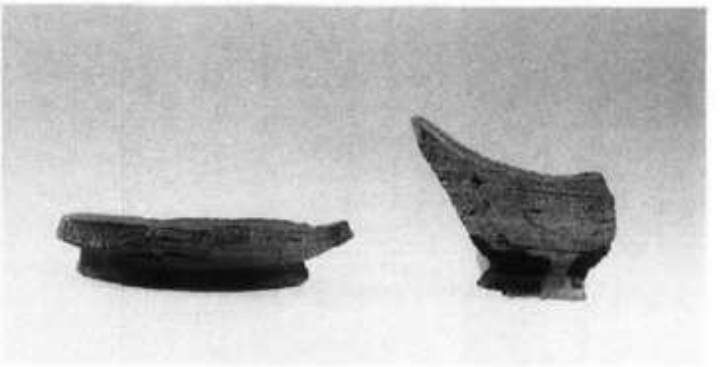
1号住居址出土
須恵器

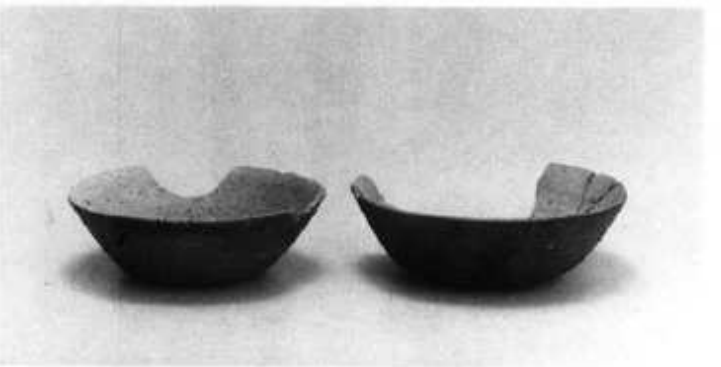


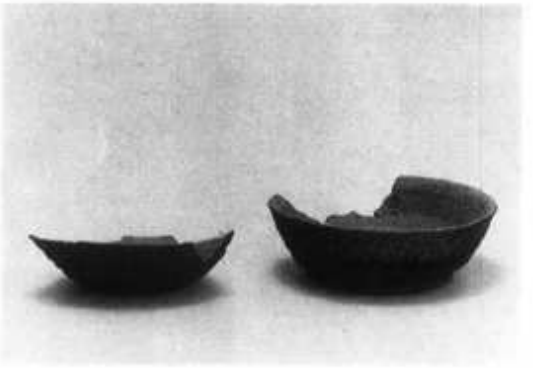
2号住居址出土
須恵器　坏

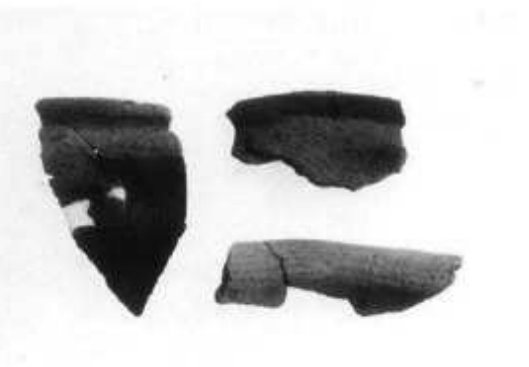


5・6号住居址出土
須恵器および
土師器



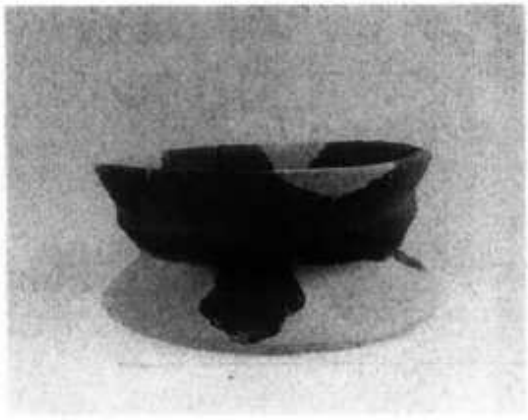






図版28

土坑３号出土　須恵器 壺

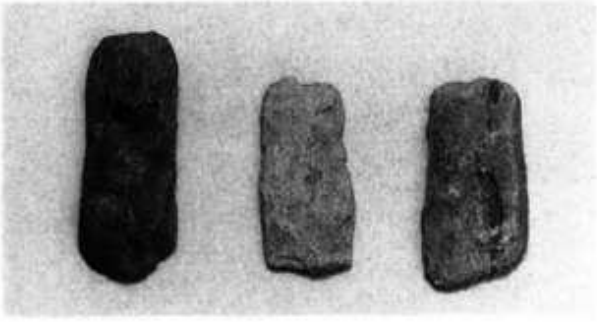


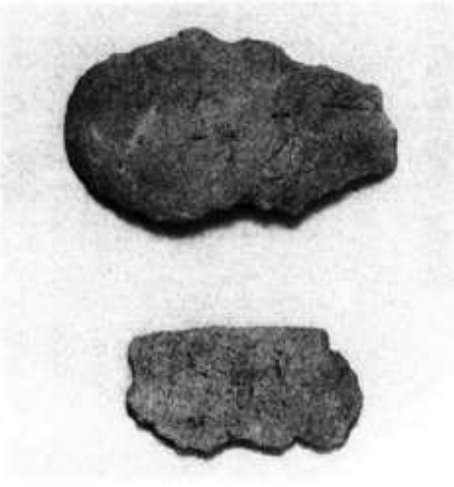
土坑11出土　土師器　壺

溝址２出土 石器類

溝址４出土 打製石斧

溝址５出土　石器類





方形周溝墓 3
出土　土師器

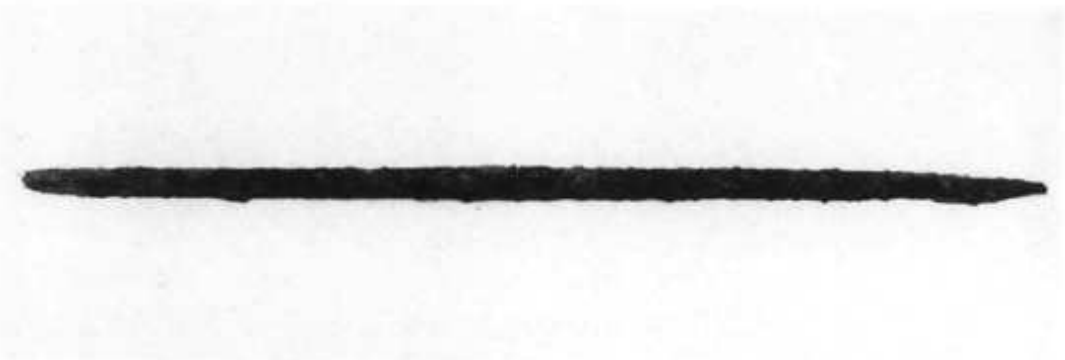
方形周溝墓 4
出土　土師器

方形周溝墓 7 出土 土師器

図版30

方形周溝墓11

周溝出土土器

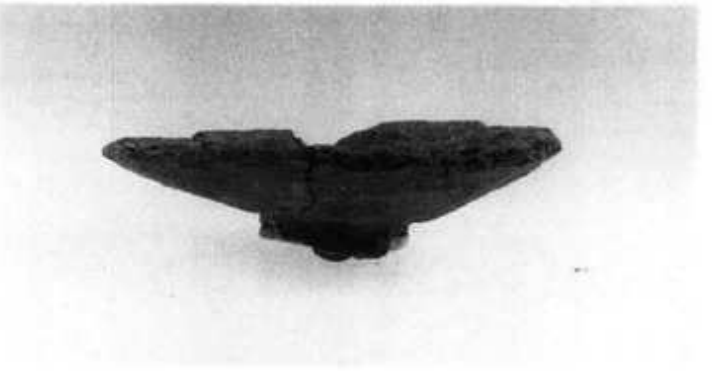


方形周溝墓11　主体部出土　直刀

同　刀子

同石玉

方形周溝墓12
周溝出土　高坏

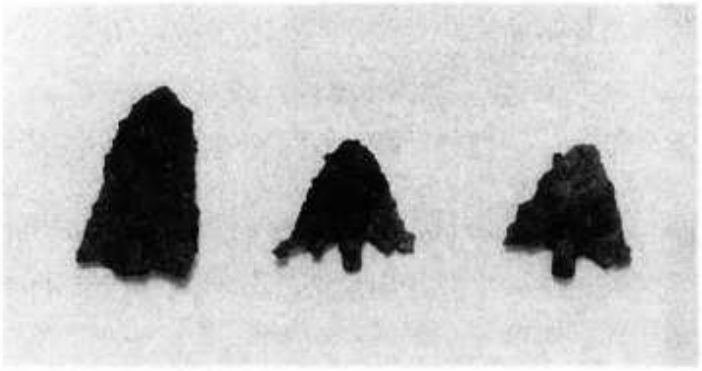


方形周溝墓14
周溝出土石器

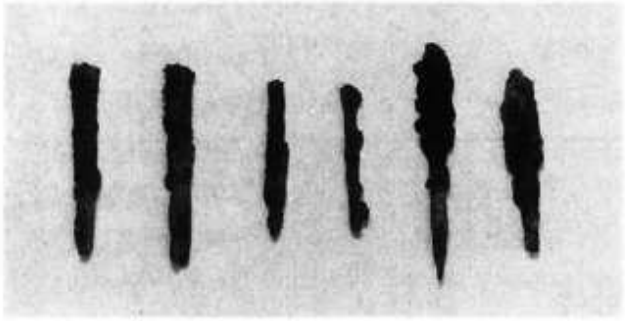
方形周溝墓15　周溝出土遺物

図版32

土壙墓1　出土遺物



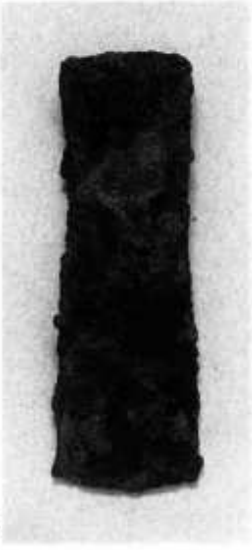
平根型
鉄鏃



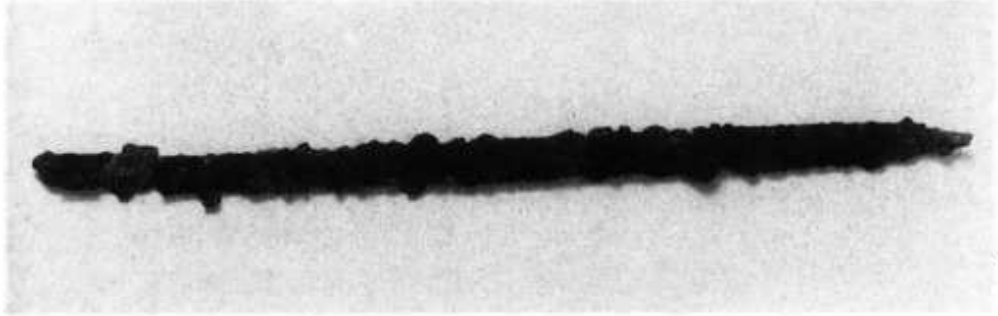
右3本　柳葉型鉄鏃
中2本　鉄鏃の茎
左2本　ノミ

ノミ

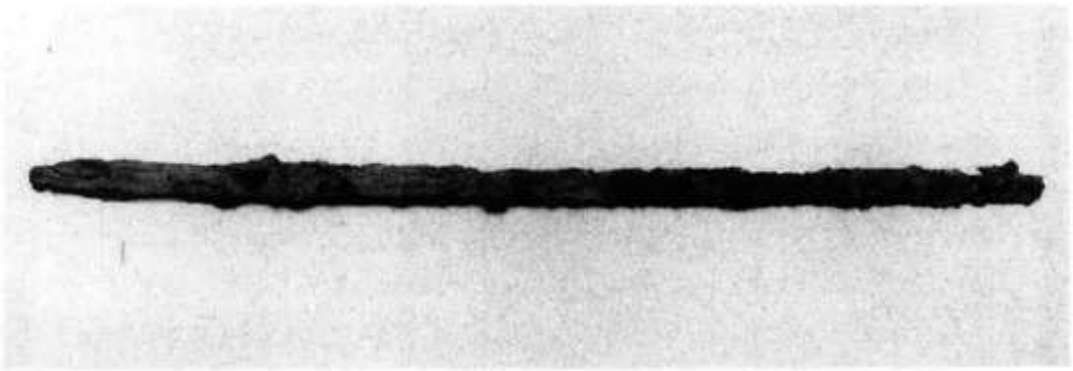
錐状工具



鉄鏃

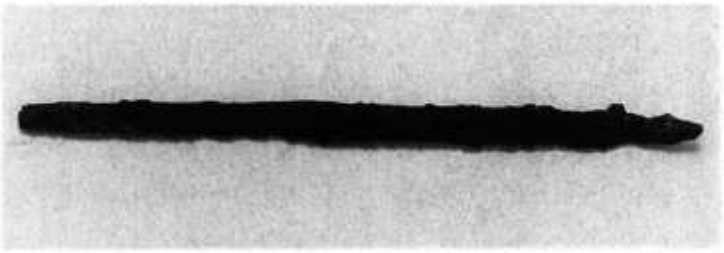


やりがんな
鉋



直刀

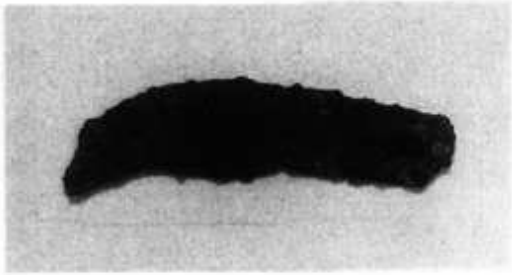
土壙墓2出土鉄器



鉇

鉄鋤

鉄斧



鎌

白玉

図版34

尖頭器

ランドスクレーパー

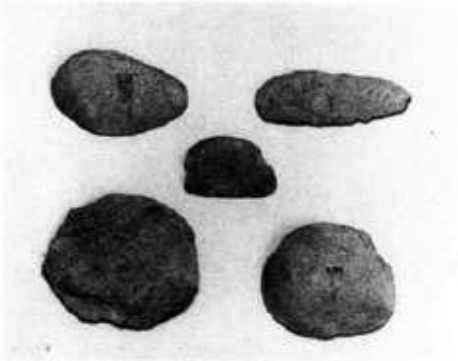
石　鏃

石錐

△ 打製石器 ◁

△

◁ 横刃形石器



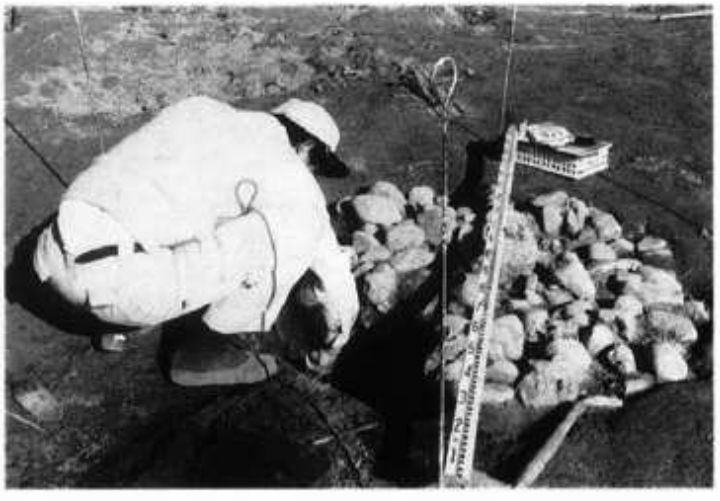
石製模造品 ▷

遺構外出土
遺物

砥石 ▷

作業風景

方形周溝墓７の掘り下げ



集石炉の断面調査

図版36

写真撮影

遺構測量

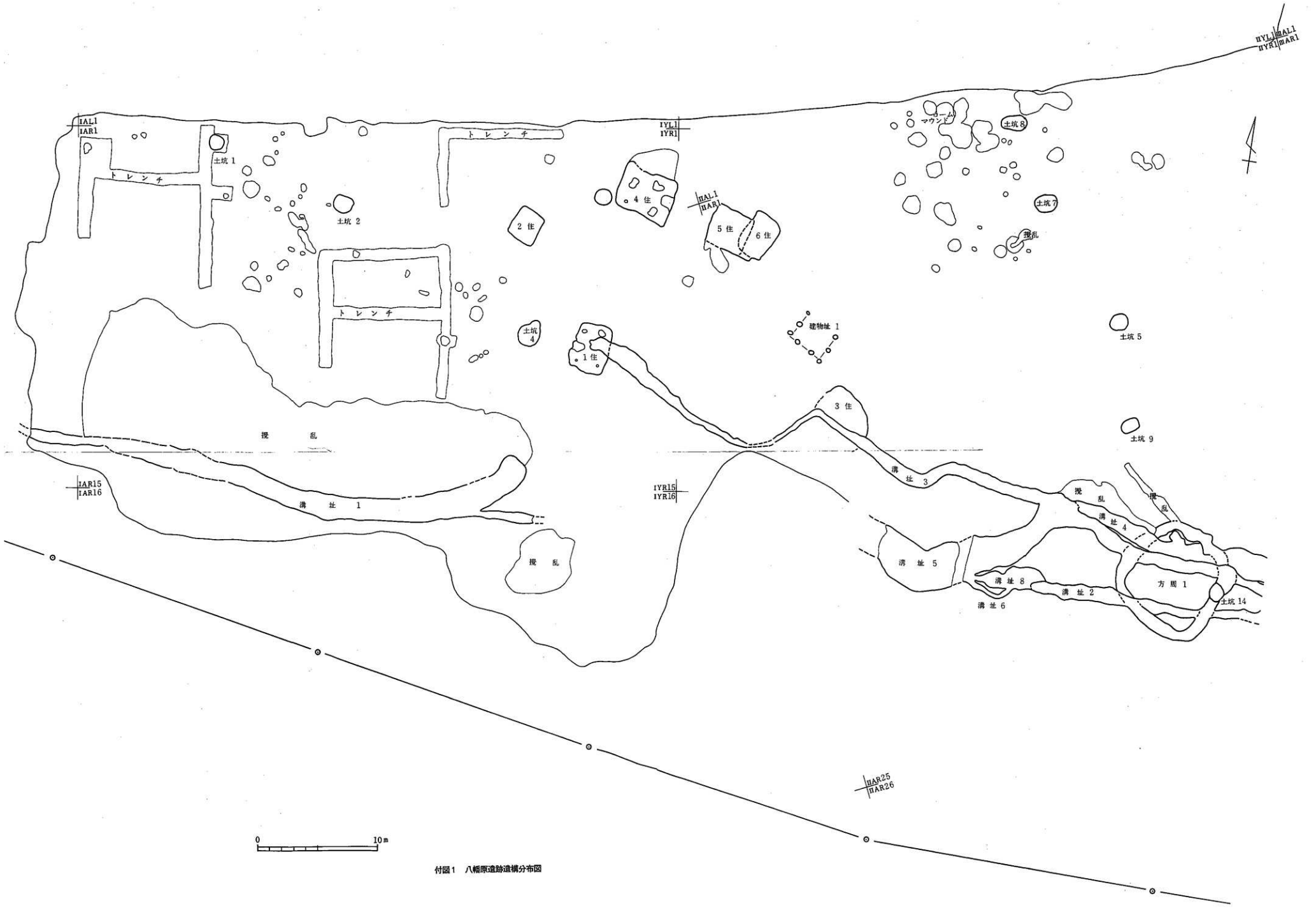
見学会

八幡原遺跡

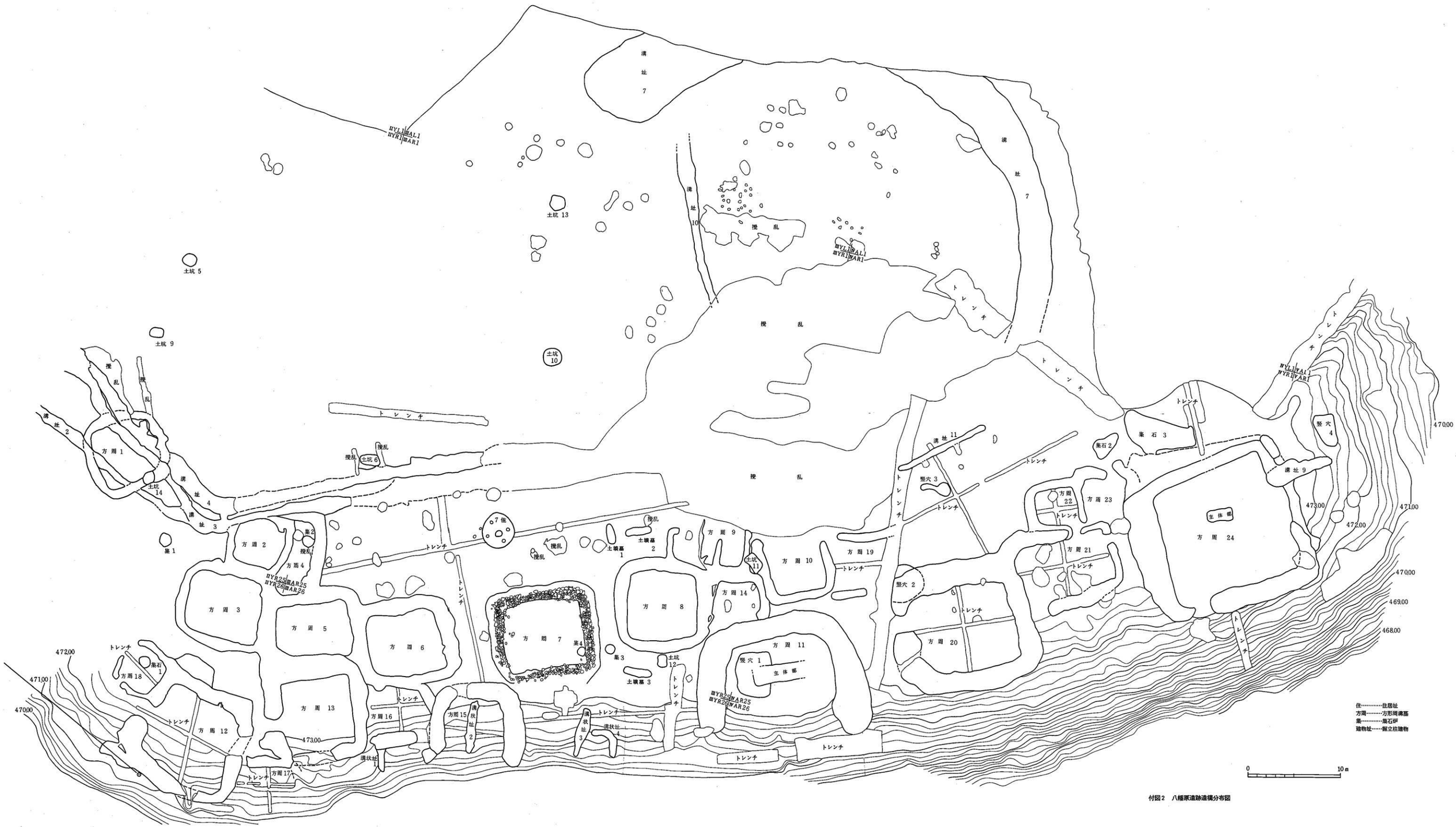
一般国道153号飯田バイパス（３工区）
用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成４年３月19日　印刷
平成４年３月19日　発行

編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会
印　刷　株式会社　秀　文　社



付図1　八幡原遺跡遺構分布図



付図2　八幡原遺跡遺構分布図